

重松逸造先生へ 感謝とともに



温故創新
重松逸造

〔重松逸造先生の直筆による〕

「重松逸造先生とのお別れの会」実行委員会
平成24年4月22日 於 学士会館

重松逸造先生へ 感謝とともに

「重松逸造先生とお別れの会」実行委員会
平成 24 年 4 月 22 日 於 学士会館

ご挨拶

「重松逸造先生とのお別れの会」実行委員会代表

柳川洋、児玉和紀

いつも元気いっぱいの重松逸造先生が体調を崩されたのが2011年3月の初め頃でした。その1か月後に精密検査を受けられ、直ちに治療が必要という診断を受け、入院されました。それから9か月間、先生は長い長い闘病生活に耐えてこられましたが、薬石の効なく2月6日朝逝去されました。いつもお元気で、こよなくお酒を愛された先生のお姿を思い浮かべると、このような悲しい結果になろうとは、未だに信じられない思いでいっぱいです。

現在、先生のご薫陶を受けられた方々が、国内、国外で疫学・公衆衛生学の指導者として、教育、研究、地域活動の現場で活躍しておられます。「重松先生とのお別れの会」の実行委員会としては、この機会に、生前重松先生と親交の深かった方々、ご指導をいただいた多くの方々のご協力を得て、重松先生への思いを残していただくことが大切であると考え、追悼文集「重松先生へ 感謝とともに」をまとめることに致しました。

短い期間での追悼文寄稿の願いをしたにもかかわらず、100人以上の方々から追悼文と思い出の写真等をいただくことができました。重松先生の在りし日を偲びながら、ぜひご一読いただければと願っております。

ただ、限られた時間内に仕上げなければならなかったために、いただいた原稿の形式を整える余裕がなく、掲載上の不備や見にくい点が多々あるかと思います。また、実行委員会で手分けをして名簿を作成し、追悼文寄稿をお願いしましたが、本来依頼すべきでありながらお願いできなかった人が大勢いらっしゃることもわかりました。実行委員会の不手際を心からお詫び申し上げます。

もし状況が許せば、時間をかけて今回掲載できなかった方々の追悼文と重松先生にかかわる様々な資料も加えて、新たな追悼文集を作成することも考えたいと思います。

最後に、重松逸造先生のご逝去に深い哀悼の意を表し、心からご冥福をお祈りいたします。どうぞ安らかに眠りください。

重松 逸造 先生 略歴

生年月日 大正 6 年（1917 年）11 月 25 日

現 職 財団法人 放射線影響研究所名誉顧問

住 所（勤務先）〒732 広島市南区比治山公園 5-2 TEL 082-261-3131 FAX 082-263-7279
（自 宅）〒152 東京都目黒区八雲 4-8-8 TEL・FAX 03-5729-1855

学 歴 1941 年 12 月 東京帝国大学医学部医学科卒業
1942 年 1 月 医師免許証（第 99756 号）受領
1952 年 3 月 医学博士号受領
1955 年 6 月 Harvard 大学大学院公衆衛生学修士課程修了、修士号（M.P.H.）受領
1992 年 6 月 ロンドン王立内科医学会フェロー（FRCP）
1995 年 6 月 モスコウ国際高等教育科学アカデミー名誉会員（ACADEMICIAN）

職 歴 1942－1946 年 東京帝国大学医学部第三内科教室副手
1947－1961 年 国立公衆衛生院疫学部研究員・慢性伝染病室長
1962－1966 年 金沢大学医学部教授（公衆衛生学）
1966－1981 年 国立公衆衛生院疫学部長
1981 年 7 月－ 財団法人 放射線影響研究所理事長（1997 年 6 月まで）
国立公衆衛生院名誉教授
1984 年 4 月－ 昭和大学医学部客員教授（公衆衛生学）

現在までの主な役職

WHO（世界保健機関）専門家諮問委員会委員
WHO 核戦争と保健問題検討グループメンバー
WHO「環境と健康」上級諮問委員会委員
ICRP（国際放射線防護委員会第 1 委員会・主委員会）委員
IAEA（国際原子力機関）チェルノブイリ計画国際諮問委員会委員長
総理府放射線審議会会長
広島・放射線被曝者医療国際協力推進協議会会長
厚生省原爆障害症調査研究班班長
厚生省スモン調査研究班班長
厚生省イタイイタイ病の原因に関する研究班班長
環境庁イタイイタイ病およびカドミウム中毒に関する総合研究班会長
日本心臓財団川崎病原因究明委員会委員長
日本公衆衛生学会理事長
広島県高度専門医療施設基本構想策定委員会委員長

名誉会員 日本衛生学会、日本公衆衛生学会、日本結核病学会、日本脳卒中学会、
国際疫学会（IEA）、日本疫学会、日本川崎病学会

受 賞 環境庁長官表彰受賞（1981 年 6 月）
勲二等瑞宝章受章（1990 年 4 月）
外務大臣表彰受賞（1991 年 7 月）
スウェーデン王立科学アカデミー放射線防護ゴールドメダル受賞（1993 年 5 月）
ロシア科学アカデミー放射線医学研究所 N.V. Timofeev-Resovsky メダル（1994 年 8 月）

著書・論文 疫学、公衆衛生学、放射線衛生に関する単行本 85 冊、論文 900 編以上

目 次

遺族代表 重松 健	父への表彰状	 1
追悼文		
大久保 利晃	影弟子第1号	 2
青木 國雄	重松逸造先生：ゆるぎない信念の先達を偲びて	 3
尾前 照雄	指導者として尊敬され慕われた重松先生	 5
川崎 富作	故 重松逸造先生への追悼文	 6
島尾 忠男	頼りになる先達	 7
平良 専純	忘れがたい重松先生を偲んで	 8
能勢 隆之	疫学に大変革をもたらした重松先生逝く	 10
W. W. Holland	W.W.Holland から Dr. Shigematsu への追悼文	 11
柳川 洋	門をたたいて半世紀、長い間お世話になりました	 12
児玉 和紀	重松先生に導かれていつの間にか疫学の道へ、 ありがとうございました	 17
井形 昭弘	重松先生を悼む	 22
祖父江 逸郎	心に残る人生の達人	 24
中嶋 宏	「フランスより重松先生を想う」	 26
小町 喜男	重松逸造先生と公衆衛生学会	 27
北川 定謙	「日本の疫学界をリードされた重松先生のご逝去をいたんで」	 28
長瀧 重信	重松先生の60年間のご薫陶に深謝	 29
山崎 隆子	ご家庭での重松先生の思い出	 31
小見山 茂人	海軍軍醫大尉 重松逸造 軍醫長と私 ー戦中～戦後の交流ー	 32
石井 邦利	八雲ラジオ体操の会員からのお手紙	 34
畑 威	ラジオ体操とお酒と	 35
Burton G. Bennett	A Tribute to Dr. Shigematsu	 36
William Schull	Dr. Itsuzo Shigematsu: A Tribute	 37
張 拓紅	Memorial Words for Dr. Shigematsu	 38
高橋 規郎	大日本帝國海軍輕巡洋艦『球磨』に始まった海軍軍医大尉 (ダイイ)重松逸造先生との思い出	 39
佐々木 英夫	重松先生の教え	 42
藤原 佐枝子	最後の広島重松会	 44
山田 美智子	重松先生の掌で(門前の小僧の疫学)	 46
久住 静代	重松逸造先生のお別れ会によせて	 47

笠置 文善	行く道を導いて頂いた重松先生	 48
小笠原 優	理事長室入口の高いハードル	 49
石邊 綾子	重松先生が捨てたもの	 51
池田 枝維子	『ありがとう』の言葉	 52
小笹 晃太郎	天網粗にして漏らさず	 53
水野 正一	重松先生を偲んで・・・ 低線量放射線健康影響に関連して	 54
土肥 博雄	Royal Academy of Physician の受賞	 55
川口 毅	重松先生との思い出	 58
中村 好一	重松先生、まだ議論しなければならないことがあります	 59
坂田 清美	テキサス大学留学とその後の思い出	 61
三浦 宣彦	只々感謝！	... 62
山縣 然太郎	「大医をめざすことを矜持とする」	 63
種田 行男	「毎日1万歩あるくから健康になれるのか？それとも、 健康だから毎日1万歩あるくことができるのか？」	 64
尾島 俊之	浜松・舘山寺温泉での思い出	 65
森岡 聖次	疫学研究史をめぐって	 66
上原 里程	重松先生のお人柄	 67
大木 いずみ	重松逸造先生の風格にふれて	 68
屋代 真弓	重松先生との出会い、そして忘れられないお言葉	 69
佐野 誌野	上医しゃもじ	 70
藤田 委由	重松逸造先生と芋焼酎「伊佐美」	 71
吉村 典子	ワイン選びの金言	 73
若林 チヒロ	重松先生と国内外のお弟子さん	 74
高石 昌弘	重松逸造先生 有難うございました	 75
黒子 武道	邂逅 ～先生との出会い～	 77
簗輪 眞澄	重松逸造先生との出会い、疾病地図作り、川崎富作先生 およびスモン鑑定団のこと等	 79
小田 清一	「応援するから教授選に出ないか」	 82
永井 正規	Joint WHO/ESCAP Meeting held in Manila, 1-5 December 1980	83
石坂 正綱	厳しくて優しくかった先生	 84
玉城 英彦	恩師重松逸造先生に感謝して	 86
大井田 隆	Political Epidemiology	 87
土井 由利子	重松逸造先生と国立公衆衛生院疫学部忘年会の思い出	 88
秋澤 より子	重松逸造先生に初めて会ったとき	 89
尾崎 米厚	叙勲のお祝いのお手伝いから知った重松先生の偉大さ	 90
里見 宏	重松逸造先生に聞きそこなったこと	 91
砂屋敷 忠	そちらの美味しい酒は見つかりましたか	 93
旗野 脩一	わが師 重松逸造先生の思い出	 94

山内 雅弥	記者として学んだこと	 96
江種 則貴	チェルノ支援に使命感 科学者の信念 時に迷いも	 97
志毛 ただ子	私が一番古い弟子です	 98
窪木 外造	重松先生 有り難う	... 99
金川 克子	社会への第一歩は重松教室から	... 100
橋本 勉	生涯の師、わが原点の金沢	... 101
飯田 恭子	厳しくも伸びやかな金澤時代	... 103
鏡森 定信	師として、そして時には慈父のごとく	... 104
西 正美	学際的思考を学ぶ	... 105
能川 浩二	教育者としての重松先生	... 106
上島 弘嗣	いつまでもお若かった重松先生、さようなら	... 107
大村 外志隆	国立公衆衛生院とその後の思い出	... 108
三浦 克之	重松先生と金沢と疫学と	... 109
中川 秀昭	重松先生と金沢医科大学公衆衛生学教室	... 111
藺部 友良	重松先生の思い出ー国際川崎病シンポジウム、MCLS研究班、 たばことがん、金沢兼六園、川崎病親の会の保健文化賞ー	... 113
今田 義夫	重松先生有難うございました	... 116
田辺 功	やはり川崎病の思い出が一番	... 117
浅井 満	川崎病と重松逸造先生	... 119
村松 孝夫	心配りと気遣いの親分	... 121
多田羅 浩三	「温故創新」の言葉	... 122
山崎 幸子	重松逸造先生のこと	... 123
廣畑 富雄	重松逸造先生を偲んでーハワイのビーチと RERF	... 124
紀伊國 献三	チェルノブイリの父 重松逸造先生	... 125
富永 祐民	重松先生の一言のおかげ	... 127
青山 英康	生意気な後輩	... 129
吉村 健清	重松先生のユーモア	... 130
稲葉 裕	重松逸造先生と私	... 131
岸本 拓治	先生の後進育成に対する限りなく暖かいご配慮を忘れること ができません	... 132
秋葉 澄伯	重松逸造先生の思い出	... 133
笠島 茂	重松逸造先生を偲んで	... 134
大月 邦夫	「Field Epidemiology」についてのビデオ教材	... 136
星野 祐美	昭和大学での思い出	... 139
横野 靖	トンガ王国医学・栄養学調査と重松先生との関係	... 140

遠藤 昌一	重松先生と結核対策	・・・ 142
岩井 和郎	サルコイドーシスと重松先生	・・・ 143
二塚 信	重松先生と水俣病	・・・ 144
柴田 義貞	「彼奴は暇だから・・・」	・・・ 145
朝倉 正幸	重松先生とイタイイタイ病研究	・・・ 146
北川 正信	清濁併せ呑み、かつ吐いた男	・・・ 148
松波 淳一	未だ見ぬ師 重松逸造先生についての 私の記憶	・・・ 150
仲村 英一	サルコイドの会	・・・ 152
石塚 正敏	「困った時には必ず助けて下さった恩師、重松先生」	・・・ 153
中谷 比呂樹	『比治山の先生』の思い出	・・・ 155

編集後記

柳川洋、児玉和紀 略歴

父への表彰状

平成 23 年 4 月 9 日、父は胸部大動脈瘤破裂のため手術を行い、以来 10 ヶ月幾多の危機を乗り越え、平成 24 年 2 月 6 日その生涯を閉じました。94 歳でした。その間 1 日も休まず父に付き添ったのは母でした。我々家族も交代で付き添いましたが、入院が長引くにつれ、このままでは父と母の二重遭難になるのではないかと心配しておりました。その母も今年 1 月終わりついに疲労とインフルエンザでダウン、病院に搬送されてしまいます。2 月 5 日に退院し、ふらつくその足で父を見舞いましたが翌日早朝父は逝去します。母の帰りを待って父は逝くという正にドラマの一場面のような最後です。それにしても病院の医師たちも驚くほどの父の生命力でした。発病前まで、朝のラジオ体操と 1 日一万歩目標のウォーキングを日課としていましたし、毎晩の適度（？）な晩酌も欠かしません。これすべて健康のためかと問うと逆で、歩けなくなったら終わり、飲めなくなったら終わりという答えで、肉体の衰えのバロメーターと考えていたようです。手術後自分の肉体の異変を悟った父は自分の死までの経過を客観的に観察しているようにも見えました。入院中、様態が安定している時でもテレビは見ない、本、雑誌も読まないという状態で、看護師たちも、いったいこの人は何に興味があるのか訝しがっておりました。ただ唯一積極的な反応を示すのが家に届く仕事関係の手紙、書類及び知人の皆様からお便り、電話で、このこととなるといつもの表情にもどって一つ一つに返答の指示を出すのです。以前母がよく申しておりました通り、「父の趣味は仕事」、これを改めて感じさせられた次第です。

私が幼い頃に、父がなぜ医学の道へ進んだのかを聞いた覚えがあります。かのシュバイツァー博士の伝記を読んで人命を救うことを天命と感じたというのです。父はその後、その天命を胸に、医学それも疫学の道を進むこととなります。大学卒業後すぐに経験した戦争も父に多大な影響を与えたに違いありませんが、それをも活力に変えて仕事一筋の人生を邁進していきました。その中で公私に渡り交流を得た数多くの先生方との絆、これこそが父の人生に与えられた真の勲章と言えるでしょう。実は父がなくなった翌日、2 月 7 日某団体からその功績に対し感謝状を受け取るようになっていました。幾度となく危篤宣言をされてきた父に、この賞状授与が生きながらえる励みになると思い、耳元で語り続けてきました、が、授与式の 1 日前に他界してしまいます。既に長年に渡り皆様方からいただいた表彰状で十分だったのでしょう。死の 1 日前母の無事を看取ってから逝った父、仕事一筋の人生の中にあって家族への切なる想いを表した最後に、遺族を代表して勲章、表彰状、感謝状を届けたいと思います。そして父を支えてくれた皆様に心よりお礼を申し上げます。

遺族代表 重松 健

影弟子第 1 号

放射線影響研究所

理事長 大久保 利晃

私が卒業直後に慶応の衛生学公衆衛生学の助手としてこの分野に入った頃には、重松先生は既に公衆衛生では有名な学者であった。その重松先生からその 3、4 年後に直接電話をいただいたのだ。これは勿論私にとって大変名誉なことであり、今でも忘れ得ないこととしてはっきりと記憶に残っている。

当時私は、総理府統計局が昭和 40 年の国勢調査で始めて試験的に導入した、行政区画とは無関係な緯度経度の基づく地域区画法である 1 km²メッシュ法による調査結果に注目した。そして、東京都内の死亡を自らこの方法で集計することによって、行政区画より小さな地域区画別の死亡分布を作成し、大気汚染や国勢調査などの社会経済指標との関係を解析し、学会にぼつぼつ発表し始めていた。重松先生はこの仕事に興味を示され、まだ駆け出しの若造である私に直接電話をくださり、民間の研究費をつけてくださったのだ。その後暫くのあいだ関連の研究会などにも呼んでいただいた。それまで私の研究対象は大気汚染が中心であったが、これが契機となり、それから十年近くがんや循環器疾患の疫学に興味が広がり、これらの分野の先生方とのお付き合いも広がった。

この間に重松先生と直接お会いする機会としては、シドニーで開催された国際疫学会のアジア地方会のようなものに出席したときであった。これは私にとって初めての海外出張で、外山敏夫教授の抱持ちだった。会議そのものは小規模だったので、日本からの我々と重松先生に加え、英国の Holland 先生が主催者にとって重要な参加者だったのだろう、このメンバーで晚餐会に招待されたのを覚えている。会議の休憩時間にロビーなどで外国人と話をされているときも、重松先生特有のダミ声で、笑うときもそのままの大声だったことが今でも妙に記憶に残っている。

私自身はその後産業医大に赴任し、約 22 年間産業医の養成にほぼ全勢力を傾注したので、地理病理学的な研究とは疎遠になるとともに、重松先生との関係も完全に断ち切れてしまった。いま考えてみると、ほぼこの期間、重松先生も放射線影響研究所の理事長として、それ以前とは少し違う領域でご活躍されていたわけだ。産業医大の任期を終える頃、厚労省から声がかかり、思いもかけず現職へ移ることになり、重松先生と再びお会いすることになった。私にとってほとんど未開地でもあった放射線の人体影響に関する疫学で再び先生の薫陶を受けることになったのだ。このときは研究面と言うより、後継理事長の立場で主として経営面でのご助言をいただいたわけである。

考えれば出身大学もその後の所属も全く違っていた私だが、先生のお目にとまり、声をかけていただき、外国の学会で一緒に、最後には先生が苦勞されて盛り上げられた組織の運営をお任せいただくという立場にまで、意図せずに導かれた縁には不思議な因縁を感じるのである。また研究面でも、最初に金沢における小学生コホート調査のアイデアに接したときには、その着想のユニークさに衝撃を受けたことを思い出す。国立公衆衛生院では、公衆衛生の卒後教育機関としての人脈を活用して、次から次へと大規模調査企画をされる姿を見ながら、私は、産業医大の卒業生を組織化すれば、他に類例のない産業保健のフィールド研究が可能になると気づかされた。そして、機会を見て自ら産業医大の職を買って出たのだ。

重松先生とは直接の師弟関係にはなかった私だが、こうして顧みると人生の重要なターニングポイントには必ず先生の姿があった。まさに先生ご自身が気づかれない影弟子の第 1 号かどうかは兎も角、その一人であったことを誇りに思いながら、偉大なる先生のご逝去を今更ながら残念に思うと共に、先生のご冥福をお祈りする次第である。

重松逸造先生： ゆるぎない信念の先達を偲びて

青木國雄（名古屋大学名誉教授）

長い間、ご指導、ご鞭撻、ご高配を賜わった重松逸造先生を失い、脱力に近い感が続いている。

先生は敗戦直後から急性伝染病、結核、肝炎などの疫学的研究と実践で大活躍をされ、1960年代には社会的な大問題となった公害研究に従事され、金沢大学に移られてからは疫学研究を基礎にした公衆衛生学研究とその実践、地域衛生行政指導など間口を広げられ、その識見と人間的魅力で集まった多くの門下生がのちに全国の指導者となられた。やがてイタイタイ病という社会医学的な問題解決の責任者として厳しい役割をこなされ、同時にスモン病から始まる特定疾患・難病の全国規模の疫学研究の指揮をとられ、さらに川崎病の実態究明に大きく貢献され、研究と行政対策の並行に努力された。研究継続のため財団組織を提案、実現され、長期研究の基礎に貢献された。疫学成果を厚生行政に大きく反映させられたことも大きな功績である。放射線影響研究所に移られてからのスケールの大きな活動については別に記述されるであろう。国内学会ばかりでなく、早くから国際疫学学会のアジア・太平洋地域理事として我が国の疫学を世界に紹介、同時に我が国の疫学研究を国際レベルに引き上げようと努力された。WHOへの貢献も小さくない。

先生は課題が大きければ大きいほど大きな成果を上げられ、大きな組織の統括、指導力は抜群であった。それは高い識見に豊富な経験から、説得力のある結論をまとめられたからであり、それももともと科学的方法で真正面から論議した結果である。また、難しい結論をわかりやすく解説されたことも特徴であった。

先生の実力は講演や研究討論の場でいかに発揮されており、筆者は1976年、ハワイで開催されたスモン原因研究の国際シンポジウムで、数多くの欧州代表研究者の予想できない反対論もふくめ、一つ一つ反証され、キノホルムが唯一の原因であることを説得されたのは特に印象に残っている。これで国際的な解決の道が大きく開かれたのである。レフリーで参加した外国人からその応答に感嘆の辞が聞かれたほどであった。

先生がなぜ疫学を専攻されたかの動機について、*Epidemiological methods: a view from north Asia/Japan* (Holland WW et al. eds: *The Development of Modern Epidemiology* の中にこう書かれてある。「東大医学部卒業後4年間、兵役（海軍）で軍医として生死のはざまをさまよい、復員後、検疫機関でおびたしい急性伝染病患者を治療した。これらの経験から、予防医学研究に一生をかける決心をした。そして、1947年、公衆衛生院疫学部に入った」とある。以降55年、生涯現役で過ごされ、常に我が国の疫学研究の第一線に立たれ尽力されたのである。

先生は研究には厳しい指導をされたが、日常は極めて温和で、弟子の性格を素早く理解され、懐深く、暖かく、適切に対応され、また明るいユーモアのセンスにたけておられたので、門下生ばかりでなく、私淑する後輩は極めて多かった。行政での対応も実際の

説得力があり、重要な行政問題解決の委員会には不可欠の国手であった。

筆者は特に、1965 年以来、ご指導、ご鞭撻をいただき、ご紹介申し上げるエピソードは山積している。2, 3 の例を挙げれば、厚生省難病研究班で山本俊一教授とともに、疫学を全国的な組織として活動する場を作られ、各疾患は臨床研究の地盤を用意し、臨床と密接した協力のもとに疾患特性を把握しながら疫学研究を進める態勢をつくられた。全国の疫学者が一堂に会し論議する機会が急増したことで、大きな発展の基盤となった。先生は早く国際疫学会の理事に就任され、理事会での活動や、日本からの国際学会発表の増加を通して、我が国の研究レベルの発展の道をつけられた。筆者は先生のご推薦を受け国際疫学会の理事を継いだ。が、国際的な研究交流なくしてわが国の疫学の発展はないと考え、先生とご相談、初めてアジア・太平洋地域国際疫学学会を開催でき、その後、日本にも疫学専用の学会が必須と考え、日本疫学会創設に奔走することとなった。先生は国立公衆衛生院の伝統ある疫学研究会（当時感染症が中心）の責任的存在であり、新学会発足には大変なご心労をおかけしたが、先生は他の領域、循環器、がん、難病、職業病、医学統計学などの専門研究会が別個に会合を持つ現状もお考えになり、総合的な疫学会の創設の推進に賛同された。将来をお考えになったからである。学会創設後の組織、人事にも深いご理解を賜り感謝のほかはなかった。その後、国際疫学会学術総会が名古屋で開催されるや、名誉会長としての直接間接的にきめ細かなご指導をいただき、いくつかの衛生会議が開かれ、多くの機会を通して会員が世界各国の指導者と話し合うことができ、国際交流が急進展したことである。その他筆者には、放射線影響研究所評議員へのご推薦、日英疫学卒後教育セミナー、I E A 疫学辞典の翻訳校閲、疫学史の共同執筆など、数々のご高配をいただき、またそれぞれにきめ細かなご指導を賜り、勉強をさせていただき、幸いであった。

先生は 80 歳を越しても極めてお達者で、各種の出版を通して、疫学とは何か、疫学研究成果の特性、疫学教育の在り方、研究成果の考え方、評価などについて、専門家のみならず、一般人を教育された。このうち、文庫本による放射線暴露と健康障害の詳細な解説は今日の原因事故の対処に特に有用な参考となっている。昨年は 93 歳という高齢で札幌の日本疫学会のメインシンポジウムの司会をされ、前夜にも歓談の機会を持ち、日本の疫学の歴史について語られ、国際学会の招致にも積極的に指示された。一方細田裕先生の葬儀には、さすがの先生も感慨深く、「細田君、もうじきゆくからな」と優しくつぶやかれた。弟子を思うお心に筆者は大きく打たれた。薫陶を受けた弟子の葬儀には必ず参加されていたようで、先生の生き方の一斑を知ることができる。

幽明境を異にして、今更のように先生の卓抜さ、スケールの大きさを仰ぎ見る次第である。私ども、力不足で申し訳ないが、今後、さらに協力して先生のご遺志を継いでゆく所存である。

先生ごゆっくりお休みください。ご冥福を心からお祈り申し上げます。

指導者として尊敬され慕われた重松先生

国立循環器研究センター名誉総長
久山町 C&C センター長 尾前照雄

内科医である私が重松先生の知遇を得ることになったきっかけは久山町研究で、既に40年の月日が流れた。先生は当時国立公衆衛生院疫学部長の職にあり、WHOの仕事にも関与しておられ、私も又1970年代は久山町研究の代表者として、しばしばスイスのジュネーブでのWHO本部の心血管病の会議に出席していたので、先生に疫学研究についての御意見を覗いたり、国内での会議の折にも同席させていただくことが少なくなかった。先生のひろい視野と全く偏見のない御意見は文字通り日本の疫学研究の指導者として大きな役割を果たしてこられた。その後、放射線影響研究所理事長となられ、多くの人々とともに困難なことも少なくなかったであろう問題の処理にあたられた。

これら長年のお仕事を通じて、日本の疫学と公衆衛生学分野の発展に大きな役割を果たされてきた。先生のふところが広く心の温かいお人柄に多くの後輩が心をひかれその傘下に集まった。先生が退官後は出身大学と仕事の内容を問わず、日本各地の研究者が集って「重松会」を作り、年1回各地で先生御夫妻を中心にした会が持たれ、お二人の温顔と楽しい懇談に時を忘れた。

先生は第二次世界大戦中は海軍の軍医として軽巡洋艦「球磨」に乗っておられ、私は広島県江田島の海軍兵学校の生徒であった。その御縁もあって「重松会」で瀬戸内海を巡航し江田島 - 呉を訪ねて往時を偲んだことも忘れがたい印象となに残っている。先生は退官後もずっと私たちを凌ぐほどお元気で私たちは勇気を貰っていた。このたび先生の訃報に接し寂寥の念禁じ難いものがある。先生のご冥福を心から祈り奥様はじめご遺族のご健康とご多幸を祈願して止まない次第である。

故 重松逸造先生への追悼文
特定非営利活動法人日本川崎病研究センター理事長 川崎富作

長年に亘るお付き合いで、先生はそのお元気さから、100歳は十分超えられるであろうと信じておりましたが、このたび、94歳で幽明境を異にされようとは思ってもありませんでした。

思えば、重松先生との最初の出会いは、1970年2月、初めて川崎病のための研究費申請をしようと訪ねた、厚生省（当時）の加倉井駿一参事官から「まず疫学調査をしたら---」というアドバイスをうけて紹介された、公衆衛生院疫学部長であった重松逸造先生を訪問したことに始まります。

重松先生は、私の資料の説明を聞いていて、「面白そうですねあ---！やってみましょう。」とおっしゃって、当時若手の柳川洋先生と共に全面的な協力を頂き、1970年度の厚生省医療研究助成補助金(200万円)を得ることが出来たのです。そして、厚生省川崎病研究班を発足させ、第1回の全国調査が柳川洋先生の主導で実施されました。

全国調査に当たり、まず川崎病の「診断の手引き」を作り、全国の病院のうち、ベッド数100以上で小児科を併設している約1500余りの病院に送って調査したところ、「診断の手引き」には予後良好としたのに、全国から次々と突然死の報告があり、解剖されていた症例では、すべて冠動脈瘤に血栓閉塞を伴って死亡していたことが判明し、必ずしも予後良好な疾患とは云えないことがわかり、われわれの本症に対する認識を180度変えるものでありました。以降、今日まで、「病因は何か」について、多くの研究がなされて来ましたが、残念ながら不明のままであります。

重松先生ご存命の間に、病因を明らかに出来なかったことは、かえすがえすも残念至極であります。



2011.1 川崎病の子供をもつ親の会
保健文化賞受賞パーティ



1995.6 自治医大で特別講義を終えた後
宇都宮市の英国パブ「スカット」で一杯

頼りになる先達
結核予防会顧問 島尾忠男

先生の世代は戦争の影響をもろに受け、太平洋戦争の始まった昭和 16 年 12 月に 3 ヶ月繰り上げて卒業、早速海軍軍医となり、ラバウルで終戦を迎えられた。復員後は公衆衛生院で疫学部所属し、当時は敗戦後の混乱の中感染症の全盛時代で、結核を対象に仕事をしておられたことから、昭和 23 年に大学を卒業し、1 年のインターン終了後すぐに結核予防会に入り、疫学を研究し始めた私との接点が生まれた。当時結核は強く蔓延しており、その制圧は国の重要な課題であったが、病理学や細菌学などの基礎研究者、臨床医は多かったが、疫学という立場から結核を研究している者は少なく、予防会内に先輩の疫学研究者がいなかった私にとって、重松先生はまさに頼りになる兄貴であった。

先生の優れた点の一つは先見性である。結核患者を診断した医師には届け出る義務が昭和 22 年に降課されていたが、その実行状況は必ずしも十分ではなかった。昭和 26 年に施行された結核予防法で、結核医療については公費負担制度が導入され、その前提として患者が保健所に登録されていることが公費負担を受ける必須条件となり、この年の届出は人口 10 万対 698 という史上最高値を記録した。ところが、届出を受けた保健所は、それをどのようなやり方で受け付け、病状や公費負担された医療の内容などをどのように記録するかという様式が示されていなかったため、保健所毎にばらばらのやり方を行っていた。保健所職員に研修を行い、指導する立場にある公衆衛生院で疫学研究を担当しておられた重松先生は、統一した様式による結核患者の登録、管理の必要性をいち早く認識され、昭和 30 年ころから東京都や川崎市の一部の保健所と協力しながら、研究を始められた。国も結核患者を登録し、管理する制度を整備する必要性を認めて、昭和 33 年に厚生科学研究費による研究班（班長は御園生圭輔結核予防会調査部長）を組織し、検討を始めたが、重松先生はその中核メンバーとして制度の構築に尽力され、その成果が昭和 34 年からの一部保健所での新制度の試行、昭和 35 年度の試行枠の全国半数の保健所への拡大という慎重な過程を経て、昭和 36 年から結核患者の登録・管理制度として発足した。必要最小限の情報を記載できるようにした登録票、病状や次回訪問の時期、公費負担の切れる時期を示すためのシグナルの採用、登録票の下辺に窪みを並べて作り、その幅で細い金属棒を収納箱の下に多数設置し、そこに一枚ずつずらして登録票を載せ、前から見ると 30 名分の氏名、次期訪問の時期、公費負担の期限などが一目でわかるように設計した登録票を収納する保管箱まで、未だ予算も不十分であった当時の保健所の実情にあった制度設計をされたことが強く記憶に残っている。これによって、昭和 26 年に施行された結核対策は、予防、患者の発見から治療、治療中の管理、家族の管理までを含む一貫した体系に整備され、登録者についての統計をとることも可能になった。

その後先生は金沢大学の公衆衛生学教室の教授に赴任され、後に日本の公衆衛生、特に疫学研究を担った多くの逸材を育てられ、感染症からイタイイタイ病など、非感染性疾患まで研究活動の枠を広げられた。公衆衛生院疫学部長、さらに日米共同の事業で運営には国際感覚の求められる放射線影響研究所の理事長としてのご活躍などの紹介は、他の方に譲りたい。若いころ、米国に留学される前に、朝から晩まで洋画を映写する映画館に籠もりきりで英語の耳慣らしをされたという逸話は、先生が生まれながらの才能に努力を加えて、立派な業績を挙げられたことを物語っている。「それはですな一、こうすればよいのでは・・・」と話される笑顔が今も目の前に浮かんでくる。

忘れがたい重松先生を偲んで

日本保健医療大学学長 平良 専純

私が重松先生に初めてお目にかかったのは、40 年も前のことです。先生がまだ国立公衆衛生院の疫学部長をされておられた頃のことで、当時、私は岐阜大学の公衆衛生学教室から 1 年コースの研修生として、国立公衆衛生院へ派遣されたときであります。

そのときに受講した疫学の講義の第 1 回目が重松先生で、その講義の第一声が、「疫学というのは、何も犬や猫に関することを研究するのではなく、人間様に関わる事柄を研究する学問ですよ。」と言われたことが 40 年経った今でも忘れることのできない言葉で、私の心の中に残っています。

また、もう一つ忘れられないことは、あるアメリカの有名な疫学の専門書の翻訳版が出版され、その書評を書くよう依頼された重松先生は、**intervention study** という語の訳が「介入研究」と訳されていたのを読まれ、当時はまだ「介入研究」なる言葉が認知されていなかったにも関わらず使われていたのを「けしからん」と言っておぼろげに不満をもらしていました。実は、その翻訳をされた方々は重松先生がよくご存知の方ばかりだったので、直接「けしからん」と言うのは大人気なく憚られたのでしょう。そのことを私たちに笑いながらお話をくださったことが今でも鮮やかに残っています。というのも、重松先生のおかげで我々は今ここで日本のみならず世界でも最先端の学問を学んでいるのだ、という気分を味わうことができたからです。それ以後、私は疫学に対する興味を深め、疫学だけはしっかり学んで帰ろうと決心しました。文献研究科目ではさっそく疫学ゼミを取ったところ、**Holland** 先生の書かれた多変量解析のテキストを論読させられ、疫学というのは統計もわからなければよく理解できない学問だと知らされ、一から統計学を勉強しました。こうして、じかに重松先生のご指導を受けることにより、学問に対する姿勢やその造詣の深さに触れることができ、以降ますます重松先生を敬愛するようになった次第です。

そうして、一年コースも終わりに近づいた頃、私は引き続き WHO の **Fellow Ship** でイギリスの **Liverpool** 大学への研修が決まり、3 月の修了式を待たず出発せねばなりません。その研修の間に、ヨーロッパ各地を回り伝染病管理というテーマでの研究をすることになっていたのです。そのことを重松先生にお話すると、「イギリスに行ったら、**Holland** 先生を訪ねなさい、又、チェコスロバキアへ行ったらプラハ大学のペチェンカ教授とチェルベンカ教授を訪ねなさい。」と書いて 3 通の紹介状を書いて持たせてくださいました。私はその紹介状を有難く携え、3 人の著名な先生方にお会いすることができたことも、また先生の温かい心遣いとして一生忘れることのできない宝物となっております。

その後、放射線影響研究所の理事長として赴任されたとき、私は一医系技官として厚生省で働いており、図らずも放影研を担当することになり、再び重松先生とのご縁を持つことができました。そのあたりのエピソードを書き始めますととても紙数が足りません。それから 16 年間放影研理事長として被爆者のためにご尽力なされたことは周知のとおりであります。平成 9 年に放影研を辞された後、私がその常務理事として赴任することになった経緯も、また不思議なご縁でした。私は東北地方医務局長の職を最後に厚生官僚を停年退職する時期が来ておりました。私は当時の厚生省の某局長と会って、次の赴任先は都

内某法人だと告げられ、これで単身赴任を免れ、やっと東京に戻れると思っていたのです。ところが、仙台に帰って引越しの準備をしていた矢先、例の局長から電話がかかり、「平良さん。悪いが、広島に行ってもらえまいか。」と言われたのです。いまさら、広島県の部長職でもあるまい、と思っていると、なんと放影研の常務理事ということで、しかも重松先生からのお声がかりとのこと。敬愛する重松先生が 16 年間愛着を持って勤めてこられた放影研への赴任であり、そのうえ先生からのお呼びとあれば断るわけにはいかないと思った次第です。某局長とは 2 年間という約束でしたが、図らずも 8 年もの長居となってしまいました。その間、重松先生は名誉顧問として放影研の発展にご尽力され、また皆から愛され親しまれてこられました。

重松先生は、そのご生涯をかけて、私だけでなくたくさんの方々を指導して後進を育成し、常に励まされてこられました。私も重松先生から直接ご指導を受けたことを誇りとし、残りの人生を先生に恥ない教え子として努力していきたいと思います。

心から重松先生のご冥福をお祈りいたします。

疫学に大変革をもたらした重松先生逝く

鳥取大学 学長
能勢 隆之

重松先生の追悼文集の作成にあたり、疫学の発展と改革に貢献された先生の偉業を語るにより哀悼の意を表します。

私が疫学を学んだ頃は、疫学は感染症などについて発生率、死亡率、関連要因、経過、予後などを解明し、病気の予防や対策を検討する学問分野でありました。

重松先生は疫学の新しい分野を開拓され、発展に尽力されました。先生の数多くある業績のうち、私が強く印象を受けていることについて述べます。

その一つは、感染症などの急性疾患から慢性疾患（がん、脳卒中、難病など）の原因要因、関連要因の解明、そして経過、経済問題、予後などの分野に疫学を適用され、日本の疾病対策に資する成果を出し、それを疫学の新たな役割として行政対策に利用し、疫学の確乎たる立場を築かれ、若手の研究者がそのおもしろさに興味を持つようになり、若手の疫学研究者が急増しました。

もう一つは、“イタイイタイ病”などの公害病の認定基準に疫学の研究成果を適用され、裁判の判定に疫学の成果が影響を与え、疫学の研究方法である相対的評価からそれを絶対的評価に利用できることを示されました。その後は公害病や慢性疾患対策の行政的決定に活用されるようになると同時に医学の分野での疫学の重要性がさらに認識されるようになりました。

最近の新たな社会的課題として急浮上した放射線の健康問題と社会的課題は新たな疫学の開拓と役割が求められています。放射線の微量慢性曝露に関する問題は、疫学は危険率を求めるのみでなく、安全率あるいは域値を示すことができるのかなど新しい研究方法の発展が求められています。広島原子爆弾のデータは生存者のみのデータを追跡したものであり、これが今日の課題に活用できるのかどうか重松先生の意見と見識をうかがいたかったと思っています。

先生の人間性に触れたことも多くありますが、先生と酒を一緒に飲みながら酒の健康影響について語ったとき、身体に良いかどうかはその人の人生観によると言われ、疫学の成果を考慮しないで先生と一緒に酒を飲みました。我々は、先生の目指された疫学を実際に活用しながら形にあらわし、先生の開拓された道を守り疫学を発展させることにより、先生は永遠にこの世に生き続けられることになると確信しています。

あらためて、心より先生の御冥福をお祈り申し上げます。



W.W.Holland から Dr. Shigematsu への追悼文

Dr. Shigematsu

I was very sorry to hear of Dr. Shigematsu's death. Japan and the world has lost one of its great men. His contributions to health and human welfare have been outstanding.

I first met Dr. Shigematsu in Sydney, Australia at a meeting of the International Epidemiological Association in 1973. He led a small group of epidemiologists to present their studies to an international audience. I believe this was the start of the resurgence of the development of Japanese epidemiology and its dissemination worldwide. Due to Dr. Shigematsu's vision and effort, Japan again began to play an important role in this field.

It was my fortune to develop a lasting friendship with Dr. Shigematsu. He was a wonderful friend – and a more than life-size figure.

In the early post-war years Japan began to develop many new industries. Because of economic needs little heed was paid by industry or the state to consider environmental health effects that were caused by these developments. Dr. Shigematsu was courageous enough to stand up to these powerful interests. Particularly important and striking were: (1) the investigation of the Minamata Bay disaster. This was due to the presence of mercury in a factory effluent. The absorption of mercury by fish affected the whole community through the consumption of the contaminated fish. (2) Itai-itai disease in pregnant women exposed to too high doses of cadmium in the factories in which they worked and developed renal failure. (3) Sub-acute myelo-optico-neuropathy (SMON) due to the use of clioquinol in the treatment of diarrhoea. He demonstrated the importance of epidemiology in the investigation of these conditions and helped to persuade the government to develop methods to control the culpable industries as well as to establish systems of investigation and surveillance.

He was the third Japanese (and longest serving, 16 years) to become Chairman of the joint US-Japanese study of the health effects of radiation as a result of the atom bombs dropped on Hiroshima and Nagasaki. His contributions to identifying the health effects of varying levels of exposure to radiation have been recognised worldwide and his experience was in great demand.

Over the years, both in Europe and on my visits to Japan, I greatly enjoyed my encounters with him. His love of life was infectious and our meetings were always joyous with much laughter, jokes and good whisky and great food.

He will be greatly missed by all, but particularly his family, friends and pupils. He was responsible for appreciating the need for careful, sound studies in epidemiology and ensuring that future Japanese scientists in this field were exposed and trained all over the world in order to achieve international credibility. He succeeded, as is evident from the many studies done by him and his pupils – and by the very high international standing of Japanese epidemiology and of many of his pupils. RERF, his “baby”, is world-renowned. But perhaps above all he should be remembered for his promotion and help he gave to his students and collaborators in the maintenance of high scientific standards. There are now many Japanese of world renown who owe their success to his help. He should be considered as the “Father of Modern Epidemiology” in Japan.

I will miss him greatly – both for his tremendous vitality as well as his outstanding excellence in educating, researching and promoting epidemiology. He is considered one of the few epidemiologists who has really contributed to health protection and health improvement, the goal we all try to attain.

門をたたいて半世紀、長い間お世話になりました

自治医科大学・埼玉県立大学名誉教授

柳川 洋

重松逸造先生の門下生のひとりとして

朝の体操と一万歩の歩行を毎日欠かさなかった元気いっぱいの先生のご体調が悪いということをお聞きしてお宅へ伺ったのが、2011年3月の初めでした。お会いしたときは体調が悪いどころかいつもと変わらぬお元気な様子でほっとしたことを覚えています。昼間でしたが、先生ご愛用の鹿児島芋焼酎「森伊蔵」をごちそうになりました。本当においしそうに飲まれていた先生のお姿が目には浮かぶようです。

その1か月後、精密検査の結果、直ちに治療が必要という診断を受け、入院されました。それから9か月間、先生は長い長い闘病生活に耐えてこられましたが、薬石の効なく2月6日朝ご逝去されました。あのお元気なお姿を思い浮かべると、このような悲しい結果になろうとは、未だに信じられない思いでいっぱいです。

私は1962年4月に金沢大学の大学院生として、先生の門下に加えていただきました。丁度50年になります。目を閉じると、今日まで厳しくも暖かいご指導をいただいた日々、今村のおでんをつまみに酌み交わした楽しいお酒、口述筆記で論文の指導を受けた日々、ポートモレスビーから小さなプロペラ機で一緒したラバウルのシンプソン湾、38豪雪のときに一緒に吹雪の中を帰った坂道、赤いパブリカのアクセルを踏み込む先生、さまざまな思い出が走馬燈のように蘇って参ります。本当に淋しい。心の中にぽっかり穴の空いたような虚脱感に襲われています。

先生は94歳でしたが、日頃の先生の活動を知る人は、誰ひとり先生をお年寄りだなどと思う人はいませんでした。誰よりもお若く、お元気で、常に前向きに私たちを引っ張ってくださいました。お酒の席でいつも口癖のように「私よりも長く生きろ」とおっしゃっていた言葉が耳を離れません。

先生は日本の疫学の歩みを、第1期：誕生期（伝染病研究時代）[1877年の内務省衛生局年報発行～1944年の68年間]、第2期：成長期（非感染症登場時代）[1945年～1964年の20年間]、第3期：発展期（疫学研究多様化時代）[1965年～1984年の20年間]、第4期：拡大期（疫学の応用時代）[1985年以降]の4期に分けられましたが、第2期以降現在まで常に疫学指導者のトップとして意欲的に研究教育活動に従事され、数多くの後進を育てられました。わが国の疫学の父でありました。

金沢大学医学部公衆衛生学講座を主宰されたのは1962年～66年の4年数か月でした。短い期間ではありましたが、教育、研究、地域貢献での精力的な活動には目を見張るものがあります。医学部教授としてまず手がけられたのは、わが国では類を見ない家庭健康管理実習の創設でした。家庭や地域、職場、学校などに学生を送り込み、生活を営む市民の社会的背景を実地に観察する機会を与えることにより、医師として備えなければならない社会医学的素養と疫学・予防医学の知識を修得させるものでありました。

研究および社会貢献の面では農村地域住民の健康管理、中小零細企業の結核対策、イタイタイ病現地疫学調査、企業のじん肺対策、BCG経皮接種の効果判定、非定型抗酸菌

感染調査など、野外研究を中心とする幅広い活動が行われました。

石川県は結核王国ともいわれ、大正末期から第2次世界大戦までの20年間、結核死亡率は常に全国第一位の座を占めていたこともあって、先生の専門分野である結核の疫学研究には特に力を入れられました。私も先生から「石川県における結核の疫学的研究」という課題をいただき、学位論文としてまとめることができました。

1966年4月には、金沢に来られる前に15年間活動された古巣の国立公衆衛生院（現在の国立保健医療科学院の前身）に疫学部長として戻られました。私はちょうどそのとき米国ペンシルバニア大学医学部に留学中でしたが、翌年留学を終えて帰るときには、疫学部慢性伝染病室長のポストを空けてくださり、その後も重松先生の元で仕事をする幸運に恵まれました。

ここでの重松先生のお仕事は、全国レベル、グローバルレベルに広がりました。国の各種審議会委員、WHO専門家諮問委員会委員、厚生省スモン調査研究班長、厚生省イタイイタイ病の原因に関する研究班長、環境庁イタイイタイ病およびカドミウム中毒に関する総合研究班会長、日本心臓財団川崎病原因究明委員会委員長、日本公衆衛生学会理事長などを務められ、公衆衛生、疫学の専門家として、研究教育と国の政策決定に重要な役割を果たされました。これらの活動の中で、私自身もいろいろな面でお手伝いをさせていただきました。その中で特に興味深く仕事をさせていただいたスモンと川崎病について詳しく触れてみたいと思います。

スモン(Subacute Myelo-Optic Neuropathy, SMON と略)は1955年から65年頃にかけて日本各地で集団発生が観察され、全国的な蔓延の様相を呈していました。臨床像は腹部症状から始まり、その後両側・下半身から上行する知覚障害、異常知覚、視神経障害を主徴とする原因不明の神経疾患であります。疫学像から当初は、ウイルス感染が疑われましたが、臨床・病理所見の特徴を見ると感染では説明できない点多々ありました。1970年になって患者に緑舌が見られ、その緑舌と尿からキノホルム鉄キレートが証明され、さらに疫学所見からキノホルム投与と患者発生が密接な関係を有することが明らかになり、キノホルム原因説が提唱されました。政府は直ちにキノホルム製剤の販売停止措置を講じた結果、以後の患者発生は激減しました。重松先生のご指導により、さまざまな角度から実施された疫学研究の結果、キノホルム原因説を裏付ける研究成績が得られました。しかし、キノホルム製剤を生産販売する製薬会社は、キノホルム原因説を受け入れようとせず、1976年1月には、ハワイ大学においてスモンのキノホルム説に疑念を持つ10か国の専門家（イギリスのMeade TW、カナダのGent M、Sackett DL、米国のJick H、オーストラリアのRobertson TI、オーストラリアのVelimirovic Bなど）と重松先生を代表とする9人の日本側研究者（重松逸造、甲野礼作、山本俊一、青木国雄、石井慶三、中江公裕、祖父江逸郎、大谷元彦、柳川洋）との間で熾烈な論争が展開されました。重松先生は理路整然とした論理構成で製薬会社をバックとする世界の専門家に相対し、一步も譲らずにキノホルム原因説を認めさせたことに強い感銘を受けました。重松先生はこの会議に先立ち綿密な準備をされ、サイマル・インターナショナルから超一流の能力持つ同時通訳者を3人を同行させました。当時まで気づかなかった重松先生の慎重な一面を見ることができました。

川崎病は、川崎富作先生が1961年1月頃にその存在に気づかれ、その後の症例50例を

まとめて1967年に原著論文として学術雑誌「アレルギー」に発表された小児の新しい疾患でした。川崎富作先生がはじめて国立公衆衛生院へ重松先生を訪ねて来られたのは、たしか1970年の2月でしたか、まだ寒い頃でした。川崎先生が厚生省に川崎病（当時は、小児急性熱性皮膚粘膜リンパ節症候群といわれ、MCLSと略していた）の研究費を申請に行かれたとき、当時の科学技術参事官加倉井駿一先生に「疫学調査をされましたか」、「重松先生に相談しなさい」といわれたためと伺っています。

重松先生は何の躊躇もなく、疫学部として川崎病の研究に協力することをきめられ、私のところにおはちが回ってきました。これが川崎病との出会いであり、川崎先生とのお付き合いの始まりでした。川崎先生は熱心に足繁く疫学部に通ってこられました。広尾の日赤中央病院（現在の日赤医療センター）から白金台の国立公衆衛生院までは、車で10分くらいの距離で、いつも途中の店で仕入れたケンタッキー・フライドチキンとダルマ（サントリー・オールドの通称）持参で、中古車の黒いクラウンで来られました。重松先生の熱心なご指導により、英語の論文がはじめて米国の専門雑誌に公表されたのもその頃でした（Kawasaki T, Kosaki F, Okawa S, Shigematsu I, Yanagawa H. A new infantile acute febrile mucocutaneous lymph node syndrome (MLNS) prevailing in Japan. *Pediatrics* 1974;54:271-276）。その後1980年9月にスペインのバルセロナで開かれた第16回国際小児科学会において川崎病のシンポジウムが開かれました。川崎病が初めて国際会議で大々的に取り上げられ、立錫の余地もないくらい大勢の小児科医が集まり、通路まで埋まっていたのを覚えています。重松先生の熱心なご指導により、川崎病は世界のKawasaki diseaseになりました。各国でも川崎病の疫学調査が行われ、世界中に川崎病が存在することが明らかになりました。私もいつの間にか川崎病の虜になってしまい、川崎先生との出会いから40年余、本気で川崎病と取り組んで参りました。

2012年2月7日に京都市で開催された第10回国際川崎病シンポジウムにおいて、重松先生の川崎病研究に著しい貢献に対して、感謝状（楯）が贈られました。今後とも川崎病の原因究明に向けて、先生のご指導をいただきたいという会員一同の願いが込められたものでした。先生のご存命の間に原因を明らかにすることができなかったことが残念でなりません。

重松先生は私たち門下生に数多くのことを教えてくださいました。学問はもちろんのこと、人としての生き方を教えてくださいました。先生がよく言われた言葉、「温故創新」、これは論語為政編にある“温故知新”を改変されたもので、いろいろな場面で引用されています。2011年1月に札幌で開催された第21回日本疫学会学術総会の学会創立20周年記念講演会のタイトルが、重松先生の発案により“日本疫学会の温故創新”とされました。

“温故創新”とは歴史に学んで新しいパラダイムを開くという意味であり、先生は「疫学研究の拡大期にある現在、会員は創新（新しきを創める）の精神で疫学研究を推進されるよう期待したい」と述べておられます。私は、重松先生が言われるように、古い世代が蓄えてきた知恵と経験を確実に継承し、新しいものを創るという教えを座右の銘として、終生大切にしたいと思います。

私たちは、5年後の2017年、先生が100歳を迎えられるのを記念して、国際疫学会を日本に誘致しようと準備をして参りました。しかし、それもかなわぬ夢となってしまいました。

た。

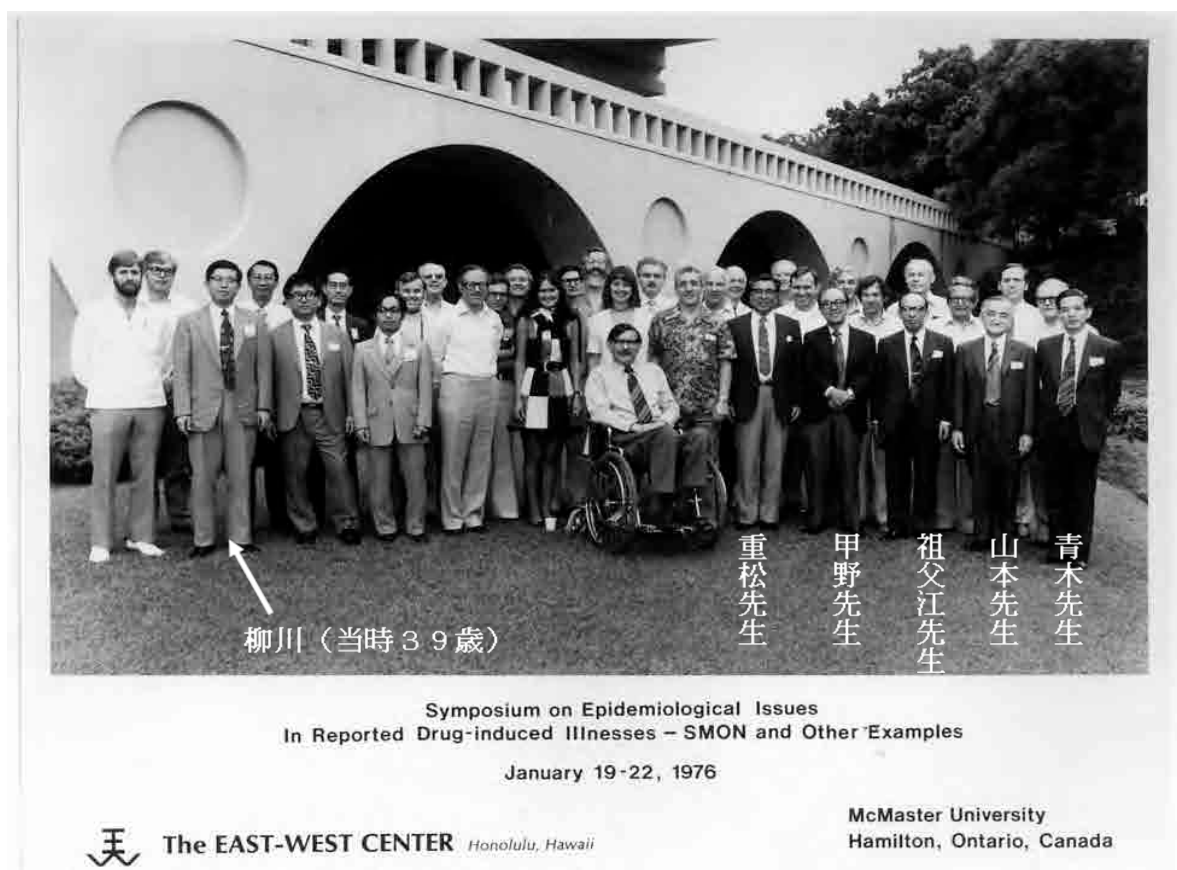
振り返りますと、在りし日の先生は、私たちにとって実に偉大な、父親のような存在でした。私たち門下生は先生のような良き師に巡り会うことができ誠に幸運でした。先生とのさまざまな楽しい思い出、先生の優しい教えは、私たちの胸に強く刻み込まれ、かけがえのない宝物になっています。これから先も、今までに増して私たちを叱咤激励し、ご指導くださることを願っておりましたのに、誠に痛惜の念に堪えません。

奥様、健様、栄子様はじめ、ご遺族の皆様にはお慰めの言葉もございません。ご遺族様の悲しみ、特に奥様のご胸中はいかばかりかと察してあまりありません。なにとぞご健康にご留意され、いくぶんなりともご気力を取り戻されんことを切に祈っております。心からお悔やみ申し上げます。

今ここに重松先生の在りし日のご遺影を目のあたりにいたしますと、お元気な先生の笑顔が彷彿としてまいり、万感胸に迫り、申し上げる言葉も知りません。先生は永遠の眠りにつかれましたが、先生の教えは多くの門下生の心の中に永久に生き続けることでしょう。

重松先生、どうか安らかにお眠りください。そして私たちをいつまでも見守ってください。今まで長い間本当にありがとうございました。さようなら。

平成 24 年 4 月 22 日



1976. 1. 19-22 スモンのキノホルム原因説に関するハワイシンポジウム参加者

1973年夏 シドニーの学会の後ポートモレスビー経由でラバウルへ



地下防空壕の入り口にて



30年ぶりのシンプソン湾を背にして



1996.11.2 橋本先生の還暦を祝って和歌山旅行



1977.7.7 「柳川教授がんばれ」の会で
重松先生から祝辞をいただくところ
(1977.8.1 柳川は自治医大教授に就任)



1999.7.14 重松邸にて団らんのひととき
重松先生はジーンズでリラックス

重松先生に導かれていつの間にか疫学の道へ、ありがとうございました

放射線影響研究所 児玉和紀

重松先生そして疫学との巡り合い

1981年7月1日に、私は米国での内科学並びに循環器病学の臨床研修を終えて放射線影響研究所（放影研）に赴任しました。奇しくもその同じ日に、放影研の3代目理事長として着任されたのが重松逸造先生でした。

それは先生の着任後間もない時期だったと記憶していますが、ある日佐々木英夫先生と一緒に理事長室に呼ばれ「君達、これを翻訳しなさい」と言われ、Geoffrey A. Rose 先生らによる Cardiovascular Survey Methods 第2版を渡されました。私にとっては荒唐無稽なとんでもない話でかなり躊躇しましたが、「まあ頑張ってやってみなさい」と疫学の素養のまったくない私達に翻訳を任せられ、佐々木先生と二人で恐る恐る翻訳に取り掛かることになりました。これが、私が初めて疫学に触れることとなった事件です。なお、出版にいたるまでには重松先生の隔々にわたる点検・加筆・修正が加わったことは言うまでもありません。

重松先生の一言で広島大学集中治療部へ

放影研に赴任して2年が経過したころ、広島大学付属病院に集中治療部が新設され、講師が募集されることになりました。ある日先生から、「君、行きなさい」と言われ、面食らっている私に「いろんな経験をしてきた方がいいから」と諭されました。これが第2の事件です。

重松先生の一言で放影研臨床研究部に復帰

広島大学付属病院で救急医療・集中治療に従事して臨床の最前線で眠る暇も無い生活を続けて4年が経ち、心身ともいささかくたびれてきた頃、重松先生から今度は「君、帰ってきなさい」と言われました。そこで放影研で再び重松先生のお世話になることになりましたが、実は私は米国留学前にも放影研に勤めていた関係で、これが出戻り2回目になってしまいました。

重松先生のもとでの新たな展開が

このころ WHO MONICA 研究が実施されており、Japan MONICA は重松先生のもとで活動していました。事務局長を務めていたのが佐々木英夫先生でしたが、彼の米国留学を機に、私が事務局長を引き継ぐことになりました。おかげで、私は国際共同研究の現場に触れることができ、世界各国に研究者仲間が出来ることになりました。

ところで、重松先生からいくつもの仕事を仰せつかりましたが、「まあ、ゆっくりやりなさい」と言われるのが常でした。しかし翌日になると、「君、あれは出来ているかね？」と言われ、重松先生の「ゆっくりやれ」は「直ぐにやれ」

の意味であることに気付かされるには時間はかかりませんでした。

重松先生のお世話で上記 WHO MONICA 研究関連の会合以外にも幾つもの会が開催されました。たとえば、1992 年には第 5 回日本循環器病予防セミナーが、また 1996 年には NI-HON-SAN 研究 30 周年記念シンポジウムが広島で開催されました。それぞれにおいて私は貴重な経験を積ませていただきました。

この他にも、重松先生は 1987 年から 1993 年まで日本公衆衛生学会の理事長を 2 期務められ、その間に学会として大きな節目となる第 50 回学術総会を盛岡で、次の 50 年の始まりとなる第 51 回総会を東京で開催されました。(写真 1) 私は、関係者に対して実にきめ細かな配慮をされる先生の学会運営をつぶさに見させていただきましたが、この時に経験させていただいたことが後にすごく役立つことになりました。

重松先生の在任期間には研究所としての大きな業績がいくつも成し遂げられました。なかでも原爆被爆者の被ばく線量推定体系である 1986 年線量推定体系 (DS86) の完成は特筆ものでした。数々の国際会議を重ねて完成に至ったもので、先生の会議の取り仕切り方にはただただ感服でした。もうひとつの特筆ものは 1995 年から 1996 年にかけて開催されたブルーリボン委員会でした。そこで勧告された研究所の将来構想は今日にも立派に通用する素晴らしいものです。

重松先生とお祝い事、そしてお酒

さて、ここからは重松先生在任中に開催された多くのお祝い事に触れさせていただきます。最初は、1985 年放影研設立 10 周年、以後、1987 年の古稀、1988 年の ABCC・放影研設立 40 周年、1990 年の勲二等瑞宝章叙勲、1991 年の理事長在職 10 周年、同じく 1991 年の外務大臣表彰、1992 年のロンドン王立内科医会フェロー推挙、1993 年の理事長続投、同じく 1993 年の喜寿、1994 年のスウェーデン王立科学アカデミーゴールドメダル受賞、1995 年の放影研設立 20 周年、同じく 1995 年のモスコウ国際高等教育科学アカデミー名誉会員推挙、1997 年の ABCC・放影研設立 50 周年などです。重松先生ご自身がお酒をこよなく愛されたこともあり、また周りに我々酒好きが多くいたこともあって、いつも会は大変な盛り上がり様でした。

お酒の話でもうひとつ。重松先生から夕方 5 時を過ぎると私の部長室へよく電話がかかってきました。「おい、風邪薬は無いか」。風邪薬とは「日本酒」のことで、私の部屋のロッカーに備え置きの廿日市市の清酒「家納喜」のことです。電話を受けるとつまみと一緒に一升瓶を抱えて 2 階の理事長室に駆けつける日々でした。研究員や一般職の者たち数人を呼んで「集中講義」が始まり、時にはそれは 3 時間にも及ぶこともありました。いつも含蓄のあるお話ばかりで、皆楽しみにしていました。先生はその当時は公用車で通っておられましたが、運転手さんを遅くまで引き止めることはできませんので、いつも先に返し、

「おい、そろそろ帰るぞ」と言われたらお宅までお連れするのが私の役割でした。お宅まではわずか20分ぐらいでしたが、車中でもいろいろなお話が伺えて、まるで家庭教師に教わっているように感じたものでした。

重松先生の一言で再び広島大学へ

重松先生の下で再び疫学研究に携わることになって10年過ぎたころ、広島大学医学部保健学科の教授公募があり、先生からまた「君、応募しなさい」と言われてしまいました。これが第3の事件です。この時にはかなり迷いましたが、結局は先生の指示に従って応募し、1999年から赴任いたしました。

赴任中に環境省から一般住民におけるダイオキシン暴露調査への参加依頼が来て、重松先生に「私はまったくの素人だから断りたい」旨を申したところ、先生からの答えは「この領域には専門家がそんなにいる訳ではないから、誰がやっても同じだ。君、やりなさい」でした。このダイオキシン暴露についての疫学調査には結局10年間携わることになりましたが、今ではやってよかったと思っています。

重松先生退任と広島重松会の立ち上げ

1997年6月30日に重松先生は4期16年の任期を終えて放影研を退任され、放影研名誉顧問となりました。16年は歴代理事長の中で最長不倒記録です。退任にあたって送別会を開きましたが、皆お別れしたくない気持ちが強く「重松先生に感謝する会」と銘打って開催しました。

その後も、多くの方々から重松先生を囲む会を設けて欲しいとの希望が寄せられ、「広島重松会」を立ち上げることにいたしました。毎年9月か10月に先生を囲む会を開催することとし、第1回を1998年に宮島で開催しました。以後、広島、和歌山、栃木、島根、呉、金沢、米子、広島、広島、浜松、盛岡、松山と都合13回開催しました。2011年は埼玉で開催することになっていたのですが、残念ながら先生のご病気で無期延期となってしまいました。今後は形を変えてでも存続できたらと願っています。

重松先生退任後に先生を中心に広島で開催したものに第3回英国疫学公衆衛生コースがあります。英国式の実践を重視した疫学・公衆衛生を日本の若手研究者に学んでいただくことを目的に、第1回が1994年に自治医大（世話人：柳川洋先生）で、第2回は1996年に和歌山県立医大（世話人：橋本勉先生）で開催され、第3回目がこの広島での会になりました。韓国と中国からの参加者も含めて30名の若手研究者が集まり、また第1回から講師を務めていただいている英国のWalter H. Holland先生にもお越しいただき、とても盛大な会になりました。（写真2）

疫学部長として再度放影研へ

大学に赴任したものの、今度は放影研に疫学部長が必要になり、またまた放

影研復帰話が持ち上がってしまいました。この時はさすがに私一人で決められるものではありませんでしたので、放影研と広島大学で相談していただき、結果的には復帰となりました。3 回目の出戻りです。重松先生からは、「児玉君。所属が変わる時は大抵が喧嘩別れで、元の所属先から請われて復帰するのは珍しいことだ。君はそれが、しかも何回も出来ているから自信を持ちなさい」と励ましていただきました。今もそのことに大変感謝し、放影研で働き続けられることを幸せに思っています。

放影研への帰任後も重松先生には大変お世話になりました。そのひとつが、2007 年 12 月にワシントンの米国科学アカデミーで開催された ABCC・放影研設立 60 周年記念式典でした。先生は 90 歳になられたばかりでしたが、奥様とご一緒にはるばるワシントンまでお出向きいただき、式典では「放影研での 16 年」と題して研究所の移転問題、被ばく線量推定体系の改定、チェルノブイリ原発事故に関した活動ならびに研究所の将来計画について勧告をおこなったブルーリボン委員会と、先生が在任中に取り組まれた特に重要な課題について講演していただきました。ABCC・放影研の 60 年に確固たる足跡を残された先生ならではの感銘深い講演でした。でも今となっては、これが先生の外国での講演としては最後のものになってしまいました。(写真 3)

ちなみに、先生はこれで ABCC・放影研の設立 40 周年、50 周年そして 60 周年の記念式典に、また放影研設立 10 周年、20 周年そして 30 周年記念式典にも立ち会われたことになり、ABCC・放影研の長い歴史の約半分を見届けてくださいました。

これからの私と重松先生

よちよち歩きの疫学者が先生のおかげで少しはまともになったようで、1997 年には英国王立内科医学会公衆衛生部門フェロー(FFPH)に推挙されました。2007 年には第 17 回日本疫学会学術総会を広島で開催させていただき、その後 3 年間は日本疫学会の理事長も務めさせていただきました。また、国連の原子放射線影響科学委員会には日本派遣団の一員として 2004 年から参加させていただいており、今は派遣団代表代理を務めさせていただいています。

しかし、まだまだとてもとても先生の足元にも及びません。でも今後は、私に出来ることは僅かとは思いますが、先生のご遺志を継承して努力していきたいと思っています。見守っててください。

最後になりますが、今回の先生のご闘病に際し、ほとんどお役に立てなかったことを心苦しく思っています。申し訳ありません。

先生のご冥福を心よりお祈りさせていただきます。

先生には 31 年間お世話になりました。本当にありがとうございました。



【写真 1】1982 年 10 月 21 日：第 51 回日本公衆衛生学会総会（東京）にて理事長挨拶をされている重松先生



【写真 2】1998 年 12 月 4 日：広島で開催された第 3 回英国疫学公衆衛生コースで談笑されている重松先生（左）と Walter H. Holland 先生（中央）



【写真 3】2007 年 12 月 12 日：ワシントンの米国科学アカデミーで開催された ABCC・放影研 60 周年記念式典で講演されている重松先生（先生は当時 90 歳でした）

重松逸造先生を悼む

名古屋学芸大学 学長 井形 昭弘

長い間に亘りご指導をいただき、かつ尊敬して止まない重松逸造先生が逝去され、まだ半ば信じられない気持ちです。今、生前先生からいただいたご指導に感謝し心からなる哀悼の意を捧げたいと思います。正に巨星墜つというのが実感です。重松先生は数々の功績を残され、わが国の公衆衛生医学界の重鎮でした。

重松先生と私との出会いはSMONの解明に関ったときでした。キノホルムが原因として登場したときに、先生はキノホルム中毒説を支持され疫学的な因果関係につき懇切丁寧なご指導をいただきました。

また、欧州のキノホルム使用状況を調査することの必要性を主張され、その調査に椿先生と私が指名されWHOの調査活動を行うことができました。これは私の人生でも大きな出来事でしたが、先生はWHOや厚生省との交渉をテキパキとして下さり 1970 年 7 月私は新大椿教授とともに三ヶ月の欧州調査を無事完成できました。先生のお陰でWHO、各国政府、研究機関、病院の受け入れも極めて親切で調査は順調に進み、結果は重松先生の予想とおり、欧州各国ではキノホルム使用は限定的で、幾つかの中毒症例の情報は得ましたが、一般に使用量が少ない為に中毒例の発症は稀であることが判明しました。

当時、キノホルム説に対し幾つかの疫学上の反論がありましたが、中江先生（後日獨協医大教授）と一緒に取り組んだ私は「キノホルム投与総量と発症を対比するのではなく、一日投与量と投与期間の二因子に分けて分析すると発症の量的関係が明らかになる」ことを発表しました。またSMONの腹部症状がキノホルム投与の引き金となった一般的な症状とキノホルムによる自律神経症状との二因子からなることを指摘しましたが、いずれも先生に大きなご助言をいただき、自信をもって発表に漕ぎ着けることができました。ここに先生のご指導に心から感謝の意を捧げます。

やがてキノホルム中毒説が有力となり各地で裁判が起こされましたが、弁護団は全国統一弁護団を組織しこれを受けて裁判官も連絡会を持ち、異例の裁判進行が図られました。ここで重松先生の調整能力が遺憾なく発揮され、原告、被告の主張を良く聞かれ、両者が賛成する形で全国を通じてSMON調査研究班が鑑定を受け持ち、その結論には

両者とも了解することになったのです。かくして裁判は円滑に進行し、患者の早期救済に大きく貢献しました。スモンの患者救済には先生の力に依るところが大きかったことを強調したいと思います。この鑑定のために調査研究班は数十回の会合をもち、毎回深夜におよぶ作業を遂行しましたが、ここでも重松先生の纏め方は鮮やかで、その思い出はいつまでも残っています。

その後、1971年私は鹿児島に赴任しましたが、難病や水俣病の疫学調査に従事し引き続き色々ご指導をいただいていた。広島放射線影響研究所に招いて下さり外国人を交えた研究グループを前に水俣病の話をさせていただき、好意的なアドバイスもいただいたこともありした。講演後、国立呉病院大村一郎院長（海軍兵学校同期生、自衛隊術科学校の校医でもあった）と井形がかつて生徒として訓練を受けた江田島の海軍兵学校に連れて行っていただき、一般の方は行けない隅々まで見学できました。これも重松先生のご威光によるもので懐かしい思い出です。

先生は戦時中、海軍軍医としてラバウル航空基地にもおられた歴戦の勇士で、かつての海軍兵学校生徒であった井形、大村は大先輩のお話に感激し話は大いに弾んだことを覚えています。

翻って三年前、私の教室出身の徳島県保健福祉部医療健康総局次長佐野雄二先生が急逝された折、先生と佐野先生との接点を改めて知ることになりました。佐野先生は重松先生のご指導を得て先生のご好意あるご推薦で伝統ある英国王室医学会のフェローに指名されていました。佐野先生は私が主宰していた鹿児島大学第三内科に入局し、免疫学の領域で立派な業績をあげ、将来の教授と目されていたが、郷里の徳島に帰ることになり、改めて公衆衛生を専攻、重松先生のご指導を得ていました。

後日、重松先生にお礼のお手紙を差し上げたところ、極めてご丁寧な返事をいただき、今も手許にあります。内容は先生がわれわれに残された教訓であり、大切な形見のように思えます。

かつてチェルノブイリ事故の時に日本政府代表として颯爽と活躍しておられた重松先生の姿を想起しますが、今回の福島原発事故をどのような目で判断されるかを想像しています。

重松先生どうか安らかに眠り下さい。

ご指導有り難うございました。

心に残る人生の達人

元厚生省スモン調査研究班 班長
名古屋大学・愛知医科大学名誉教授
祖父江 逸郎

重松 逸造先生は、1941年大学医学部卒の戦中派で、私より2歳年上の先輩。戦時中、終戦後の様々の困難と激動の時代を走り抜け、平成の今日まで94年の長い人生の中で、すばらしい学問的成果をはじめ、多くの社会的貢献をしてこられた。世紀の奇病とされ、キノホルム薬害で有名なスモンをめぐり、厚生省研究班のことなどでご縁ができ、種々お世話になり、ご指導いただいた間柄である。どすの利いた濁声と説得力のある話し方は印象的である。上手く人の気持ち、ところをとらえ、手懐ける力は抜群。長いお付き合いの中、ことに厚生省関連研究班の運営や研究費交渉など実に堂に入ったもので、様々の機会を通じ、人生の達人振りを目の辺りにすることができた。

スモンは、その多発と感染説の台頭などで、一時は社会問題にまで発展したことがある。人心を惑わすような如何わしい風潮を一掃するためにも一日も早く眞の原因を研究することが緊急な課題とされた。そんな中、臨床例から、緑便や緑色尿の存在が指摘され、キノホルム中毒説が急に浮上。多くの研究者による巨大研究班が編成され、学際的研究を実施することになり、あらゆる可能性について徹底的に追究、木目細かで用意周到な実施計画による動物実験まで実施され、遂にキノホルムによる薬害であることがほぼ明らかにされた。これらの経過の中で、先生お得意の疫学的調査研究の立場から、その核心に迫る数々の事実が実証されたことは、スモンにまつわる貴重な歴史的な研究の中でも一段と光っており、高く評価されている。

スモンの原因がキノホルムであることが次第に明らかになるにつれ、製薬会社、国などを相手取り、訴訟問題に発展、その自黒を明確にするため、全世界のスモン関連研究者がハワイに集まり、研究成果をめぐる討論の場が設けられるようになった。スモン史上有名なハワイ会議である。この会議が設定されるまでの様々の打合せ、段取りなど、先生が多くの労をとられた。また、先生は、日本側研究チームのリーダー役となり、研究発表の指導、打ち合せ、外国研究者とのやり取りまで事細かに配慮された。この会議を通じ、キノホルム説について疑義のあった幾多の点について語が晴れるように明解にされ、諸外国研究者にも強く印象づけることができた。先生の企画力、実行力、説得力を目の辺りにし、強い感銘を受けた。この会議での成果は、その後のスモン訴訟問題の解決、運営、進展などに大きく影響したことは確かである。

スモン訴訟では、各訴訟で対応する個人別にスモンの診断に合致するか、キノホルムに起因する障害か、症度はどの程度か、などについて各症例毎の鑑定が必要で、スモン研究班に参加した臨床班員15名による集団鑑定を実施することになった。私が鑑定団の座長としてまとめ役をすることになったが、それまでの経緯などから、先生が東京地裁との交渉や鑑定の進め方など種々の段取りに当られた。慎重にあらゆる角度に配慮しながら、非凡な手腕を発揮、大変難しいとされた集団鑑定の作業は、円滑に進行した。6,000例を越す鑑定で約

20年に渡る長い歳月が流れたが、裁判史上でも、また、医学史上にも全く前例のない、空前絶後の世紀に渡る大集団鑑定が大きなトラブルもなく粛々と実施された。先生の信頼ある、強力な後ろ楯があったからこそこのことで、多数患者の救済にも多大の貢献をされた。

人生の過ごし方には、いろいろあり、特定のスタイルがあるわけではない。各人各様のパターンがある。どんなパターンを選択するかは、実際にはなかなか難しい。その一つに自分がこの人と決めた目標を設定、即かず離れずマラソン走者の如く、目標走者に寄り添いながら、長い人生の一日一日を無事に過ごす。そんな人生の過ごし方がそれとなく語り継がれている。重松先生こそ、まさに、こうした目標に相応しい一人であり、私の人生でイメージとして画き、寄り添いながら今日まで走り続けてきた。つい先日も、先生と親しい方に近況を尋ね、「元気にしておられる」との知らせに安堵したところであるが、今回、突然の訃報に接し、愕然とした次第、大切にしていた目標が、私のイメージから突如として消え、大きな穴が開いた感じで、当惑している。

あの濁声の力強い説得力のある話し方が耳に聞え、独特の表情、仕草が目の辺りに見えるようであるが、もうその雰囲気には接することはできない。残念至極、淋しいかぎりである。心から先生のご冥福をお祈りしたい。

どうそ、 安らかに眠り下さい。

合掌

「フランスより重松先生を想う」

WHO 名誉事務局長 中嶋 宏

まずは、謹んで、故重松逸造先生の御霊に哀悼の誠を捧げます。

先生の訃報は、元広島県の部長をし、現在は WHO 本部で事務局長補をしている中谷比呂樹君からすぐに受けました。先生は日本疫学界の、いや、日本公衆衛生学会の重鎮であらせられたので、様々な局面で、WHO はご指導をいただいております。ここに、改めて御礼申し上げます。私自身も何度もお目にかかり、また会議での御姿を見ておりますが、記憶に鮮烈に残ったことを1つだけ記して、追悼文としたいと思います。

私自身は、WHO 事務局長 2 期を務めあげた後、フランス・ポアチエ市郊外に暮らしながら、たまにパリのフランス学士院に登院するという生活を始めて 10 年以上たちました。今日本は東日本大震災からの復興と福島原発過酷事案で大変な困難に直面しており、在欧邦人の一人として心を痛めぬ日はありません。

重松先生の思い出で強く脳裏に焼き付いているのは、チェルノブイリ原発事故による健康影響の問題です。同事故は 1986 年 4 月 26 日に起こりましたが、当初は WHO ヨーロッパ地域事務局のみの対応でした。しかし私はこの問題は世界的視点から取り組む必要があると考え、事務局長に就任後、ロシア政府からの要請も受け、また私自身も現地を訪れるなど、WHO 本部として積極的に取り組むこととしました。住民の健康管理と長期健康影響調査の重要性・緊急性は論を待たないところでしたが、具体的にどうするかというところで、直ぐに思い浮かべたのは重松先生でした。更に、放射線影響研究所の理事長をされているということで、先生の豊富な経験に加え、研究所のお仕事自体がまさに正鵠を得ていると思ったので、ある日比治山の研究所にお伺いしたのです。先生は研究所の関連の幹部とともに真剣なご意見を下され、広島の前爆の人体影響と比較されながら、急性期の健康影響のみならず、放射線の内部被爆による長期の健康影響の重要性を指摘されたように記憶しています。これを皮切りに、WHO は笹川記念保健協力財団のご協力を得て、WHO IPHECA* Project (1991-1998) を開始することができ、被災地の方々に少なからぬ貢献ができたのではないかと考えているところです。

先生はこのような、ご自身のお仕事、研究所でのお仕事、日本国のお仕事、そして国際的なお仕事でも、大きな足跡を残されました。大きなお体でダミ声でしゃべられる先生にもはやお会いできないことは痛恨の極みではありますが、十分な御仕事をされましたので、今はひたすら安らかにお休みくださいと申し上げ、簡単ではありますが、追悼文とさせて頂きます。

重松逸造先生と公衆衛生学会

小町 喜男

重松逸造先生は、日本公衆衛生学会の理事長として、永年、盡力され、学会の近代的な発展に大きな足跡を残された。その中で私の最も記憶に残るのは、次の2点である。

その一つは、日本公衆衛生雑誌の編集についてである。

当時の編集の運営は、学会理事会の意向とは別に、独立した形で行はれていた。周知の如く、投稿された論文は、査読委員会の下で審査され、「原著」と「資料」に分類されるが、曾ては、研究室の実験成績が重視され、地域における公衆衛生活動(予防や疫学的検討成績或いはその対策等)が軽く扱われていた。

実験室内の成績は「原著」として採用され易く、後者の地域における研究成績は「資料」として扱われることが多かった。このことを改め、地域における仕事をもっと正当に評する様に改めるということが、重松理事長の大方針であった。当時、私は、筑波大学の社会医学系公衆衛生に在籍していたが、会誌の編集担当理事として、その改革にあたる様に指示された。これは可成りの難問であったが、何とか理事長の期待にそうことが出来る結果を得た。実際に、フィールドにおける実地の疫学、予防方策の検討成績等が「原著」として採用される様になった。

もう一点は、公衆衛生学会総会の開催地のことである。それ迄は、六大都市を中心として、開催地が順次選ばれていたが、これをもっと広範囲に各地域に拡げ、学会活動を活性化し、多くの人に参加してもらおうということである。いはゞ、学会活動の民主化である。

その一番に筑波(茨城県)が選ばれ、私が学会長を引き受けることとされた。当時は、筑波では大学、研究所は数多く存在していたが、現在のように大きな国際交流センターもなく、つくば市中央にあるノバホールと大学の中央大講堂と各研究施設の講堂などが散在していた。それを循環バスで繋ぎ、何とか会員の移動を容易にする等、努力した。皆さんの協力のお蔭で、筑波で初めて三千人を超える総会の運営が出来た。これは筑波大学にとっても大きな刺激になり、学長からも喜ばれたし、何よりも学会としても地方の各都市において、公衆衛生学会総会が開催されるという魁ともなった。

これは、重松逸造理事長の大英断があつての事である。現在は、各地で開催されることが当たり前のことのように受け止められ、また、比較的軽く、地元開催を受け入れている所もみられるがこの事の重要性をもう一度考えていただくことが、大先達、重松逸造先生の御業績をたたえ、ご冥福をお祈りすることにもつながることと思う。

「日本の疫学界をリードされた重松先生のご逝去をいたんで」

財団法人 日本公衆衛生協会 名誉会長
北川 定謙

重松先生ご逝去の報に接し、公衆衛生の発展を担ってこられた大きな柱が、また一本なくなってしまったことに心からの寂しさを禁じないわけにはいきません。

先生は日本の公衆衛生学なканずく疫学の第一人者であり、戦後の公衆衛生の多くの出来事に出会われて、特に疫学的アプローチによって様々な事象について、具体的な解を示されてこられました。まさに実践公衆衛生のリーダーであられました。その一・二をここに記して、先生のご功績をたたえるよすがともいたしたいと思います。

去る平成14年、当時の公衆衛生学会理事長であった多田羅先生の発案で、戦後日本の公衆衛生の発展にかかわって来られた諸先生方のお話を伺う座談会シリーズの企画が具体化され、その第1回に重松先生にご登壇いただいた記録が公衆衛生雑誌第49巻第3号(平成14年)に掲載されています。

重松先生は、戦後復員されて以来、国立公衆衛生院に奉職され、その後金沢大学で多くの後進を育てられ、その多くの方々が今日、日本の疫学界のリーダーに育っておられます。

国立公衆衛生院に戻られて疫学部長として専門分野をさらに確立されました。最後は、財団法人放射線影響研究所の理事長として十余年にわたって、広島・長崎の原爆被爆者の健康影響調査を発展させ、国内はもとより国際的に大きな足跡を残されて、日本の疫学界における重松の名を不動のものとされました。

特に、昨今、チェリノブイリや福島原子力発電所の事故で大きな社会問題として注目されている放射線被ばくの問題にも大きくかかわって来られました。財団法人放射線影響研究所の理事長として、ICRP(国際放射線防護委員会)の規制値のもとになっている、放射線の個人被ばく放射線量の推定値を原爆被爆データの詳細分析の結果から導き出すという仕事をリードされるという大きな業績をあげておられます。

先生のご生涯はまさに疫学の発展そのものであったと思います。戦後の日本は著しい経済の発展をとげたのですが、その過程で様々な公害病の悲劇を伴って大きな教訓を内外に残しました。重松先生は疫学という武器によって、これらの諸問題の解明に大きな力を発揮されました。

昭和20年時代のコレラ、発疹チフス、結核、赤痢などの感染症、さらには「イタイイタイ病」、「水俣病」、いわゆる「スモン病」(亜急性脊髄視神経症)等の環境汚染などによる健康被害、また「川崎病」などまったく新しい疾病など疫学者としての重松先生の学問的手法によって解明されることになった病気は数限りのないものがあります。

長年にわたって、厚生省の行政にたずさわって来た者の一人として、重松先生の大きな存在にあらためて敬意と感謝の意を表させていただきたいと思います。

一方、重松先生はあの独特のお声で、多くの人の心を引きつけられ、お酒も好んでたしなまれ、いわゆる重松学派を形成されてこられたようであります。

多くの関係者から心から敬愛される大きな存在であられたことに思いをいたしております。

心からのご冥福をお祈り申し上げます。

重松先生の 60 年間のご薫陶に深謝

放射線影響研究所前理事長 長崎大学名誉教授 長瀧重信

重松先生

重松逸造先生とのお別れの会にあたりまして、最初に先生には 60 年にわたってご薫陶賜りましたことに心からお礼申しあげます。本当に有難うございました。

先生と最初にお会いしたのは、私が新制東大の教養学部から医学部の学生になり、当時の亡国病であった結核の撲滅を願う医学部学生の倶楽部、結核研究会に入部した時でした。部長は当時の東大の伝染病研究所の内科の北本治教授で、結核研究所では、父の同級生であった岩崎龍郎先生にご指導いただきました。また当時は岡治道名誉教授もご健在でした。先生はハーバード帰りの新進気鋭の公衆衛生院の疫学者として、結核研究会の埼玉県の農村の結核検診のご指導を賜ったと思います。

学生でしたが、ツベルクリンの皮内注射を教わって子供の検査を手助けし、胸部の間接撮影では子供達を支えて 20—30 人は一緒に被曝しました。その後の写真の読影は合宿の楽しみのひとつで、それぞれの読影結果をみんなの前で重松先生の読影と比較しながらご教授頂きました。確か医学部の学生の結核検診も結核研究会で行っていた記憶があります。先生は当時から指導者としての威厳とともに、一方では人間味にあふれた暖かさを感じさせる先輩でした。私にとりまして、先生は生涯そのような師であり先輩でした。

卒業後、沖中内科に入局しましたが、医局でも先生は大先輩でした。医局では沖中教授から内分泌、得に甲状腺のテーマをいただきましたので、医局の行事でご挨拶する程度になり、私は 32 年前に東大から長崎大学に赴任しました。ところがその直後に先生は東京から放射線影響研究所理事長として赴任なさいました。

当時の慣習として医局員を派遣している臨床教室には理事長は礼を尽くして挨拶にこられるのですが、そのような形で先生と長崎で再会しました。ちょうど長崎大学の教授として原爆被爆者の研究は義務であると感じていたころでしたので、いろいろとご教授頂き、ご配慮も頂きました。強く記憶に残っているのは、医局から放影研に派遣していた医師を中心に原爆被爆者の甲状腺の超音波診断を行おうとして、最新の超音波の機器を開発し、放影研の成人健康調査集団で調査した時のことです。黒い雨の降った西山地区の被爆者の方を調べるときにも、放影研の臨床部のスタッフが地域との連絡をとってくださいました。

チェルノブイリ事故の 1 年後に長崎で開催しました日本核医学会学術総会では、この原爆被爆者の甲状腺疾患の調査を中心に、当時のチェルノブイリ事故

の影響をヨーロッパの IAEA のデータを中心に発表頂き、まとめを英文で一冊の本として発刊しました。このことが契機となり、チェルノブイリ事故の研究者の一人として、笹川記念保健協力財団のチェルノブイリ調査団には団長の先生にお誘い頂き、喜んで参加したのがその後の長いチェルノブイリ事故の健康影響調査の発端となりました。

長崎大学定年退官後は、これも先生の強いご推薦により後任の理事長に赴任いたしました。その後のことはこのお別れの会の方々にご存じのとおりですが、福島原発の事故の後、私に報道機関の取材、講演依頼、特に内閣官房の原子力災害専門家グループの任命があった時には、本当にわがことのように喜んで頂きました。手術後のご入院中でも、わずかに目をお開けになり、私に「本当に良かった」とお声をかけて頂きました。

重松先生、あの時の先生の暖かいお気持ちは十分に理解いたしました。本当にありがとうございます。60 年間のご薫陶に改めて厚くお礼を申しあげ、ご冥福をお祈りいたします。

ご家庭での重松先生の思い出

重松夫人の友人 山崎隆子

二月に旅立たれました重松先生をお偲びして私の中の重松先生のあれこれ、順不同でございます
が少しお話させて頂きたく存じます。

先生と初めてお会いしたのは親友芳枝夫人とご結婚された時でした。お二人はともに早くにお父
様を亡くされ、芳枝夫人は先生の中に頼もしさや包容力を見られたのだと推察いたしました。実は
お二人は隣同士にお住みになって毎朝窓の下を通る美しい女性を先生が見染められたことが出発
のようでした。皆様意外でしょうか？先生は女なんかと言う顔もなさいますから・・・重松先生
は豪放磊落に見えながら小心なところ、淋しがり屋さんのところもございました。お話し好きで明
るく一緒に居てとても楽しく頼もしいお方でした。

実は重松先生は私の生涯を決めたお方と申しても言い過ぎではないのです。お二人がご結婚され
た後、新家庭にちょくちょくお邪魔しておりました私に保証付きの男だと先生に連れられて指定さ
れた銀座のレストランの階段を上ったのを今でも覚えております。あの時の先生をただ信じてつい
てゆき結婚いたしました。そしてずっと先生はびくびくしながら見守っていらしたのだと思います。
親分肌と申しますか兄のような心づかいをして頂きました。少し若く弟分でありながら夫は数年前
に先に旅立ちましたが、そのあと私に淋しい思いをさせないようにと度々お夕食にお連れ下って、
いつもトライアングルで歩いておりました。お話は、ウイットに富みジョークを飛ばし笑わせるの
です。その一言づつで元気を取り戻すよう心配りをして下さいました。

こんなこともありました、先生はお酒を沢山お飲みになるので夜はお風呂に入らず寝てしまわれ
毎朝一人で入浴されるので、ある時奥様が「みんな夜お風呂に入ってパパひとりだけ朝入るのは
勿体ないから夜入って下さいな」とお願いしたところ間髪を入れず、「何？何？僕は風呂代も稼い
でないの？」とおっしゃったので奥様は言い返しもできず笑ってしまわれたそうです。このエピソード
は我が家なども風呂代の所を変えて〇〇代も稼いでないの？が流行ってしまいました。

又ある時はお嬢様が小学生のころ五段階評価のころですが成績表に3が付いたものがあって、マ
マは「もっとお勉強しなくちゃね」などと云ってらしたら、私に向かって重松先生が『5たす1は？』
「6です」『では6割る2は？』「3です」すると、すかさず「ね、当たっているでしょ、5は僕、
1はママ、で二人の子供は3で当たり前」と鼻をぴくぴくさせ、ヒ・ヒ・ヒ・と笑うのです。女軍
は「ひどい！」と言いたいのですが思わず「旨い！」と言ってしまったのです。

先生から悲観的な表情や諦める弱気なところは見たことはなくいつも努力、研鑽、精進のお姿ば
かりでした。外国旅行もご一緒でしたが、観光バスの中で異国の方と笑いながらおしゃべりをして
いた先生が独りになったらポケットから英語の辞書を出して読んでいらしたのです。あまりにも手
ずれたようなので主人が「先生ちょっと見せてよ」と言い手に取ったら紙が柔らかくふわっとする
ようなくたの辞書だったそうです。それを見て主人が私に申しました「先生は秀才と言う事は
わかっているけど努力なさっているんだなあ、僕は学生の時もあんなに辞書使わなかったなあ」と
敬服しておりました。先生は「いやいや確認だよ」とおっしゃったそうです。

長い間本当にお疲れさまでした。

先生をお偲びしつつ安らかなとこしえの眠りにおつきになりますよう皆様とともに祈りいたし
ます。

海軍軍醫大尉 重松逸造 軍醫長と私
戦中―戦後の交流

海軍軍醫大尉 小見山 茂人

昭和16年12月、日米が戦争の火蓋を切り、私共医学、薬剤、歯科医関係者は、卒業が3か月繰上げとなりましたので、16年末卒業式がありました。16年秋に、海軍軍医、薬剤師、歯科医科を志願されていた方々は、12月10日前後に海軍省から採用通知が届きました。

海軍軍医科68期生は、17年1月15日に中、少尉に任ぜられ、横須賀海軍砲術学校に入校が決定、この方々は、永久服役の本ちゃん、と呼ばれる方です。我々69期生は二年現役の短現で1月20日に築地の海軍経理学校で、嶋田繁太郎海軍大臣から、海軍軍医中、少尉、薬剤中、少尉、歯科医少尉に任ずる旨の宣言がありました。私共は打ち揃って、宮中に参内御礼の記帳を済ませました。早速国鉄両国駅へ赴き、増結された2等車の客となり館山駅へ向かいました。駅から館山海軍砲術学校のある神戸村までは、トラックの荷台に乗った記憶があります。

砲校ではハンモックが寝床になり下士官、兵の経験を味わい、また麦飯の三食を賞味しました。砲校では、海軍の軍事一般の座学があり、造船学も学ぶ機会に接しました。

砲校は3月19日までで修了し、3月20日からは海軍軍医学校普通科学生被仰付られ軍陣医学教育を各科の教官から受けました。軍医学校は築地に在り、(現在の国立がんセンターで、明治初年海軍兵学寮として、海軍兵学校の前身でした)附属病院は、市立築地病院が代用され、近くに新橋演舞場があり、時折和服のお嬢さんを垣間見ました。

戦中、先生は、乗艦球磨に1か月の赴任の長旅を続けられ、その後に折角任に就かれたラバウル海軍運輸部軍医長の辞令を受けられ赴任されましたのにお仕事が出来ないまま、ラバウル地区の籠城作戦のため、ご苦勞の毎日であったと伺います。

昭和21年5月、先生は復員船で浦賀港に上陸され、痩せて、黄色な顔色の先生を浦賀検疫所でお迎えしましたことを、私は現在もよく記憶しております。濠軍のPSWのお姿でした。

当時浦賀港は、コレラ船の入港指定港で、元海軍軍医が主体で、患者の治療、検疫を米軍の指示下でこなしており、河合榮検疫所長から要請を受けられた先生は、一度大阪のご自宅へ帰られ、間もなく再びコレラ防疫のため浦賀検疫所に来られ、専ら検査課で、コレラ菌検出の指導をされました。

私は現場係で、海上隔離中の復員者、引揚者の検便屋の毎日でしたが、採便棒でペプトン水が濁るような採便が、菌の検出率が高いと、検査課の声が有り努力しました。

この検便班に、ある日海が荒れて迎えの便が来ない、とモールス信号があり、船室のサロンに一夜の宿をお願いしました。舵窓を細目に開き夜通し隙間風を入れたため、先生のお気に入りの看護婦が、顔面神経麻痺症に罹り回復までに長かった記憶があります。

私共の検便の網の目を潜って、部下に検便を受けさせていた陸軍少尉が、上陸時の検便で捕まりました。保菌者で、症状が軽かったようです。私共海軍軍医魂の団結で、1人の患者、保菌者も浦賀を通さなかったことが、大きな誇りで、朝日賞はのがしましたが、よ

く働きました。先生は、21年暮れ検疫所を辞され、国立公衆衛生院で、学究の徒になられました。

昭和37年、先生が金沢大学に教授として赴任される壮行会は、出征兵士を送る会の再現の様相を示し、都道府県会館の職員を驚かしました。一同靖国神社参拝を済ませた元海軍医の剛者でありました。

昭和45年頃、私は大宮保健所から国立公衆衛生院に講習に行く要員となったので、先生に連絡しましたところ、コレラ防疫とこの時期に、上尾市内で赤痢の集団発生があり、豆腐の舟水から赤痢菌を発見したことがありました。私の公衆衛生院派遣は、人事の都合で中止になりましたので恥を晒さずに済みました。

平成2年には、日本公衆衛生学会理事長に先生をお迎えし、私は理事として、御一緒に仕事をさせて頂き、平成10年には、先生と共に日本公衆衛生学会名誉会員に推されました。

その後、学会や公衆衛生協会でお会いする機会がしばしばありました。

5年前の年賀状に、横須賀市内衣笠病院長、橋本勉先生は、先生の金沢大学時代の教え子と、一筆がありましたので、衣笠病院は、私の老人ホームの委託病院である旨をお返事しましたところ、橋本院長御夫妻がわざわざお訪ね頂きました。私がホームの懇話会長の折には、院長先生を囲む会を設けることなどしました。先生も私も長い間の世田谷区民でしたね。

時折久闊を叙すことをしており、先生が三笠記念艦を訪れたいから、電話するよとお返事を頂きましたが、遂に実現しないままになり、残念至極でなりません。

合掌

八雲ラジオ体操の会員からのお手紙
目黒区八雲ラジオ体操の会 石井邦利

はじめまして、私は「石井」と申しまして、目黒区の八雲ラジオ体操の会で、長い間重松先生とご一緒させて頂きましたメンバーの一人です。重松先生は、このラジオ体操に、ほとんどお休みすることなく毎朝出席されていました。

体操が終わるのが六時四十分、愛用のステッキを持たれて帰宅の途につく訳ですが、私は毎朝先生の家まで雑談しながら、ご一緒するのが楽しみの日課でした。

去年のいつ頃でしたか、先生が「私は明日から入院するので、しばらく体操をお休みする」と云うことで、まるでどこか温泉旅行でも、ちょっと行ってくる様な軽い、お話しで、いつもの様に先生の家のお門までお送りして、笑いながら別れましたが、これが先生との最後のお別れになるとは、まったく考えませんでした。

而しそれから何日経過しても、お戻りになる様な心配が無いので、会のメンバーの畑さんを通じて、ご様子を時々調べてもらっていましたが、今年二月はじめの新聞で先生がご他界されたことを知り本当にびっくりしました。

私は戦争中、海軍追浜航空隊にいたことから、海軍の零戦の基地として有名なニューブリテン島のラバウル航空隊に、軍医としてご活躍になった重松先生と話が合いまして、体操の帰り途が本当に楽しみでした。ラバウルの夕映えは本当にきれいだったと思い出を語られる先生の輝いた顔が忘れられません。

ラジオ体操の帰り途のほんの僅かな時間でしたが、よく話の種がつかないものだとは懐かしい気持ちで一杯です。また、金沢におられた時の話で、九谷焼のコレクションが澤山あるから、家に寄って見ていく様にと云われていましたが、いつでも寄れるので、遂に見る機会を失いました。

私は二月はじめの新聞で先生のご他界を知ったわけでしたが、「お別れの会」はいつ新聞に発表されるかと思っていましたところ、発見出来ず、畑さんに問い合せて、四月二十二日に開催されることを知りましたが、三月二十一日が締め切りと云うことで柳川さんにご連絡して見ることになりました。

私はさきにお書きしました様に、先生の入院する前日まで、お元気な先生を家までお送りし、「早く退院なさって体操におでになって下さい」と別れましたので、まさか、そのまま他界されるなんて全然考えてもいませんでしたから、「さよなら」も云っていません。

従って、この「お別れ会」に出席出来れば先生の遺影に、今まで親しくして頂いた、お礼とお別れの挨拶をひと言したいと思い、柳川さんにお便りを書いた次第です。

ご返事を賜りたくお願い申し上げます。

早々

ラジオ体操とお酒と

畑 威

(目黒八雲ラジオ体操会)

その長老－重松先生－は毎朝六時を廻るころステッキ(杖と言うと正される)をもって(ついでではない)、ラジオ体操の会場にスタスタと現れる。始まる前にまだ時間があるとその周辺を行きつ戻りつして、ひたすら「歩数」をかせがれる。これは、その日の晩酌とリンクしているご自身に課せられたルールのようなのだ。

一般的には、高齢者が多いといわれるラジオ体操ではあるが、先生はその最年長者として、仲間からは自ずから尊敬の目を向けられている。それは、体操が始まるといつも定位置で、お年の割に力強くも柔軟な動作をみせられながら、“エイッ!”との掛け声も他を圧するものがあるからだ。しかも、そういう毎日が“雨が降っても槍が降っても(ラジオ体操の常套句)”, 地方、外国へお出かけの時の他は、継続されて決して若い者に負けない、お元気さがあるからだ。

とは言え、何と言っても毎朝十数分だけの集団運動である。終わればみんな三々五々解散して帰って行く。仲間の中には、この先輩とのお付き合いをただ体操の時だけにしておくことはいかにも残念だと、“どうでしょう。たまには一杯やりながらお話を伺わせていただくなんてことは……”と恐る恐るお伺いをたてた。

すると先生は実に気さくに応じて下さり、以降私達は何回か居酒屋での至福の時を実現することができた。

席上先生は、戦時中軍医としてのラバウル島でのご体験を話されたことはあったが、本来のご専門分野でのご活躍のことは、敢えてご自分からは語られることはなかった。

それよりも、むしろ私達が教わったのは、様々なお酒についての先生の蒞蓄の深さであった。就中、私の好みで先生とボトルを共有した芋焼酎の飲み方について、「本当は、まずお湯六を先につぎ、そこへ焼酎四を加えて作るのが私の流儀だ」とのご指導を得たりした。

こうして盃を重ねる内に談論風発、先生のご専門分野とは全く畑違いの私達としても、先生に伺うお話は何もかも興味深く、高い知性に裏付けされた極めて有意義なものばかりであった。

その先生が、ある日突然ご病気治療のため体操を休む、と言われた。先生の平素のお元気さと、医学界の最高のバックを背負われての上なので、私達は必ずや又先生が再起されんことを信じて疑わなかった。

しかしその祈りも叶わず、先生は、不帰の方となられた。こうなると、これまで私達が余りに疎かった先生のご生前の学問的、社会的な面での偉大さを次々と知るところとなり、今にして思えば、今般の大震災や原発事故について、もっともっと先生のお話を伺っておけばよかった。という後悔の念が募るのである。

ところで考えてみれば、専門外の私達はラジオ体操とお酒という、日常生活の最も原点において、優れた先生のお人柄に触れえた有り難さは、何物にもましての幸せだったと思える。

何となれば、先生と共に過ごしたラジオ体操こそが、真の意味で、心身の健康をもたらすものと考えられるからである。

先生へ心からの感謝を申し上げ、安らかなご冥福をお祈り致すものである。

了

(平成24・3・18)

A Tribute to Dr. Shigematsu

放射線影響研究所元理事長

Burton G. Bennett

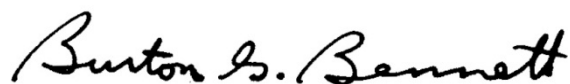
I have always had the deepest respect for Dr. Shigematsu. I greatly admired his warm personality and fine character. I am not sure when we first met, but it was during the international review of the Chernobyl accident in 1990-91 that we worked most closely together for the first time. I saw first-hand his fine leadership abilities.

He would suggest to me whenever we met that I should consider coming to Japan to work at RERF. As appealing as that was, I thought it would never happen. I had my work at the United Nations that kept me fully occupied. When mandatory retirement came for me in 2000, however, and a request for me to serve at RERF came along, I could not refuse. The decision to appoint me as the first US chairman of RERF, I feel, rests largely with the support given to me at that time by Dr. Shigematsu.

Before I began my term as chairman of RERF, I met with Dr. Shigematsu and asked him to tell me the secrets of his long and successful chairmanship of the institute. He told me to listen carefully to everybody, act without haste, and to have a big heart. He embodied the virtues of graciousness of behavior and good-hearted and genuine caring, compassion and support of others. I could do nothing better than to emulate these fine characteristics of our dear friend and former chairman.

It has been a privilege for me to know Dr. Shigematsu and his wife for so many years. My wife, Meta, and I met them on every occasion we had when in Tokyo or at conferences throughout the world. We will cherish the many warm memories we have of the times we were together. We extend at this time our heartfelt sympathy to Mrs. Shigematsu and her family.

It is my honor to pay the highest tributes to Dr. Shigematsu. I benefited richly from him as mentor, colleague and friend. I admired his resolve to stay healthy during his last years by walking great distances every day without exception. He had a full and rich life, for which we are all truly grateful. We will miss him greatly, but we can rejoice that Dr. Shigematsu was an important part of our lives. He gave us warm memories that will be with us forever, and he showed us the way to genuinely care and support all those around us in our daily lives. We thank him for all that he was and for his enduring friendship to us all.



Dr. Itsuzo Shigematsu: A Tribute

William Schull

Death is the inescapable companion of life. It comes to all of us, and most commonly at a time, a place and a manner not of our choosing. It leaves family and friends bereft, and our world askew. Each of us will feel the loss of another differently, and that is certainly true of Itsuzo Shigematsu. I shall miss him for a myriad reasons. At various times he was my "father," my "elder brother," my "confidante," and always "a patient source of counsel." His own joie de vivre spilled over onto all of us, relieving the tedium of daily living while simultaneously enriching our lives.

I last saw him in May 2010. I was passing through Tokyo on my way back to Houston from a visit to Hiroshima. He met me at the Central Station and we had lunch together. As I stepped off the train there he was -- a grin on his face, a black beret set jauntily on his head, and holding a cane or furred umbrella. Whichever it was I soon learned it was not a walking aid. He used it as a pointer. He led me at a rapid pace through the station to a restaurant, the name of which I do not recall, where we ate Tokyo style unagi and drank a tokkuri or two of sake. Once we had eaten, since there was still some free time, he insisted we should have coffee and a cognac which we did. My last image of him, as I went to board the Narita Express, was of a man overflowing with life.

But how should we measure the worth of this remarkable man? There is an anonymously written English poem that provides the answer. It reads (somewhat abridged):

Not - How did he die? But - How did he live?
Not - What did he gain? But - What did he give?

Not - What was his station? But - had he a heart?
And - How did he play his God-given part?

Was he ever ready with a word of good cheer?
To bring back a smile, to banish a tear?

Not - What was his church? Not - What was his creed?
But - Had he befriended those really in need?

Not - What did the sketch in the newspaper say?
But - How many were sorry when he passed away?

*These are the things that measure the worth
Of a man as a man, regardless of birth.*

Requiescat in pace

Memorial Words for Dr. Shigematsu

From Tuohong Zhang, Professor of Peking University, China

I felt deep grief for the passing of Dr. Shigematsu Itsuzo. I could not believe it was true when I heard it because he has been looking very strong and active each time when met him. However, he is gone – as everybody might know, he should go to somewhere need a smart brain of research and action, and pursue his great work in a very needy field.

As an epidemiologist in China, I read his papers and book many years ago when I was in university. He is famous in China with his textbook epidemiology in China: Epidemiology – a discipline for exploring cause of disease, by People's Health Publisher in 1984. This is the earliest introduced textbook from Japan on epidemiology.

I felt really exciting getting to know Dr. Shigematsu, when I came to Japan as a doctoral student, supervised by Prof. Yanagawa, in 1996. By then, I begin to know his excellent job and his influence in the field of Public Health, especially cardiovascular disease. He is active in the national and international public health affairs. He also made great contribution to the radiation effect research in the world.

He is a great man with many international awards and publications. However, he is also a very kind, very knowledgeable, very smart, and very friendly academic. He talked with me about my research, about the development of epidemiological studies in China, about his old Chinese friends, and my family. He gave me his books as presents. He presented many times when I and my Chinese colleagues visit Japan, and he always had nice conversation with the Chinese academic, no matter they are researchers, physicians or just common people. No body looks him as a great man but everybody benefited from his wisdom a lot.

His personality is really attractive. He speaks loudly, laughs happily, he loves and could take various drinks with unique taste, he love to talk different topics, with great interests, he is straightforward and brave, to criticize any wrong thing in the world. He is a real academic.

It is a big loss for his passing, all the Chinese epidemiologists will miss him, remember his great contribution in the international field of epidemiology. He will live in our heart, for ever.



1997. 2. 29 研究班会議の後のくつろぎ

大日本帝國海軍輕巡洋艦『球磨』に始まった海軍軍医大尉(ダイイ)重松逸造先生との思い出

財団法人 放射線影響研究所

高橋規郎

『重松先生に感謝する会』のこと

重松先生と言えば、酒席です。飲む機会は放影研での新年会を始め色々とそれまでもありました。しかし、私と先生との結びつきを決定的にしたのは『重松先生に感謝する会』で標題の輕巡洋艦『球磨』の話をした時です。会の一週間位前に児玉先生より『何か重松先生が喜ぶような企画が欲しい。ついては海軍の話はどうか』と注文が、そこで急遽『球磨』の話に決定。もともと阿川弘之、司馬遼太郎らの歴史物の愛読者だった私は『直ぐに載り』、本屋に直行『海軍軍艦写真集：球磨型』を購入、臨床研究部・臨床検査科(当時)の松浦信介君が大きな『球磨』の絵を書きました。そこらに在った普通の合板に書いたのは今から考えると少々強引、結構重くてそれを持って壇上に上がって頂いた2名の職員の方からは、『肩が抜けそうだった!』と後程クレームが来ました。当日は石井健一郎臨床部次長(当時)の指揮する女性コーラスの美しい歌声に参加者一同酔いしれた。(資料1)そのあと(無粋にも)、私が海軍士官一種軍衣(『坂の上の雲』で東郷さんなどの海軍将校が着ている軍服)に似た某私立高校の制服を着て、壇上で球磨の説明、先生が昭和18年9月15日に呉軍港を出航されてから下艦されるまでを滔々と述べたつもりです。(本当は緊張を和らげるため相当飲んでいたので、不覚にも酔いが回っていて殆んど記憶していない)後で聞いたところによると相当長かったらしい。(資料2)その後、壇上で海軍軍歌『月月火水木金金』を大合唱しました。(資料3)後日その記念に揮毫して頂きました。(資料4)その後に、重松先生がお礼を述べられたが、先生も往時を思い出して、『球磨自慢』を長時間述べられたので、時間を相当オーバーして、後程幹事さんから大目玉を喰った次第です。

『広島重松会』のこと

児玉先生の発案で、重松先生から疫学の領域でご指導を受けられた方々を中心として『広島重松会』が発足しました。私は疫学とは全く関係ない分野でしたが、『感謝する会』での余興を『殊勲甲』と認めて頂いたせいか、参加を許されることになりました。日程について意見を求められたときに、よせば良いのに『それは絶対に9月15日が良い。先生が『球磨』に乗って呉軍港を出航した日だから。それとこの日は敬老の日で祝日なので毎年休みです。』と提案、その日に決定しました。後で、9月初旬は忙しい方が多い時期と言うこと、また敬老の日が9月の第三週となったことで、開催日に関しては自由度を持つことになりました。『広島重松会の帝國海軍掛』に勝手に就任、先生への記念品の選定および作成に携わってきました。その過程で、色々なことに遭遇しましたがその中から一つだけ。『重松先生に海軍士官二種軍衣(所謂夏用白服)を贈ろう』と言うことになり、私が代表してJR御徒町駅に在る店まで行って購入しました。それをバックに入れて羽田空港の手荷物検査を通ろうとしたところ、係員に『そのバック、開けて見せて下さい。』と言われました。出てきたのは『海軍の白服』ですので、周りのひとに奇異な眼で見られたと思ったのは必ずしも私の被害妄想だけではなく

たのでは。帰ってからじっくり見て気がついたのですが、軍衣には肩章を始め多くの場所で金属が使っていました。

学問の話の一つ：第9回総会のこと、実行委員会で「いつも飲んでばかりでなく、時には学問も」と言う趣旨で、先生にご講演をお願いしました。その時に先生は帝大醫學部學生のころ「白系ロシア人には結核感染者は多いが発病者は少ない」と言うわけで、満洲まで調べに行かれたお話をされました。その一ヶ月後に参加した細哈連(ニューオーリンズ)で開催された「米国人類遺伝学会」で「ヨーロッパの白人種では、突然変異により結核菌の受容体が機能していないヒトがいて彼らは感染しても発病しない」と言うことをゲノムレベルで決めたとの報告がありました。この発表の真偽は兎も角、先生は『感染しても発病しない』集団が在ることに戦前から気付かれていたのだと感心した次第です。

『艦長が悪いと艦は沈む』

重松先生からこのことを最初にお聞きしたのは冒頭の『重松先生に感謝する会』の2次会に行く途中です。先生はこのことに関してそれ以上言われていないので、これからは先生の日頃の口振りからの私の想像です(本当は直接お聞きしてみたいところでしたが)。多分、先生の評価で良い艦長は『横山一郎大佐』(先生が『球磨』に乗艦後二人目の艦長)であり、悪い艦長は『球磨』を沈めた『杉野修一大佐』(同三人目)であったと思います。『横山艦長』は寢食を艦橋にて済まし、一步も離れなかった人で、正に『指揮官先頭』を体現した人でした。横山艦長の時の『球磨』は殆んど被害を受けていません。先生は横山艦長のことは“立派な方だった”とお話なさっていました。これに対し、『杉野艦長』は、英国潜水艦『ターリー・ホー』の潜望鏡を竹が立って流れていると誤認、その雷撃により『球磨』は撃沈されてしまいました。

『球磨』に関しての一寸良い話。先生は呉の海軍墓地で『戦艦大和』の碑が最前列(一番良い場所：先生談)にあり、『球磨』は相当山の上にあり、時々『海軍は階級社会だから仕方がないのかな』と残念がっていらっやいました。同行した折り、『順序は碑が建った年代順だ』と非常に満足されたように言われ、その時の嬉しそうな笑顔を鮮明に憶えています。(相当な負けず嫌いである！)

まだ色々取って置きの話はありますが、先生が酒席でよく言われていたように『これ以上の話は別料金！』と言う事にします。

『御見舞い』

重松先生の病床に御見舞いに伺いました。話題は『先生が卒業された天王寺中学(別名；テンチュウ)』、『四天王寺の五重塔が室戸台風で倒壊した話』と先生が『球磨』に乗艦後の『歴代艦長(初代・渋谷清見大佐、横山、杉野)』の話をさせて頂きました。帰ろうとしたところ先生に『高橋君、高橋君』と呼ばれましたので枕元に行くと『杉野修一大佐は日露戦争における旅順閉塞戦の杉野兵曹長の息子だ』と言われました。締めくくりも『大日本帝國海軍輕巡洋艦・球磨』であったようです。

『あとがき』

勿論、この文を書くときのバックグラウンドミュージックは、その作曲者である瀬戸口藤吉翁・生誕130年記念で作られたCD版『軍艦マーチのすべて』です。広島重松会で移動する際に、このCDを『右翼街宣車』のように車中でかけて『いざ征かん！』と気合を入れていたことも懐かしい思い出です。(尤も各自相当に飲んではいましたが)



資料1



資料2



資料3



資料4

今年の2月の夜NHKニュースを見ていると重松先生の訃報が伝えられました。6日に
お亡くなりになっていましたことはすでに知っていましたので驚きませんでした。どの
ように伝えるだろうかと思って見ていました。日本の疫学の第一人者であり、放射線疫学
の分野でも国際的に大きな貢献をされたという説明でした。そのときのニュース画面には、
記者会見（と思われる場所）で難しい顔をして話している重松先生の映像が流れており、
イメージと随分違うなと思っていました。ところが、話が終わった直後に重松先生が二カ
ッと笑われました。あのいつもの重松先生のすばらしい笑顔でした。NHK もなかなかや
るもんです。

ひとの人生は常に選択の連続で、それにより結果は大きく異なっていきます。その選択
の岐路に立つとき、判断のもととなるのは最終的には自分の考えであることは言うまでも
ありませんが、尊敬する人の生き方や考え方が直接的・間接的に大きく影響することはよ
くあります。そのような人のことを人生における師、または最近ではメンター（mentor）
というのでしょうか。私にとって重松逸造先生はまさにそのような存在でした。重松先生
の弟子である疫学や公衆衛生学分野の多くの綺羅星のごとき先生方の中で、誠におこがま
しいとは思っていますが弟子のひとりと自負しています。そして私の人生は重松先生との
出会いのおかげで、より豊かで意義深い方向に変わってきたと思っています。

私は今年で卒業後40年となります。初めの10年は循環器医として臨床的な技量を磨く
のに必死でした。日々の患者さんを診ることは大きな喜びでしたが、（事情によって）大学
の研究室を少し早く出てきてしまっていたため、研究を十分してこなかったという気持ち
も芽生えていました。その頃、児玉先生から放射線影響研究所に來ないかという誘いもあ
り移ることにしました。そこで初めて60歳代の重松先生にお会いしました。ご高名は聞
いていましたが、なんと大きい声で話される豪快な方だろうかというのが第一印象でした
（それまで知っていた研究者の方々は皆さん静かでした）。

当時、重松先生は多くの研究班を束ねておられました。その事務局を担当していた児玉
先生が広島大学に移ったため、その役割がいやおうなく私に降りかかってきました。丁度
WHOのMONICA研究が始まった頃で、日本で従来から行われてきた主要なコホート研
究が集まってMONICA基準による急性心筋梗塞、脳血管障害の登録を行う研究班が編成
され重松先生がその総括班長とされました。それまで疫学の「エ」の字も知らない私に
「循環器のことはわかるだろう」といわれて事務局をするよう命じられました。まさに晴
天の霹靂でしたが私も「何とかなるだろう」という安易な気持ちでお受けしました。それ
からは、まさに眼も回るような忙しさでした。毎日のように理事長室からお呼び出しの電
話がかかり多くの書類をどさっと渡されます。そのほとんどはジュネーブのWHO本部か
らきた英文の書類で、主要な部分を翻訳して研究班に送るという大変な作業でした。しか
し、このように重要な仕事の一部を担っているという嬉しさも大いにありました。これら
の仕事の中で柳川先生や橋本先生ともお会いできたことや、循環器病学の大家の先生方と

親しくお話できたのは素晴らしいことでした。また、これらの仕事をこなしていくうちに疫学的研究の基本を学ぶことができたのではないかと思います。これこそが重松先生が私に期待されていたことなのかなと今は思っています。

重松先生とご一緒に過ごした時間は本当に夢のような時で、多くのことを身をもってお教えくださいました。瞬時に全体を把握する力、統率力、包容力、指導力などリーダーとしての資質をすべて兼ね備えておられるところは衆目の一致するところだと思います。これらについては他の先生方が詳しく書かれると思いますが、私が経験した重松先生の胆力、集中力について少し書きたいと思います。「循環器調査法」という本を公衆衛生協会から発行することになり、児玉先生と私もお手伝いしました。何ゆえかは覚えていませんがその本の索引作りを重松先生と私の二人で行うことになりました。新宿の公衆衛生協会のビルの一室で朝から仕事にかかりました。ご存知のように極めて根気の要る作業で眼は疲れるわ肩は凝るわで、私は昼過ぎにはすでにギブアップ状態でした。ところが（当時 70 歳をこえられていた）重松先生はけろっとされているので私も止めるともいえず、とうとう夕方には完成しました。さすがに学生時代に陸上競技（砲丸投げ）で鍛えられていただけのことはあると舌を巻いたのを今も覚えています。また、奥様から金沢時代は元日以外は研究室に入りびたりに研究されていたと伺っていたのは本当なのだと実感しました。

重松先生は大変な愛妻家で「芳枝、よしえ」といつも柔らかく呼んでおられたのが耳に残っています。重松先生ご夫妻は私たち夫婦の憧れの存在でそのライフスタイルは理想でした。お二人がいくつ離れておられるかは常にミステリアスな部分でしたが、ある日あつかましくも馴れ初めをお聞きしましたところ、一回り近く離れておられることが分かりました。さらに驚いたことに、ご夫妻の結婚記念日は私の誕生日と同じでした。残念ながら結婚された年は私の生まれた年と一年違いでしたが、深いご縁を感じました。

昨年重松先生が体調を崩されて入院されていることは聞いていましたがお見舞いのご遠慮していました。今年 1 月のある日時間ができたので思い立って病院にうかがいました。緊張してお部屋をノックすると丁度奥様がおられました。重松先生は酸素マスクをつけておられましたが、私が「もうすぐ春ですよ。春にはお元気になって一緒にのみましよう」というと先生はかすかに微笑んでうなずいてくださいました。飛行機の時間が迫ってきたため失礼しましたが、奥様は寒い中を病院の玄関に立って私が駅に向かうのをずっと見送ってくださいました。

このような温かいお人柄の重松先生ご夫妻に親しくご指導いただけたことは私の生涯の幸福でした。これからも先生の弟子であるということを誇りとして、先生の名を汚さぬよう日々努力していきたいと思います。本当にありがとうございました。

最後の広島重松会

放射線影響研究所 臨床研究部
藤原 佐枝子

2010年10月2日~3日に、松山道後温泉で開いた広島重松会が最後の会となりました。広島重松会は、重松先生が放影研を退職された翌年1998年から、児玉和紀先生の音頭取りで、放影研での弟子やそれまでの弟子・孫弟子の先生方を中心に、毎年1回、各地で開かれていました。1次会の総会では、各人が近況報告し、2次会では、重松先生を車座に囲んで、延々と酒を酌み交わすのが恒例となっていました。重松先生のお話を聞くのが楽しみで、先生から元気を頂く会でした。第1回は、重松先生が若き頃、呉港から戦地に赴かれた日にちなんで、9月15日に宮島で開かれました。それから会を重ね、第13回広島重松会は、私が世話人をさせていただきました。そして、それが最後の広島重松会になりました。開催地を選ぶにあたり、重松先生のお身体のご負担にならないようにと思い、ご意向を伺う電話をしたところ、「皆さん忙しいのに、遠くから集まってくださるのだから、皆が楽しめる場所にしてください」と参加される方たちを気遣われる言葉をいただき、「ああ、やっぱり重松先生だ」という思いを新たにしました。重松会前日は、放影研の酒飲み仲間と呉港を見下ろせるレストランで前夜祭を開きました。レストランに着いた時は、ちょうど夕暮れ時で、茜色に染まった空に瀬戸内海の島々と呉港に係留された大型船のシルエットが浮かび上がり、普段は饒舌な重松先生が無言でじっとその景色を眺められていた姿を鮮明に思い出します。松山では、90歳過ぎても、歩くのも早く、よく飲まれ、よく喋られ、松山駅で重松先生と奥さまをお見送りしたときには、これが最後の会になるとは誰も思っていませんでした。

私が放影研に勤務して間もない頃に、重松先生は理事長として就任されました。理事長は、まだ20代の私にとって、恐れ多い存在でしたが、いつしか、「放影研の女性三酒豪の1人」との評価？をいただき、楽しく飲み会を重ねるうちに（もちろん仕事もしていましたが）、重松先生の信奉者の1人になりました。放影研で遅刻して廊下でばったり会ったとき、ハワイのホテルで偶然会ったとき、いろいろな場面で、にやっと笑いながらからかわれました。大きな声で、叱られたこともありました。でも、それを嬉しく感じていました。ハワイへの短期留学やいろいろな先生をご紹介くださり、面倒見がよく、こまやかな心遣いをされる先生でした。重松先生から、これからは加齢の疫学の時代だと言われてはじめて骨粗鬆症の疫学研究は、私のライフワークになっています。また、それぞれの人をみて、育てる先生でした。私は、重松先生で出会ったことで、何事も前向きにと心がけるようになりました。

この3月で、私は30年以上勤めた放影研を退職し、広島原対協 健康管理増進センターに移りますが、若いころに、重松先生に出会えたことは、本当に幸運でした。

重松先生、長い間、本当にありがとうございました。



第13回広島重松会 2010年10月2日 松山市道後温泉 ホテルルナパークにて

重松先生の掌で（門前の小僧の疫学）

放射線影響研究所臨床研究部

山田美智子

重松先生、お世話になりました。重松先生の笑顔は私が研修医生活を終えて放射線影響研究所に勤務した時から最後の重松会でお会いした時まで、いつも穏やかで、その笑顔と同時にいろいろな出来事が思い出されます。

私にとって「疫学」は重松先生に教えていただいた学問の分野です。教師と生徒の関係ではなく、研究や仕事で直接の指導を受けてもいないのですが、放影研で先生のお仕事を拝見し、研究会等に参加する機会を与えていただいた中で、門前の小僧のように少しずつ、疫学を理解できるようになりました。修行僧のように真摯に学問に取り組んだことはない私ですが、重松先生は修行僧だけでなく小僧も認めてくださっていたように思います。そして小僧も正しい方向に進めるよう、時々、上司を介して多くの示唆に富んだ忠告をいただきました。その一つは放影研の過去の論文の形式だけをまねた研究結果について「臨床をやっている医師は医師でない者がやった疫学と同じものをやっていてはだめだ。」という忠告です。知識や経験が少なくとも、今までに得たものを結集して研究に取り組もうと考えるようになった、大切な一言です。

重松先生の偉大さは学問や仕事の分野を超えて、懐の深さにあることを 20 歳代で始めて先生にお会いした時に直感的に感じ、徐々に確信していきました。子供を育てながら仕事を続けられたのは重松先生が背後で優しくサポートしてくださった御蔭と心から感謝しております。また重松先生を慕って集まった多くの先生方と知り合えたことも大きな力となりました。重松先生への追悼文を書いております今になって、「若い時に重松先生にお会いできた事がどんなに幸運であったか」と強く感じております。重松先生の温かさは年齢を重ねるほどに益々感じ取ることができるようになりましたが、若い時からその庇護のもとにあったことは本当に幸せなことだったと改めて思っております。

重松先生、ありがとうございました。

重松逸造先生のお別れ会によせて

久住 静代

重松逸造先生のご霊前に、心からの哀悼の辞を捧げます。また、御奥様はじめご家族の皆様には衷心よりお悔やみを申し上げます。

と申しましても、先生とこんなに早くお別れする日が来ようとは夢にも思いませんで、春には先生がお元気に退院されることをひたすら念じておりました。

この度、「重松逸造先生とのお別れ会」実行委員会から思い出の写真をとのご要請がございましたので、少しでも先生に喜んで戴けた時の写真をと、3枚の写真を提供させて戴きます。

1枚目の写真は、2004年に土肥博雄先生が広島赤十字・原爆病院の院長に、藤原佐枝子先生が（財）放射線影響研究所・臨床研究部部長に就任され、私が原子力安全委員会委員に就任予定という時に、私共3人と、当時、原子力委員長を勤めておられた藤家洋一先生と奥様、細田裕先生ご夫妻を交えて、お祝い会を開いて下さった時のものです。



この時、先生から「時々活動状況を聞かせるように。」との厳命(?)がございましたので、その後毎年、国際原子力機関(IAEA)/安全・セキュリティ局担当の事務次長をされていた谷口富裕氏の夏季休暇に合わせて、関係者の集まりを開きました。2枚目と3枚目の写真は、2009年7月27日に港区の芝で「夏の会」を開いた時の写真です。重松先生ご夫妻のお元気なお姿や長瀧先生ご夫妻、そして、この度発起人代表を務めて下さっている大久保先生のお顔も見えます。重松先生の乾杯の音頭と励ましのお言葉に、いつも“活力”を戴いておりました。でも、これからは私達が御奥様をお励ましする番ではないかと思っております。引き続きよろしくお願い申し上げますと共に、先生にお別れするのではなく、今後も先生を思い出しながら、お互いに励ましあう会を開いてはいかがでしょうか? ご提案申し上げます。



行く道を導いて頂いた重松先生

放射線影響協会 笠置文善

「有り難うございます」を直接お伝えしたかった。私の携帯にはまだ4月3日10時55分の記録が残っている。私が東京に職を得る機会を作って頂いた重松先生にお礼の電話をお掛けした時刻です。「近々入院して手当を受けるのでその後体調万全でお祝いできると思います」と電話越しに言葉を頂いたが、お会いして直接にお話をしなかったことが、今も私に後悔の念が迫ってきます。

重松先生には事ある毎にお世話になりっぱなしでした。もう20数年前のことになりますが、私が大阪から広島放射線影響研究所への異動が許されたのも重松先生の言葉添えがあればこそでした。えっ、どういう言葉かって、それは「放影研はより価値のある職場です」。

平成22年の秋でしたか、今の職場からお話があり放影研から東京に出てくるかどうか迷っているときもそうでした。その時は既に放影研理事長を辞されておられましたが、ご自宅から車で少し行った鮎屋に誘って頂き新鮮なにぎりとちょっとお酒を飲みながら、「きみ、何を考えているの。言葉をかけられる内が花だよ。」これで私のその後の人生が決まりました。

あれは、確か1992年から1993年のことだったと思います。重松先生のご指導の下、外務省と旧ソ連との合意書に基づくチェルノブイリ事故支援の一環としてロシア派遣の一員として加えて頂いた時のこと。外務省ということで公用旅券での派遣でしたが、ソ連邦崩壊後のまだまだ政情不安定の中、最高会議ビル、いわゆるホワイトハウスが戦車部隊の砲弾痕に染まりブラックハウスに変じていた頃のことです。「えっつ、あんな不安な所に行くの」っと、今一歩足が出なかったとき、重松先生は「なに悩んでいるの。公用旅券で行くのだからきみ、何かあったときは安心せい。国葬になるから」と。参りました、そのことで憂いなくモスクワに行ったことは言うまでもありません。

重松先生からよく言われました言葉もありました。「きみはね。一言多い時があるな」と。今も肝に銘じて自分自身注意している言葉ですが、でも今日は直接一言いわせてお返しさせて下さい。「先生こそ、大きな暖かい気持ちで人を優しく指導する、影響の大きい先生。そんな先生こそ私にとって国葬ですよ」。

重松先生には、本気か、しゃれっ気か、のせる気か、その気はわからねど、私にとっては行く道に惑うとき大きな力となって導いて頂きました。このご恩は決して忘れません。

理事長室入口の高いハードル

公益財団法人放射線影響研究所 事務局次長 小笠原 優

初めて重松先生にお目にかかったのは20年前の3月1日のことでした。放影研（放射線影響研究所）に中途採用で入ったわたしが、上司に連れられて理事長室へあいさつに出向いたときのことです。「今日から編集員として仕事をさせていただきます小笠原です。」すると、わたしの目をじっと見据えたまま「頑張って呉れ給え。」という重松先生の、腹の底から押し出される渋い大きな声が返って来ました。脳裏に焼き付けられたその声に後日、恐れ慄（おのの）くことになろうとは夢にも思っておりませんでした。

どういった内容だったかは覚えておりません。理事長室から編集室へ1枚の文書が届きました。確か原稿チェックの依頼だったと記憶しております。わたしは放影研へ来るまで編集畑で仕事をしておりましたので、赤ペン片手に仕事を開始しました。この言い回しはこうしたほうが分かりやすいか、といった按配でたくさんの赤を入れたのでした。

しばらくして理事長室からお呼びが掛かりました。神妙な顔で赴きました。「失礼します。」と部屋へ足を踏み入れた途端、「君い、これはどういうことなんだ！」あの大きな渋い声が頭の上から押し掛けて来たのです。「どうといわれましても...。」わたしは二の句が継げません。理事長室中央の会議テーブルの上に、赤ペンだらけの紙が置かれておりました。わたしがやった校正の跡です。

以来、理事長室前の廊下を通るたびにそのときのことが思い出され、勇気を奮って歩いたものでした。月はじめに役員の月間予定表が配布されます。今日は理事長が出張と分かっている日は大手を振って歩ける廊下も、渋い声が響き渡る日はおずおずと小さくなったことを思い出します。

放影研に入って4年経ったある日、事務局長室へ呼ばれたわたしは驚きました。「お前さん、理事長秘書をやってくれんか。」わたしは新聞紙上の3cm四方の小さな求人広告を見て放影研の戸を叩いた人間です。家内とふたりの幼子を抱えての転職でした。38歳というハンディキャップを背負っておりましたから、放影研に拾ってもらったという気持ちで毎日仕事と取り組んでいたのです。理事長秘書といえば中枢の業務ではありませんか。日米交換公文を交わして設立された世界でも名立たる研究所の、その中枢で仕事ができる！「ありがとうございます。男として嬉しく思います。」即答したわたしでしたが、それが後になって過酷な試練をもたらすことに、そのときは気付いておりませんでした。上に書いた、理事長の原稿校正といい、降って湧いた理事長秘書の話といい、どうも理事長室の入口には高いハードルがあるようでした。

過度な緊張の連続が予想以上にわたしのストレスとなったようで、急に痩せたわたしは、ベルトの穴を四つばかり新たに空ける始末でした。原因不明の高熱が1週間続いて、口内炎に苦しみました。でもこれは今でも自慢なのですが、わたしは1日も休みませんでした。毎朝病院で点滴を受け、その足で出勤したのは、われながらよく頑張ったと思います。重松理事長が、病人が辛い思いをして出勤することはない。代わりに役員会議事録を取れる体制を作らなければいけない。そのように言ってくださったことをよく覚えております。

理事長室で仕事をするようになってからも、重松先生と文章のことで遣り取りすること

が多くありました。ときにはわたしが文案を作り、これでいかがでしょうか、と持って行くこともありました。何度か理事長の手が入り、それをわたしがパソコンで直したものを「完璧だ。よく書けている！」と褒めてくださるのです。内実は重松先生が書いた文章と変わらないほどに修正されたのに、秘書の手柄であるかのように「小笠原君、文章が巧くなったな。」と肩を叩かれては、わたしは騙されたような気がしつつも、心の底から喜ぶしかありませんでした。

重松先生はひとを思い遣る極めて優しい御仁だと、わたしは常々感じておりました。放影研の60歳近い研究員をチンピラ呼ばわりする豪傑でしたから、40歳そこそこのわたしは虫けらのような存在だったはずです。放影研職員は皆、そうした人柄をよく知っておりましたので、先生のためならエ〜ンヤコ〜ラの意気込みで仕事と取り組んだのでした。もちろん地元の方々も先生の人柄をよくご存知でしたし、海外にも大勢の友人がおられました。4期16年にわたって放影研理事長を務められましたが、その最後の最後まで任期の延長を請われたことが、そうした重松先生のひととなりをよく物語っていると思います。

先生が広島へ来られて17年目の夏に、引越しの荷造りのお手伝いをさせていただきました。「小笠原さん、お休みなさいな。」と言って奥様がおやつを出してくださいました。皿の上に、海苔で巻かれた焼いた餅が乗っておりました。熱いお茶を啜りながらわたしは頬張って美味しくいただきました。まるで親子のようだな、と心の中で呟きました。「小笠原君、男は身だしなみが大切だ。これをポケットに入れておきなさい。」といって重松先生が小さな櫛をくださいました。「家内を連れていろんなところへ行ったよ。」といって分厚い中四国道路マップをくださいました。

広島市内の上八丁堀というところに「カーサ和光」というマンションがあります。そこで引越しのお手伝いをしたわけですが、わたしは毎朝、出勤途上に「カーサ和光」の前を通るたびに当時を思い起こします。「君い、これはどういうことなんだ！」理事長室で20年前に聞いたあの声は、もう聞けないのでしょうか。

重松先生のご冥福をお祈りいたします。

合 掌

重松先生がその 16 年間で過ごされた放射線影響研究所を去ると決意されてから、先生は講堂の手前にある狭い書庫の中で黒い革張りの椅子に腰掛け、業績をはじめ、玉石混淆のありとあらゆる蓄積の山を整理されていた。その傍らで重松先生に長年仕えていた井上次長が、ただ黙々と先生が選り分けた書類を片付けておられた。1989 年から 9 年間で重松理事長の秘書として務めた私は、感慨を持ってその光景を前にしていた。

「これも捨てる。これも…。これも捨てる。全部捨てる！」

どさっという紙の束が落ちる音とともに、重松先生のつぶやきが鋭い響きに変った。私は思わず声を上げて落とされたその文書を拾い上げた。

「先生、これは。」

国際学会で講演をされたときの報告書だった。背中を丸めたまま、私の顔を振り仰いだ重松先生は、いつものあの調子に戻られ、云った。

「なに？」

私は秘書という職にはあったけれども、当時、重松先生の前ではほんの小娘にすぎなかった。その小娘が一人前の口を利くのを重松先生は広い心で受け止めてくださり、要所要所で小娘の仕事を認めてくださっていた。ただ、大抵の場合「ちょっと、石邊さん此処に来て。ちゃんと見て。」と言って私を呼んでは側に立たせ、誰かに送る手紙や寄稿を執筆されるのを見てなさい、とおっしゃるのだ。私は特徴ある筆跡に目を走らせながら、一生懸命先回りして次は何をすればよいのか考えるのが常だった。とりあえずはこれをタイプして、送る準備をして、それから…。重松先生は、そんな私の頭の中を読んでおられたかどうかは別にしても、私にとってはその当時のひとつひとつの作業が、現在の私を支える礎となったことにはかわりはない。

重松先生が東京に帰られたあとも、私たちには「広島重松会」でまたお元気な先生、奥様とお会いできるという格好のチャンスが与えられたし、原稿清書のお仕事などでも関わることができた。また、重松先生の口癖で「うち(放影研)の連中は仕事以外はみなプロですよ」との仰せの通り、私も楽しい企画をするときは疲れが吹き飛んだ。そのひとつが、少人数で山陰方面に行った「温泉津温泉の旅」で、思い出はいつまでも鮮やかで懐かしい。黒いサングラスをかけた重松先生を初めて見たのもそのときだった。それから、私たちは幾度も口実を設けては重松先生のご薫陶を聞くと言いつつ酒宴を催し、先生を囲んでの輪を広げ、そして英気を養ってはまたそれを次の仕事の糧とした。けれども、いつからだろうか。気がつくと重松先生は遠くを見るような目をして、ひとり会話の外におられるのだった。奥様からお耳が少し遠くなられたと伺った。

2011 年 8 月 16 日、東京の病院で重松先生と再会することができた。先生は何度もありがとう、と私たちを労ってください、そのお背中をさすりながら、私の脳裏には「全部捨てる！」というあのお声が蘇っていた。重松先生がああとき書類とともに捨てようとしたのはこの肩にかかっていた重責だったのだろうか。あるいは先生が築かれた居場所を失ってしまうことへの断ち難い思いだったのかもしれない。重松先生が放影研と共に生きられた 16 年間の重みはだれも量ることはできないが、先生はいまこそすべての重荷を下ろして、安堵なさっておられることと思う。そして、私は先生の秘書であったことに感謝しつつ、重松先生が捨てたものはちゃんと拾われ皆々に引き継がれており、決して失ったわけではないことをこの文集を通して先生にお伝えしたい、と思うのである。

『ありがとう』の言葉

池田枝維子（放射線影響研究所）

1983年4月、私が放影研に入所したとき、重松先生は就任2年目の後半を迎えておられました。新卒で放影研の業務内容を熟知せず職務についた私にとりまして、理事長である重松先生は放影研を象徴するお顔そのものでいらっしゃいました。所属部署である研究渉外部臨床連絡課（今の臨床研究部臨床渉外課）は裏門に近い職員食堂の2階にあり、役員室のある棟とは離れておりましたので、よく通る先生のお声も、そこまでは届かず、お姿を拝見する機会も限られておりました。

重松先生をお見かけする機会が増えたのは、臨床研究部で児玉和紀先生の秘書を務めるようになった1992年以降のことです。特に、広島重松会のお手伝いをさせていただくようになってから、お話をさせていただく機会も増えたように思います。

第1回広島重松会（1998年）が開催されたのは宮島の「岩惣」でした。台風接近を心配しながらも、クイズや余興などで盛り上がったことを思い出します。第2回（1999年）は、音戸の瀬戸～御手洗港～来島海峡大橋を巡る瀬戸内海クルーズを楽しみました。船内で行われた「じゃんけん大会」では、重松先生がみごと優勝！「暑い時のジャンケン」は、まずチョキから出してみる。なぜなら、一般に暑い時は開放的になって、ついパーを出してしまうことが多いからだ」と勝者挨拶で述べられた先生の教えを守っているのは私だけでしょうか・・・？

第6回（2003年）は、重松先生にゆかりのある呉に集結。このとき、背中に5省、胸に重松先生の似顔絵のワンポイントをつけたTシャツを作成しました。疫学会の色である青いTシャツは、ブルーウェイブ集団と呼ばれるも広島重松会のシンボルとなり、その後の会でもメンバーの皆様にご愛用いただいております。そして、もっとも記憶に新しいが、第13回（2010年）で、会の原点である「大日本帝国海軍」に立ち戻る（？）企画として、愛媛県松山市を訪ねました。「坂の上の雲（司馬遼太郎 著）」の主人公である秋山兄弟や正岡子規の偉業とその生涯に触れるバスの旅は印象深いものでした。総会の場が何より盛り上がったことは言うまでもありません。



広島重松会にまつわる思い出はたくさんありますが、会の原点、その源流にあるものは何かと考えたとき、恐縮しながらも、とても居心地よくご夫妻やメンバーの皆様とご一緒できたのは、「ありがとう」の言葉がそこに溢れていたからであつたと思います。喜んでいただければと素直に思い行ったことを自然に受け止め、嬉しい気持ちをそのまま表現してくださるご夫妻がいらっしゃった。その言葉によるつながりが広島重松会の原点であるように思います。自然に内面から芽生える感謝の心、「ありがとう」の言葉が、人を感動させ、人を動かすのだということを実体験で学ばせていただきました。

2010年10月3日、松山駅でご夫妻をお送りしたときの重松先生と奥様の優しい笑顔と「ありがとう」の言葉は、これからもずっと心に残っていくことでしょう。

重松先生、そして奥様、ありがとうございます。引き続きご指導くださいませ。

天網粗にして漏らさず

財団法人放射線影響研究所・広島疫学部長
小笹晃太郎

重松先生に親しくお目にかかるようになったのは放影研に来てからですが、驚いたのが、90歳を過ぎてから初めてお目にかかったにもかかわらず、次にお目にかかった時などに私に関するいろいろなことをとてもよく覚えておられたことです。多くの方の近況などをよくご承知なのは、以前からのお知り合いだからだろうと思っていましたので、これには感動しました。その後もお目にかかるたびにお元気で、もとより100歳までお達者だろうと誰もが思っておられたでしょうに、このような文章を書かなければならないのは残念の極みです。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

重松先生のお名前を初めて記憶したのは「疫学 臨床家のための方法論」の背表紙で、大学を卒業した頃のわかりやすい疫学の教科書としてよく読みました。ただ、国立公衆衛生院のコースは履修しませんでしたので、直接ご指導を受ける機会は逃しました。

私が広島放影研に初めて来たのは、児玉和紀先生が主催された1998年の第3回英国疫学公衆衛生コースでの見学プランでした。旧厚生年金会館での会場からバスに乗って、ちょっと林の中に入って山を登ったかと思うと、時代を超えたようなところに出ましたので驚きました。そのときには、広島港から宮島までディナークルーズが催されたのですが、重松先生が楽しんでいたのを記憶しています。私は英国疫学公衆衛生コースの初回からの参加者ではなく、1997年にロンドンのBurney教授（Holland教授の後任）のもとに5ヶ月間留学させていただいていたので、第3回から押しかけ参加したのです。その当時私はスギ花粉症の疫学調査を行っており、1996年の名古屋での国際疫学会で発表していた私のポスターを、喘息等の疫学を専門とされるBurney先生が見に来てくださいました。ちょうどそのとき、旧知の森岡聖次先生がBurney先生のもとに留学されており、私は厚かましくもお願いしてその後釜に入り込んだのです。森岡先生とは、近畿地方での保健所勤務の若手医師の会でご一緒していたので、ロンドンに留学されたときにご挨拶状をいただいていた。名古屋の疫学会から帰ったあとすぐに引っ張り出したのですが、それには重松先生のご推薦で留学することになりましたと書かれていました。

長年、私は地元の京都府の公衆衛生活動や、がんの疫学研究などに従事してきましたので、重松先生に直接にお目にかかる機会は全くありませんでしたが、私が放影研に出会った元をたどるとそこには重松先生がおられました。それを思い出したときに、頭をよぎった言葉が、天網恢々粗にして漏らさずでした。ちょっと意味は違うでしょうが。

重松先生を偲んで--- 低線量放射線健康影響に関連して

水野 正一

国立がん研究センター東病院 臨床開発センター 機能再生室 研究員（非常勤）

重松先生に接した最初は、理学部大学院時代 カナダ、オタワのカールトン大学に確率過程・統計解析学を学ぶ機会を得（指導教官 DA Dawson 先生、飛田武幸先生, 1978）帰国就職後の予防医学時代、青木國雄先生について東京にてのスモンの班会議に出席したときでした。遠くからではありましたが、当時までにスモンキノホルム因果関係論が、班長重松逸造先生のもと、「歴史的及び経時的」「比較研究」「量と反応の関係」「国際的データ」の面から圧倒的な記述のもと、熱く語られていたことを思い出します。

その後、両先生のお取りはからいで、重松先生理事長の放射線影響研究所（広島）統計部にて、DS86 線量反応解析評価に参加しました(1986-89)。放影研時代、平山雄先生を紹介していただき、6 府県コホートデータに接し、日本人の男性喫煙者における肺がんの Dose-Response において R. Doll 先生の英国医師コホート結果と比較解析を行う機会に恵まれました。平山雄先生と重松先生との一連の経過はとても懐かしく思い出します。

1989 年国立がんセンター渡邊昌先生を頼って東京地区に移り、以降、がんの疫学研究、高齢者と健康、国民一般における健康と栄養と視点を広げ、時間を過ごした、一方、重松先生は、東京地区に放射線作業従事者のコホートを立ち上げられ、放射線影響協会初代センター長に細田裕先生が就任されたこともあって、低線量放射線の健康影響に関連しては現在まで長く関心を持ち続けることとなりました。

重松先生が東京にもどられた後の印象に PC : Probability of Causation をテーマに語られたことがありました。私なりの解釈ですが、『集団レベルは統計確率法則が頼りとなって因果関係論(attributable risk percent 等)を推し進めることは比較的分かりやすいが、個人レベルでは、喩えて、「がけの上に立っているひとの背中を押した」ということがあれば、放射線がそのことをしているのであれば、原因としては責任を問われる』というような内容で集団レベルと個人レベルの摺り合わせに関しては今もこのことはとても重要なこととして強く印象に残っています。

また、15 カ国解析結果 (Cardis et al: 2005, BMJ) が発表されると、カナダのデータはもっと詳しく検討する必要がある等、コメントを出され(BMJ:2005)、実際、後にカナダのグループはその heterogeneity は限られた期間のデータの中にのみ存在していることを公表し、一連の国際的やりとりも印象深いものとして残っています。

最近では、疫学会（札幌:2011.1）の後、皆様が集まれたとき、お元気なご様子に接し、その面影は大切なものとして残ることとなりました。2011.3.11 福島以降、放射線の健康影響が身近な話題になりました。先生の折に触れて発せられた言葉の重みをかみしめながらこの先をと思いつつ、ご冥福をこころからお祈りいたします。

Royal Academy of Physician の受賞

広島赤十字・原爆病院

院長 土肥博雄

(現: 中国四国ブロック血液センター 所長)

重松逸造先生がイギリスから Royal Academy of Physician を受けられたのは 1992 年 6 月の事でした。丁度その直前キエフでチェルノブイリ原発事故後のシンポジウムが日本財団の主催で行われたので、キエフ、パリ、ジュネーブと回ってロンドンに行かれたのでした。久住静代先生と私が一緒したのですが、私はパリまでで、帰りました。

Royal Academy of Physician はイギリス女王様から頂く Award で、日本人では高木兼寛以来の出来事でした。有名な高木兼寛は海軍軍医総監で脚気の論争を森鷗外と行い、見事なコントロールスタディで森鷗外をして負けたと言わしめた医師です。当時、海軍では脚気の発生が大きな問題となっていました。東京大学の学派はドイツ学派が主流で、脚気の病原菌説が提唱されていましたが、イギリスのセント・トーマス医学校に学んだ高木兼寛は、米食を中心とした日本食が原因と考え、船に肉や野菜を多く積んだところ驚くほど少ない脚気の発生率でした。病気になった者は西洋風の食事を拒否した者たちでした。この功績で高木兼寛は Royal Academy of Surgeon の Award を受けたのでした。高木兼寛は東京慈恵会医院を開設し、自ら初代の院長となり、これはその後慈恵医大となっています。

重松先生は「高木兼寛の受けたのは Surgeon である。僕のは Royal Academy of Physician でこれは未だ誰も貰っていないんだ。」とおっしゃっていました。

6 月 1 日キエフに到着した時、空港でパンと塩の歓待を受けました。私には 3 回目の旧ソ連でしたが、この様な歓待は始めてでした。流石偉い先生が居られると扱いが違うな、と思ったものです。写真-1 は民族衣装とパンと塩を捧げた美男子と美少女からパンと塩それに花束を受けた重松先生と日本財団理事長の笹川陽平氏です。この時は豪華なメンバーでした。佐分利輝彦元厚生省医務局長、三輪史朗東大名誉教授、長滝重信長崎大学医学部第一内科教授、久住静代(その後日本原子力安全委員会委員)先生等でした。前年の 1991 年に僅か 2 例の小児甲状腺がんが発表されていたのですが、この時には小児の甲状腺がんが多発していることが発表されました。

会議が終わった後、モスクワのシュレメチボ空港から重松先生、久住先生と共にパリに向かいました。パリに着いた日はパレロワイヤル地区で日本料理を食べましたが、その時私はコメディフランセーズが頭に浮かび、直ぐに切符を買いに走りました。1978 年にパリに留学していた私としては、コメディフランセーズではモリエールが多く、フランス語が分からなくても分かり易く、面白いと考えていました。しかしその日の出し物は「仮面舞踏会」でした。モリエールではないので難しいかなとも思いましたが、その日は

それしかやっていません。結局何とか切符を手に入れ、夕方にパレロワイヤルのコメディフランセーズに繰り出しました。皆さんがテレビで見られるあの円筒形の劇場です。ずーっと上に観客席が上っています。私の買った席は随分高いところなので下手をすると落ちてしまいそうな場所でした。切符購入前に心配したことが現実になりました。ほとんどが会話だけで進行する劇で何を問題にしているかさっぱり分かりません。「先生、帰りましょうか」と声を掛けると「何事も、経験です。」と立とうとされません。それでも約一時間見て帰りました。それでも「何事も経験です。」の言葉は私には重く押し掛かっています。流石だなと感じた次第です。二日目は私のフランス語の先生である清家浩先生にご案内を受けました。清家先生は広島経済大学教授で、丁度、奥様、お嬢様達と一家で一年間パリに在住しておられた時でした。凱旋門、La Grand Arche (写真-2)を案内して頂きました。この新しい凱旋門は 1989 年に完成したので、1992 年は完成直後であったのでシャンゼリジェから凱旋門へと続く線上の西側作られ、凱旋門の数倍もある大きな建造物です。しかし 20 年前の当時でも 75 歳にはなっておられる先生を歩かせ過ぎた、と反省しています。私でも疲れました(写真-3)。意外にも先生は翌日も疲れた風も見せず、お元気なのにも吃驚した次第です。その夜先生から、一寸来てくれと言われました。ジュネーブの玉城君に電話しているのだが繋がらない、とのこと。その時、私は玉城先生の事は何も知りませんでした。私がダイヤルすると繋がりました。「重松先生が話したい、と言っておられます。」と言うと、興奮気味に大変懐かしがった口調で、「重松先生ですか、」と興奮気味です。「いえ、重松先生の代理です。すぐに代わります。」「うん玉城君……」玉城君は今 WHO に来ているんだよ、と先生の解説。「はあ……」と私は頼りない返事をしました。この玉城先生が、その後北大の公衆衛生学教授に就任された玉城英彦先生でした。重松先生の交友関係しかも、皆が先生と関わりを持ちたいと思っている先生の顔の一端を見せてもらいました。

先生とはこの時以外にも、ハワイ、ヒューストンなど色んな所で一緒しました。当然こちらは緊張して気を使っているのですが、後で考えると先生の方がより気を使っておられたのだな、と何時も感じました。それが先生の人生の達人という所なのでしょう。

私は 1990 年のチェルノブイリ原発事故後健康調査に参加させて頂いてからの付き合いで決して古い方ではありません。しかし HICARE でも、広島県がんセンター構想の委員会でも破格の扱いを受けました。多くの仕事も言いつけられましたが、不思議に重松先生から言われると、光栄ですという感じで引き受けてしまうのです。これは多くの方が経験しておられることと思います。

昨年重松逸造先生の誕生日に HICARE からの感謝状を病床に持参しました。先日放影研の児玉和紀先生から伺ったところ、重松邸の先生のお部屋にどーんこの感謝状が飾ってあったとのこと、誠にもったいなく、有難く感激したところです。

重松逸造先生 22 年間可愛がって頂いて、本当に有難う御座いました。



キエフ空港に到着した時の美男、美女によるパンと塩の歓迎。
花束を贈呈された重松先生と笹川陽平氏。



新凱旋門の前で清家 浩教授、久住静代先生と
撮った記念写真。



歩き疲れて、たどり着いた教会の前で。
重松先生、久住先生、それに不肖私。

重松先生との思い出

(財団法人) 全日本労働福祉協会 常務理事

川口 毅

「川口、俺より先に死んだら許さんぞ」と重松先生から言われたのは松山で開かれた重松会で先生と秋山邸の庭園を歩いている時でした。私が悪性リンパ腫で再発を繰り返していることをご存知だったのでしょう。私にとってなにものにも代えがたい励ましのお言葉でした。その先生が急に亡くなられたと聞いて私はなにか雷に打たれたような気持ちでした。まさか「あの先生が亡くなられるなんて」という気持ちでいっぱいです。

重松会では先生の昔の海軍時代の思い出話が披露されていましたが、私とその席でいつも感じていたのは、昔の海軍時代を模していろいろイベントを行なって騒いでいる若者たちを見て、先生は単に過去の大日本帝国の栄光を偲んでいるのではなく、多分、先生は現在の日本の政治経済や国際的な凋落を見て、こんな日本を夢見て多くの軍人や民間人が死んでいったのではないよと言いたかったのではないかと思っていました。

かつて、世界第2位といわれた経済大国も今や世界でも26番目となり、これからもどこまで下がっていくか全く予想がつきません。「なぜ世界で一番でなくてはならないのですか」の一言でスーパーコンピューターや衛星はやぶさの予算をたたき切った事業仕分けや東北の大震災を利用して自分たちの政治活動の勢力拡大や金儲けにつなげようといろいろ画策している政治家や経済界の人達をみると、全く重松先生たちが若い頃、目指していた日本国とは全くかけ離れたものとなってしまったことを嘆いておられたと思います。

先日テレビで仲間や同僚が何人も災害で死んでいるにもかかわらず住民を救済するために活躍していた自衛隊や「ともだち作戦」と称して数万人の米軍がいち早く東北の震災地に被災者の救済に入り住民との交流を見て感動しました。また世界130カ国以上から義捐金や救援物質が送られて住民の喜んでいる姿を見るにつけて、一方、被災地のがれきの処理を他の地方自治体に頼んだところ一部の住民が反対運動を起したという報道を見て同じ同胞なのに怒りというより情けない気持ちでいっぱいでした。

私たちは重松先生から学問だけでなく人間的なご薫陶を多々受けました。私たちはこれからも、その教えを後輩の人達に広く伝えていく役割を持っていると思います。私も短い命かもしれませんが出来る限り世の中に先生の伝えたかったことを広めていきたいと考えます。先生のやすらかなご逝去を悼んで追悼の言葉にいたします。

重松先生、まだ議論しなければならないことがあります

自治医科大学公衆衛生学教室 中村好一

重松先生が柳川洋先生と共に 1970 年に始められた川崎病全国調査を継続して実施させて頂いている立場からすると、このことを書くのが本筋ですが、川崎病については他の方も記載されると思いますので、別のことを 3 題ばなし的に書きます。

1. 国立公衆衛生院

1982 年に大学を卒業してそのまま専門課程の学生として国立公衆衛生院（現保健医療科学院）に進んだ。重松逸造疫学部長と橋本正巳衛生行政学部長が当時の衛生院の 2 枚看板だったが、そのうちの 1 枚はすでに放射線影響研究所に移られた後だった。しかし、当時の疫学部の M 先生が体調不良で入院され、そのために重松先生は疫学の講義をピンチヒッターとして担当された。「君たちは M（もちろん、呼び捨て）の入院のおかげで私の講義を聴くことができ、ラッキーだ」と講義の冒頭でおっしゃった。講義後の「しゃべり方や声が田中角栄に似ている」という受講生の声が鮮明に残っている。おそらく、先生の公衆衛生院での最後のまとまった一連の講義を受講することができたのではないだろうか。

2. ヒューストン

1991 年の正月明け、どういう会合だったのかは忘れたが、会議のあとで銀座で飲んでいるときに、柳川先生が重松先生に「そろそろ中村の留学を」と相談された。重松先生は「テキサスにしよう。今までテキサスには A とか B とか、ガラの悪いのを送っているので、中村君、君もテキサスだ」ということで、ヒューストンにあるテキサス大学公衆衛生学部への留学が決まった。

留学中の 1992 年 4 月（とはいえ、ヒューストンのこの時期はすでに日本の夏の気候）、重松先生は米国への出張の帰途、ご夫婦でヒューストンにわざわざお立ち寄りくださった。初日の夜はテキサス大学の関係者による歓迎夕食会だったが、次の夜は私のアパートにお越し頂き、庭でテキサス風バーベキューを行った。写真はそのときのものである。

そのときに重松先生がある大学の教授を評して、「あれほど仕事をする研究者は他に知らないが、誰も彼にはついていけない」とおっしゃったので、「他山の石にします」と申し上げると、「当たり前だ中村君。儂は君に言っておるのだ」。恐ろしいひと言だった。

3. カドミウム

いつの頃から環境庁（現環境省）のカドミウムに関する研究やその評価に携わるようになった（というよりも、「引き込まれた」という表現の方が実態を表している）。最初の会合での自己紹介で「自治医大の中村です」と挨拶すると、自治医大の別の教授と関連づけられた誤解を与えていることを鮮明に感じたので、休み時間にすべての先生に一人一人名刺をお渡しして、「私は公衆衛生学教室の助教授で、ボスは柳川洋教授です。ご存じのように、柳川先生は重松逸造先生の一番弟子で、私も疫学が専門です」と挨拶して回り、ある意味で瞬間的だったが、誤解を解消して回った。

カドミに携わるようになったことを先生にご報告すると、うれしそうにされていたが、そのうち、「個人のカドミウム曝露量の評価が重要だぞ」とおっしゃるので、「お言葉ですが、ご存じのように水田の土壌入れ替え作業は四半世紀前の 1975 年には完了しており、それ以来曝露はありません」と申し上げると、「放影研では半世紀前の被曝線量の評価を今でもやっておる」と、私をたしなめられた。

しかし先生、いくら半世紀前とはいえ、原子爆弾被爆は被爆者にとっては長い人生においてもきわめて大きなイベントで、そのときどこで何をしていたかは結構鮮明に覚えていると思います。一方で富山におけるカドミウム曝露は土壌汚染された水田で収穫された米を介してのもので、毎日の食習慣が関連しています。毎日の米の摂取量の変動は少ないとしても、曝露が始まった時期の推定は難しいものがあります。曝露から評価までの時間の長さよりも、瞬間の曝露か、日常生活による曝露かの違いの方が曝露評価の困難性にとっては大きいと思いますが、いかがでしょうか。

この課題を先生と議論することはできませんでした。しかし、いずれ私もそちらに参ります。「不肖の孫弟子」を越えた「不貞の孫弟子」はその時までには充分準備をいたしますので、是非議論をお願いいたします。その時まで、どうぞ、安らかにお休みください。合掌



写真は 1992 年 4 月 10 日、米国テキサス州ヒューストンの当時私が居住していたアパートの庭にて。当たり前のことだが、当時小学校に入る頃や入る前だった娘たちはいずれも成人した。ひげは帰国する前日（同年 12 月 23 日）に落とした。

テキサス大学留学とその後の思い出

岩手医科大学医学部衛生学公衆衛生学講座 坂田清美

私が重松逸造先生に直接的にお世話になったのは、1994年6月からテキサス大学公衆衛生大学院に留学した時でした。当時公害対策協力財団は留学生に対し補助金を出していました。重松先生のご推薦により、補助金を頂くことができました。留学生にとって補助金は大変貴重な資金で、家族と一緒にいった私は、最初の1か月の生活を立ち上げるために約100万円の経費を必要としました。テキサスに参りましてからもテキサス大学公衆衛生学部人類遺伝学センター名誉教授であられる William J. Shull 先生のご自宅に招待されたのも重松先生との長年の厚い信頼関係の賜でした。テキサス大学では恩師の Labarthe 教授のご指導を頂き、無事1995年の12月に終了することができました。テキサス大学時代の一番の思い出は、1995年の夏休みに家族で3週間を掛けてアメリカ中西部の13の国立公園巡りをしたことでした。全長は7,000マイルに達しました。重松先生からはしばらくの間、「大旅行」を酒飲み話で取り上げて頂きました。しかし、この旅行が可能になったのも重松先生のお蔭と思っております。

留学から帰りまして直ぐに橋本勉教授のご高配により和歌山県立医科大学に助教授として赴任することになりました。赴任して直ぐに第2回 British Epidemiology and Public Health Course が大阪で開催されました。私は事務局長として参加することになりました。このセミナーには Sir Richard Doll 先生ご夫妻にも参加頂き、重松先生には Doll 先生のご講演の座長をお務め頂きました。ご講演後は Doll 先生と一緒に広島に向かわれました。大変偉い先生ですが気さくに接して頂いたのが大変印象的でした。また、和歌山では2000年に橋本教授の下、第3回広島重松会を開催することができました。2泊3日のスケジュールで初日は「くまのじ」に、2日目は「あづまや」に泊まりました。東京からあまりにも不便な地での広島重松会は不評でしたが、それだけに価値ある旅行と今でも自負しております。「あづまや」は由緒ある旅館で、重松先生ご夫妻には天皇陛下がお泊まりになられたお部屋に宿泊して頂きました。

2005年の1月からは岩手医科大学医学部衛生学公衆衛生学講座に教授として赴任しました。重松先生には、赴任後直ぐに岩手医科大学にご講演において頂くことができました。また、重松先生の恩師である野辺地慶三先生の疫学総論の初版本を頂くことができました。原本は盛岡市先人記念館に寄贈し、複製本を印刷し関係者に配布することになりました。重松先生とともに内丸の医大に近い東願寺に野辺地先生の墓参りをしたのも昨日のこのようです。その後2009年に第12回広島重松会を岩手県で開催することができました。会場は大沢温泉山水閣でした。大沢温泉は1200年の歴史のある温泉です。宮沢賢治や高村光太郎もよく利用したことで知られています。5種類の温泉があり、老若男女通年で楽しめる温泉です。翌日の観光は宮沢賢治記念館と先人記念館にしました。宮沢賢治記念館は今でも多くの方に人気がありますし、先人記念館には野辺地慶三先生のご業績が展示されていることがら選ばせて頂きました。

重松先生は色々な場面で気配りをしてくださり、その点でもやはり天才でした。まだまだ教えを頂きたく思っておりましたが、もう教えを頂くことができないと思うと何とも寂しい限りです。長い間、本当に有り難うございました。

只々感謝！
埼玉県立大大学学長 三浦宜彦

私が昭和 58 年 8 月に昭和大学医学部公衆衛生学教室に移って間もなく、上司である安西定教授の指示で成人病の疫学分布協議会に参加させていただくことになりました。当時は愛知医科大学公衆衛生学教授の加藤孝之先生が班長を務められていた頃です。

その研究会で、顧問であられた重松逸造先生に初めてお目にかかりました。重松先生のお名前は前職の東大保健学科成人保健学教室に在職中にも存じ上げておりましたが、その時の印象は放影研の理事長というお立場でご高名にもかかわらず私ども若輩に気さくにお声掛け下さる好々爺（まだ 60 代のお若い頃でしたが）という印象でありました。その研究会を通して、柳川洋先生、簗輪眞澄先生を始め多くの先生方とご交誼頂くようになりました。

翌年の昭和 59 年には、昭和大学の客員教授にご就任いただき、安西教授の後任の川口毅先生が退任された平成 18 年までの長きに亘って教室員、学生にご指導いただきました。

その間、私には日本公衆衛生学会の理事のお話を頂き、その後 4 期 12 年の理事を務めることになったのも重松先生のご支援のおかげであります。

平成 11 年 5 月に埼玉県内の疫学研究者の方々に埼玉県立大学教授就任祝いを開いていただきました折にもご出席いただき激励のお言葉を賜りました。

また、その 1 年前年の初秋だと記憶していますが、突然のお電話で、広島大学教授吉澤浩司先生のウィルス肝炎疫学研究に関連して肝がん死亡地図作成のご指示がありました。これを契機に、翌年からは分担研究者として研究班に入れていただき、新任地での研究資金として大いに助かりました。この研究は、その後現教授の田中純子先生に引き継がれて、現在も分担研究者としてお手伝いしております。

このように、重松先生には 30 年に亘りご多くのご支援を賜ってまいりました。昨春、柳川先生の二代後の埼玉県立大学学長に就任し微力ながらその任を果しておりますが、ここに至るも、重松先生の細やかなご高配、並びに柳川先生をはじめとする重松一門の諸先輩方のご支援のおかげと心から感謝しております。

重松先生、本当にありがとうございました。



撮影者 : 三浦宜彦
撮影日時: 平成 11 年 5 月 31 日
撮影場面: 本文中の私の教授就任激励会の後、大宮駅前

「大医をめざすことを矜持とする」

山梨大学大学院社会医学講座
山縣然太郎

「大医医国、中医医民、小医医病」。大医は国を治し、中医は人を治し、小医は病気を治す。重松逸造先生から教えていただいた言葉だ。

医学部に進学した動機は赤ひげのような中医になることであったが、多くの方との出会いや様々な出来事に影響されて公衆衛生、疫学を専門とする道に進むことになった。第1回英国疫学公衆衛生学セミナー（日英セミナー）がその最たるものである。

1994年1月に自治医科大学で開催された日英セミナーには全国から30余名の公衆衛生学、疫学の若手研究者が参加した。当時30歳過ぎの参加者は1週間ほど自治医科大学の研修施設で、英国のWalter W. Holland先生の講義や主催者の柳川洋先生、橋本勉先生、児玉和紀先生の講義を受けたり、自分たちの研究発表などを行った。私は前年まで米国で遺伝子研究に没頭していた。英国セミナー参加当時は新しい研究分野として疾患易罹患性に関する遺伝疫学研究を進めていた頃で、疫学研究は素人に近かったし、本当にこのまま公衆衛生学を専門とするかも迷っていた。そのような時に顧問という立場の重松先生がスモン研究などのご講義をされた中で冒頭の「大医医国、中医医民、小医医病」のお話をされたのだ。私が現在、曲がりなりにも公衆衛生学、疫学研究を専門として研究・教育に携わってられるのは、日英セミナーで出会った仲間の存在や講師の先生方からのご支援とともに、重松先生のこのお話に鼓舞されたことが大きい。

私自身疫学者として教育、研究を通じて社会貢献ができているだろうか。おそらく、一生このことを自問自答しながら、与えられた役割を果たしていくのだろう。重松先生に師事した一人として、大医をめざしていることを矜持としたい。

重松逸造先生のご冥福をお祈りいたします。

「毎日 1 万歩あるくから健康になれるのか？ それとも、健康だから毎日 1 万歩あるくことができるのか？」

種田行男（中京大学情報理工学部）

これまで、私は身体活動と健康との関係を明らかにするための研究を行ってきました。定期的な身体活動や運動は、個人あるいは集団の疾病予防や健康の維持増進に多大な恩恵をもたらすことは、これまでの疫学研究から十分に証明されています。例えば、身体活動量の多い者ほどガンおよび循環器疾患の発症や死亡リスクが低いこと。高血圧症あるいは糖尿病は、身体活動水準が高く身体能力（有酸素能力）が優れた者ほど発症の相対危険度が低いことが認められています。さらに、身体活動は身体的恩恵のみならず、リラクゼーションの強化、ストレスや不安の軽減、気分の改善、認知機能の向上などの精神的恩恵、および社会参加、対人交流、生きがいの創造などの社会的恩恵もまた報告されています。

しかしながら、我々国民の多くは十分な身体活動を実施しているとは必ずしも言えません。そんな中で、重松先生の 1 日の歩数は 1 万歩を超えており、「身体活動による健康づくり」を長期に渡って実践していらっしゃいました。疫学の大先生が疫学研究から得られた身体活動の **evidence** を実践して、ご自身の健康長寿を達成している姿を見て、私はとても嬉しくまた誇らしく感じました。そして、私は重松先生の継続的なウォーキングの実施に敬服すると同時に、やはり身体活動は健康長寿に繋がるのだと確信していました。ある年の重松会の際、このような私の思いを重松先生にお話したところ、「種田君、毎日 1 万歩あるくから健康になれるのかもしれないが、健康じゃないと毎日 1 万歩あるくことはできないんだよ」と、私に因果の逆転を教えてくださいました。

当時、運動生理学が専門で十分な疫学の知識や経験がなかった私は、まさに目から鱗が落ちる思いでした。そのころ、我が国の体力科学分野では運動生理学や生化学的研究が主流であり、メカニズムの解明を目的とした研究が数多く行われていました。身体活動や運動と健康の関連を検討する研究も実施されていましたが、疫学的手法を用いた研究はわずかに過ぎませんでした。しかし、我が国の保健あるいは体育行政の方針決定に活用できる **evidence** が求められる時代の到来とともに、体力科学の疫学的研究者層の薄さが問題視されるようになりました。

そこで、体力科学研究者における疫学的手法の習得、および疫学的手法を用いた健康科学の発展を目的として、荒尾先生（早稲田大学）らが発起人となり運動疫学研究会が設立されました。今年で創立 15 年目を迎えた本研究会の活動は、学術集会の開催や機関紙の発行の他に、教育セミナーを開催しています。このセミナーには柳川先生（地域医療振興協会）や中村先生（自治医科大学）などが講師を毎年お努めくださり、日本疫学会および重松会のみなさまから多大なご協力を頂いて成り立っております。

このように、日本における運動疫学研究を推進するための大きな原動力となったのは、重松先生とそのファミリー（重松会）の先生方のお陰であることを深く感謝申し上げます。本当に有難うございました。重松先生、これからも運動疫学研究の将来をいつまでも御見守りください。

浜松・舘山寺温泉での思い出

尾島俊之（浜松医科大学健康社会医学講座）

重松先生は直弟子世代には厳しい面があったと伺っていますが、私たち孫弟子世代にはただただお優しく、とてもかわいがって頂きました。

特に思い出に残っていますのは、2008年（平成20年）10月に、第11回広島重松会を浜松市舘山寺温泉で行い、重松先生をお迎えできたことです。

浜松医大には、設立から間もない時期に、重松先生の海軍・東京大学・国立公衆衛生院での後輩にあたります松下寛先生を公衆衛生学講座教授として送り出されたというご縁がありました。そこで、以前から、浜松にお越しになりたいとお話を頂いており、ようやくお応えすることができたのでした。

舘山寺温泉では、夜遅くまで重松先生を囲んでお話しをすることができ、また翌日には自衛隊浜松基地の航空ショーの飛行機を見上げながら、浜名湖のクルーズを楽しんで頂きました。



もうひとつ、私が浜松医大に着任しました記念に、重松先生の「上医」の揮毫による大きな宮島杓子を頂きましたことも大きな思い出です。

再び重松先生を浜松にお迎えすることができなくなり、とても寂しく思っています。重松先生に高いところから見守って頂きながら、頑張っていきたいと思います。

重松先生が入院加療されていることは、志毛先生からうかがっていました。私は、橋本勉教授の門下生として、生前重松先生にはとくにかわいがっていただいた者のひとりです。毎年、広島重松会で、全国各地で重松先生にお目にかかれることは楽しみでありました。

第1回英国疫学公衆衛生コースに参加し、英国留学への道を開いていただいたのも重松先生でした。今お別れの会の発起人のおひとりでもあるウォルター・ホランド教授の著書『Foundations for health improvement - productive epidemiological public health research 1919-1998』(Nuffield Trust, London, 2002)の日本語訳の出版(疫学公衆衛生研究の潮流—英米の20世紀—, 日本公衆衛生協会, 東京, 2004)をお勧めいただいたのも重松先生であり、この日本版ともいうべき「日本の医療と疫学の役割—歴史的俯瞰—」(克誠堂出版, 東京, 2009)のとりまとめをご指示くださったのもまた重松先生でした。おかげ様で、下調べで日本医(醫)事新報を戦前の創刊号から2007年まで総覧でき、生涯得がたい学問的体験ができました。当然ながら、医事新報の中でも重松先生の論文、紹介記事の多いことは、重松先生の学問の歩みを追確認する趣きで、週末の和歌山医大の図書館でひとり感慨にひたっておりまして。また、目黒のご自宅へうかがい、原稿の最終チェックをしていただいたこと、奥様手ずからのお昼を頂戴したことなど、思うだけで目頭を熱いものが通り落ちます。さらに、この疫学研究史が出版なったあとは、どのタイミングでどの医学誌に広告を打つかまでご高配いただき、大胆にして繊細な重松先生の人となりを通り返し実感させていただきました。

不肖の孫弟子にも惜しめない愛情を持って接していただいたことに、過分の学恩を感じております。ただ今は地域中核病院で地域医療に従事する毎日ですが、この先、病院内での疫学研究を継続いたし、不肖は不肖らしく、地域からの疫学情報発信をしたいと考えております。これが重松先生がよく口にされた「温故創新」を実践することになると信じる毎日です。ただし90歳を超えてなお1日15,000歩を歩かれた体力には全く脱帽で、自分は日々、1万歩を歩くことで及ばずながら自分の身の丈にあった体調維持を日課にしています。

重松先生のお人柄

上原里程

自治医科大学 公衆衛生学

私が重松先生に初めてお目にかかったのは、自治医大で疫学の勉強を始めたばかりの頃でした。広島重松会に加えていただき、宴会の場で右も左もわからずおろおろしていると、「お前、初顔なのだから重松先生と話してこい」と中村好一先生に促され、グラスを手に重松先生の席へご挨拶に伺いました。出身大学を尋ねられたので、「慈恵医大です」とお答えすると、「ああ、阿部君、元気かね？彼は、海軍の後輩なんですよ」とにこやかに言われたときには驚きました。「阿部君」とは、私が慈恵医大に入学したときの学長だった阿部正和先生のことであり、私が尊敬する先生でもあったので、とても嬉しかった思いとともに失礼ながら重松先生への親しさを感じたものでした。しばらくは広島重松会がどのような会であるのかよく理解できませんでしたが、回を重ねてご参加の先生方とお話をさせていただくうちに、直接的であれ間接的であれ、皆様が重松先生のお弟子さんでありかつ重松先生のお人柄にほれ込んでいらっしゃるということがわかるようになり、決して形式的な集まりではないのだということを強く認識するようになりました。私のような極めて若輩な者に対しても、重松先生は「最近の若い者はなっとらん」というようなお小言は一切おっしゃらず、常にクリエイティブに前向きに物事を捉えるように話されていたことが強く印象に残っています。

私は川崎病に興味を持って疫学の世界に入りましたが、その縁もあって柳川洋先生が編集してまとめられた『川崎病の疫学 - 30 年間の総括』の出版をお祝いする会にも参加させていただきました。その席で、重松先生から頂いた一言が「温故創新」でした。この本を開くときにはいつでも「温故創新」の思いを心に刻み直して仕事に取り組むようにしています。

私は重松先生から疫学の考え方だけでなく、そのお人柄から人を惹きつける魅力というものを学ばせて頂いたように思います。ほんの一面であるとは思いますが、お酒の席での、満面の笑顔で老若男女の違いなく豪快にお話しされる姿は、少なくとも私には大変魅力的に映りました。きっと天国でもおいしいお酒を召し上がりながら豪快なお話をしているに違いありません。これから先生の笑顔を拝見できないのはとても寂しいのですが、先生の思い出を胸に「温故創新」の精神でがんばっていきたいと思っています。ありがとうございました。

重松逸造先生の風格にふれて

栃木県立がんセンター疫学研究室
大木いずみ

重松逸造先生は私にとっては雲の上の人であり、心から尊敬していました。直接ご指導を受けたということはありませんが、私には「師匠の師匠の師匠」という位置にいらっしゃいました。

平成12年の1月に米子で日本疫学会総会が開かれた際、大雪のために羽田から米子に飛ぶはずの午前中の飛行機が欠航になりました。しかし、重松先生が空港に現れた瞬間から、天候がみるみる回復し、なんと先生が乗る午後の便は飛ぶことになりました。天候まで変えてしまうほどのパワーと風格を感じた瞬間でした。以前から重松先生にはすべてにおいて特別なオーラを実感していましたが、その日はさらに確信しました。

日本の疫学をリードし、多くの人々から尊敬されてきた先生ですので、いつまでもお元気な姿を見せてほしいと願っていました。私はまだまだ未熟者ですが、先生の風格あふれるお姿を思い出し、これからはがんばっていきたいと思います。



2000. 6. 23 重松先生ご夫妻と共に

重松先生との出会い、そして忘れられないお言葉

自治医大公衆衛生学 屋代真弓

「重松逸造」というお名前は前所属(自治医科大学学事課)にいたときから存じていました。当時「厚生省研究班」の班長をされていたので、経理事務関係で重松班「班長 重松逸造」というお名前だけは存じていたのです。その時はまだ、実際にお会いできることなど夢にも思っていませんでした。

その後、私が柳川先生のもとで働かせていただくことになったのは 1985 年のことです。当時、柳川先生は長寿科学研究班、シルバーサイエンス研究班、厚生科学研究班の班長をされていたので、班会議などで全国各地にご一緒させていただきました。そして、柳川先生から重松先生に初めて紹介していただいたのは、確か



1990 年に広島で会議があった時だったと記憶しています(写真)。重松先生は厳格なイメージは想像通りで、特徴のあるお声が印象的でした。緊張する私に、重松先生は優しい笑顔で話しかけてくれました。それからは会議のたびにお会いする機会が増えていきました。実はお会いするのは、まじめな会よりも飲み会、宴会が多かったので、お酒がとても強いという印象があります。でも、いろんなお話「疫学よもやま話」をお聞きしていつも楽しいお酒の席でした。そして、那須での広島重松会の時には「事務局、ご苦労様」と奥様とともに労いのお言葉をいただき、恐縮しながらも感謝したのを覚えています。

もうひとつの重松先生との接点は、「川崎病全国調査」です。私がこの調査の担当になったのも 1985 年のことでした。翌年には、第 3 回目の全国規模の流行があり、翌々年に第 9 回全国調査が実施されました。その後 2 年に 1 度ずつ、現在まで継続的に実施され、昨年第 21 回調査が終了しました。この「川崎病全国調査」は 1970 年に最初の川崎病研究班ができたときに、当時、国立公衆衛生院疫学部長であった重松逸造先生が中心になって最初の調査が実施され、40 年間も続いている調査です。私が、重松先生が築いた疫学調査にバトンを受け取られた柳川先生、中村先生とともに 27 年間も関わってこられたことはこの上ない幸せなことだと思っています。川崎病は、まだ原因究明には至っていません。重松先生が疫学調査の基礎をたたき上げた「全国調査」をしっかりと守り続け、原因究明に貢献すること、それが重松先生からいただいた、私のこれからの使命と思っています。

そして、私にとって忘れられない重松先生からいただいたお言葉があります。それは、「会うたびに君は若くなるね。」という一言です。当時は、お世辞だということは百も承知でしたがとても嬉しかったのを覚えています。今考えると、そのお言葉は、外見のことではなく「いきいきと仕事をしているね」というのが真の意味だったのだと思います。柳川先生や中村先生、諸先生たちとともに充実した仕事をしていたからこそ、いただけたお言葉だったのだと思います。そのお言葉をもう直接いただくことができないのはとても寂しいですが、「会うたびに君は若くなるね。」というお言葉を糧にこれからも前向きに頑張っていきたいと思っています。

最後に、重松逸造先生に心より感謝申し上げますと共にご冥福をお祈り申し上げます。

我が家の仏壇の前に上医と書かれた大きなおしゃもじが飾ってあります。縦 90 センチ横 30 センチのこのしゃもじには「上医・佐野雄二先生、広島重松会」と大きな墨字で黒々と書かれてあります。

2 年前の 2010 年 8 月 28 日に徳島市内で夫・佐野雄二を偲ぶ会が開かれました。重松逸造先生始め県内外から 50 名ほどの公衆衛生関係の先生方が集まって下さり、主人を偲んで下さいました。

この上医しゃもじはその時に重松先生から手渡して頂いた貴重な記念品です。国内で 5 本しかないこのしゃもじは私達家族にとって、重松逸造先生と佐野雄二を偲ぶ、かけがえない大切な宝物です。

8 月 28 日の偲ぶ会では、隣の席に座っておられた重松先生から貴重な、忘れられない言葉を 3 つ頂きました。

「私はこの年齢になるまで、たくさんの偲ぶ会に出席してきたけど、佐野君が亡くなって 1 年経って、全国からこんなにたくさんの人々が集まるということは、こういうことはなかなかできないことなんだよ。佐野君の人柄だね」という言葉です。

また 2 つ目は、挨拶に来られた徳島県の先生を見て、「いい指導者は良い弟子を育てるというけど、佐野君も良い弟子を育てたね、徳島にも立派な先生が育っておられる、大切なことだね」とおっしゃいました。(弟子と言うにはとても恐れ多いのですが…)

私は先生の目を見て、「重松先生、主人は今どの辺にいらっしゃるのでしょうか、どうしているのでしょうか」と尋ねました。重松先生ならなんでもご存じじゃないかと思ったからです。すると先生は慈愛に満ちた優しいまなざしでゆっくりと「それは僕にもわからないねえ」と仰いました。これらの 3 つの言葉は今も私の心にずっと残っております。

先生、今頃はそちらがどういう場所かきつとよくご存知ですよ。主人をどうぞ宜しくお願い致します。

「上医は未だ病まざるの病を医す」この言葉は重松先生が娘にお手紙で教えてくださったのですが、まさに予防医学という世界を重松先生は極めておられました。どうぞそちらの世界でまた主人と二人でいろんなことを話し合い、楽しい日々を過ごして頂きたいと思います。

ご冥福を心からお祈りしております。先生、ありがとうございました。



2008 年 9 月 14 日

重松先生のご自宅で
重松先生ご夫妻と佐野雄二、長男と。
美味しいイタリア料理と楽しいお話を
ありがとうございました。



2010 年 8 月 28 日

徳島市内で開かれた「佐野雄二を偲ぶ会」で
重松先生ご夫妻、児玉和紀先生、佐野雄二の
家族と…

重松逸造先生と芋焼酎「伊佐美」

島根大学医学部公衆衛生学

藤 田 委 由

重松逸造先生は私の師匠である柳川洋先生の師匠に当たる先生で、私ごときが重松先生の思い出を語るのは畏れ多いことです。私は平成 5 年 4 月に自治医科大学公衆衛生学教室から放射線影響研究所の病理疫学部副部長に赴任しました。私は盆と正月の年に 2 回は故郷の鹿児島へ帰郷します。何か郷土のお土産を重松先生に紹介しなければと思いました。鹿児島の代表的なお土産は明石屋の軽羹（かるかん）と芋焼酎です。明石屋の軽羹は上品なお菓子で女性に好まれます。しかし、重松先生にお菓子は変だと思い、芋焼酎「伊佐美」にしました。

伊佐美は鹿児島では有名な芋焼酎です。ホームページによると伊佐美という名前は蔵元がある伊佐地方（鹿児島県伊佐市）で出来る美味しいものという意味だそうです。芋焼酎の蔵元は鹿児島県の各地域に何カ所にも散らばっています。昔は、地域の住民は地元の蔵元で造られた焼酎しか飲まなかったようです。私の父はもう亡くなりましたが、若い頃は地元の日当山醸造の焼酎「アサヒ」しか知らず、ビール、ウィスキー、まして日本酒などは飲んだことがなかったと聞きました。ところが、伊佐美は焼酎を飲み飽きた方々が好んで飲まれるお酒です。一度、鹿児島県医師会の集まりに出席した時には、伊佐美を含めて数本の焼酎が提供されましたが、伊佐美の瓶だけがすぐに空くという有様でした。

私は鹿児島のお土産に伊佐美を 1 本、重松先生に届けました。果たして焼酎のような癖の強いお酒を重松先生が好まれるのか不安でしたが、お気に入られたようでした。伊佐美の蔵元は小規模で、販売本数が限定されています。いわゆるプレミアム焼酎のはしりです。放射線影響研究所の理事長を退職され、東京に移られた頃に、本格的な焼酎ブームが関東に押し寄せました。「森伊蔵」、「魔王」、「佐藤」などいろんな焼酎がありますが、重松先生は伊佐美を好まれたようです。「伊佐美」を手に入れるのには苦労されていたようです。焼酎はありますかとお尋ねすると、「あれ」がないとおっしゃいました。

私は放射線影響研究所に平成 12 年 3 月まで 7 年間、勤務しました。その後、鹿児島県加世田保健所に 3 ヶ月、同年 7 月から現在まで島根大学医学部公衆衛生学にいます。重松先生のご指導によりここまでやってこられたと有り難く思っております。出雲では第 5 回広島重松会を平成 14 年 9 月 14 日、15 日と 2 泊 3 日の旅程で開催することが出来ました。最初は 1 泊 2 日の旅程を考えていましたが、重松先生から連休を利用して 2 泊 3 日にしなさいというご指示が来ました。玉造温泉と亀嵩温泉に宿泊し、いろんな観光地を見学することが出来ました。修学旅行のように楽しい思い出でした。もう一度、出雲で重松会を開催できたらと思っていましたが、もはや開催することができなくなりました。



第4回広島重松会総会(2001年、栃木)の写真集より。
2本並んだ向かって左が芋焼酎「伊佐美」、右が大分麦焼酎「兼八」です。



第5回広島重松会総会(2002年、出雲)の写真集より。

ワイン選びの金言

東京大学医学部附属病院 22 世紀医療センター

関節疾患総合研究講座

吉村典子

重松先生ご逝去の報をどうしても受け入れられず、追悼文の執筆にも手をつけられずに日が過ぎてしまいました。今も理屈ではわかっていても心では受け入れられたというわけではなく、今でも先生のお声が聞こえてくるような気がいたします。

重松先生の思い出はどれもとても大切な宝物として心の中の宝箱に保管しています。中でも思い出深いのは東京に来てからのことです。私は平成 7 年 2 月に東京大学に転勤したのですが、こちらに引っ越して一ヶ月ほどしたころでしょうか、突然先生がお電話をくださり、お食事会に招いてくださりました。生まれてからこのかた和歌山県を一步も出たことが無く、都会暮らしとは無縁の私に、東京のことを教えてあげようという親心(?) だったのではないのでしょうか。おしゃれなレストランで、スペイン料理をいただきながら、東京で訪問した方が良い名所旧跡を教えてくださいました。私の夫がリタイアして東京に出てきてからも、しばしば気にかけてくださり、うちの夫には研究者の夫たる心構えについてお話していただきました。研究者はとても忙しいので、家事にはあまり手が回らなくてあたりまえとお話ししていただき、大変感謝しております。

重松先生は健啖家でいらっしゃり、洋食も和食も本当においしそうにたくさん召し上がっていらっしゃいました。食事にあったワインやお酒をご自分で選ぶのがお好きでした。ですが、あまり高級なお酒を頼むことはなさらず、安い方から二番目くらいのワインを選んでいらっしゃいました。その際先生がおっしゃった「まずいワインも冷やせば飲める」という至高のお言葉は、金言としてワイン選びの際に役立てさせていただいております。

今この拙文を書きながらも、先生の豪快なお食事の姿が目に残ります。最後にお会いしたのは銀座のはずれで一緒したときでした。タクシーを呼ぼうとする私を制して、地下鉄でお帰りになると言われ、奥様と一緒に長い地下鉄への階段を堂々と下りて行かれました。私と夫が階段の上で挨拶すると、少し振り向いてほほえんでいらっしゃいました。あの姿が最後になるとは、今もって信じられず、涙が止まりません。私の心の中では、重松先生は生きていらっしゃいます。先生の記憶をとどめる者がいる限り先生は不死です。先生からいただいたお言葉を次の世代にも伝えていきたいと思います。



「2000 年広島重松会（和歌山県那智勝浦町にて）」

重松先生と国内外のお弟子さん
埼玉県立大学 健康開発学科 若林チヒロ

私は、重松先生から直接ご指導頂いた立場ではありませんが、先生のお弟子さんたちを通じて何度か場をご一緒させて頂く機会がありました。

初めてお会いしたのは、那須で行われた疫学セミナーです。若手の参加者が「重松先生から直接お話を伺えるなんて感激だ!」と興奮して話していたのが印象的でした。ご著書でしか先生の教えを受ける機会がなかった若手の人たちにとって、貴重な機会でした。

二度目は、北京大学の張拓紅教授と、日本の感染症対策の視察にみえた北京市議員や北京大学病院の医師との会食の場を東京駅の丸ビルで一緒させて頂いた時でした。張拓紅先生は自治医大の柳川洋先生の元に留学されていた際に、重松先生とも深い交流をもっていたそうです。かつて中国の医学部では、重松先生のご著書の翻訳で疫学を



2010年1月 国際疫学会西太平洋地域学術会議前日の歓迎会

勉強していた時代があったそうで、みなさん著者の重松先生とお会いできたことをとても喜んでいらっしゃいました。重松先生は初対面の外国の要人がお相手でもまったく変わらない対応で、あっという間に先生を中心にした楽しいお酒の場になっていました。

三度目は、国際疫学会西太平洋地域学術会議を埼玉県立大学で開催した際でした。私は、モンゴル、ニュージーランド、中国など様々な国の方が休憩される部屋の担当で、言葉も通じないし困ったなあと思っていたのですが、重松先生は夜のパーティ用に準備していた日本酒をみて「これを少し開けましょうか」とおっしゃって、外国の方に勧めて下さいました。みなさん喜んで下さり、少し赤い顔をして学会場に戻っていかれた方もいます。人をひきつける魅力は国境を越えても変わらないのだと実感しました。

重松先生が体調を崩して入退院を繰り返されるようになり、柳川洋先生は頻繁にお見舞いに行かれるようになりました。ご多忙ななか時間を割いて対応されている柳川先生のお姿をみていて、師を思う柳川先生のお気持ち、お弟子さんに対する重松先生の信頼感に、お二人の師弟関係の絆の強さと温かさを感じました。

重松先生、私は先生と多くのお弟子さんたちにご指導いただきました。本当にありがとうございました。

重松逸造先生 有難うございました

高石昌弘（元国立公衆衛生院）

昨年（2011）秋に、熊谷の駅で、偶然、元国立公衆衛生院疫学部長の簗輪真澄先生にお会いした際、重松逸造先生のお加減があまり良くないとお聞きし心配しておりました。それまでは、疫学関係のどなたにうかがっても重松先生はお年とは思えないほど若々しくお元気に過ごされているというお話だったので、お加減が良くないなど、少しも考えていなかったからです。今年の2月に入り、新聞で先生のご訃報に接し、やはりご体調を崩しておられたのだということを実感し、心から寂しさを覚えました。重松先生にはご生前、本当にお世話になりました。改めて心からお礼を申し上げ、先生のご冥福をお祈りいたします。

重松先生に初めてお会いしたのは、私が医学部3年生の頃ですから、1952年のように記憶しています。東大医学部学生組織であった結核研究会の一員として4年生と一緒に国立公衆衛生院疫学部の重松先生をお訪ねした時でした。先輩として大変気さくにわれわれを迎えて下さり、先生独特の熱い口調で結核対策の重要性をお話されたことを明瞭に記憶しております。その後、ツベルクリン反応の成績の処理や胸部エックス線間接撮影の読影などの勉強のため、時折、先生の研究室を訪れたことを思い出します。当時の公衆衛生院は創設後まだ14年しか経っておらず、終戦直後の東大医学部の古びた施設しか知らない者にとっては別天地のように綺麗な建物でしたし、若い先輩研究者たちのご活躍ぶりに接し、卒業したら将来このようなところで仕事ができればいいと素直に思ったものです。

インターンが終わり、重松先生との関わりもあったので、公衆衛生院正規医学科の学生として1年間、公衆衛生学をきちんと勉強しようと考え自費学生になりました。学生時代から重松先生のところに時々出入りしていたという気安さに加え、授業料は無料だし、むしろ奨学金（第一生命保険相互会社）が貰えるという大きな魅力があったからです。そんなわけで益々公衆衛生院に近づいた私にとって、正規医学科の学生指導担当副主任のお一人に疫学部の宮入正人先生がいらしたので、疫学部にはかなり頻繁に足を運ぶようになりました。重松先生、宮入先生、平山 雄先生らが疫学の新しい方向性を熱く論じておられるご様子が懐かしく思い出されます。

1年間の勉強が終了した折、縁あって公衆衛生院の母性小児衛生学部に就職することができました。当時、齊藤 潔先生が部長（後に院長）でしたが、群馬大学教授に転出された辻 達彦先生の後任とのことでした。卒業直後は臨床分野を考えていた私が正式に公衆衛生院の職員として先輩諸先生の後を継ぐことになったのは重松先生のお陰と言わざるを得ません。

1955年から1993年まで38年間という長い間、国立公衆衛生院でお世話にな

りましたが、その間に重松先生から本当にいろいろとご教示を頂きました。最も思い出されるのは、私の退官直前でしたが、先生が日本公衆衛生学会の理事長をお務めの頃、年次学会長就任についてのご依頼を頂いたことです。当時、公衆衛生院は厚生省付属研究機関の統廃合計画の嵐に巻き込まれ将来の方向性が激論されていた折だったので、大型の学会開催を引き受ける難しさを実感しながらも、「公衆衛生院ここに在り」の意気込みを内外にアピールする良いチャンスと捉え承諾したことを思い出します。お蔭さまで公衆衛生院の当時の職員はもとより多くの学会関係者のご支援を得て1992年秋、東京で盛会裡に学会を開催することができました。公衆衛生院の先輩としての重松先生の大きなご支援があったことはいまでもありません。

一昨年（2010）の公衆衛生学会は以来18年ぶりに東京で、大井田 隆学会長のもと盛大に開催されました。その折、久しぶりに重松先生にお会いし、かつて公衆衛生院を中心に開催した学会の思い出を語りお礼を申し上げたのがつい先だったのような感じがいたします。大変お元気だったご様子が忘れられません。

重松先生は公衆衛生院の後、金沢大学医学部、放射線影響研究所などにおいて多くの素晴らしい業績を挙げられ、また、日本疫学会を通じて多くの研究者をお育てになりました。その方々達が今や我が国のそれぞれの領域でリーダーシップを発揮され活躍しておられます。先生とのお別れは多くの関係者にとって本当に悲しく寂しいことです。しかし、先生にご教示頂いた多くのことは後輩の人々の記憶にいつまでも残ることでしょう。先生のご逝去に深く哀悼の意を表し心からご冥福を祈ります。 合掌



福富先生の祝賀会で談笑される重松先生と筆者（向かって右端）

邂逅 ～先生との出会い～

黒子 武道

先生の御逝去の報は、私にとって大きな衝撃でした。御家族の皆様の御心情を拝察し、心からお悔やみ申し上げます。

私は昭和42年2月、国立公衆衛生院の曾田院長の御推挙により、東京大学衛生学教室から疫学部に入転し、初めて先生にお会いしました。明朗闊達で温かい御性格という印象でした。

当時、私どもは先生の御自宅の近くに住んでおりましたので、御出勤の途次、先生の車に便乗させていただき、恐縮いたしました。疫学部では急性感染症の疫学、予防接種とその副作用に関する調査研究を担当いたしました。

翌年、「公衆衛生学校における公衆衛生従事者の教育訓練に関する調査研究」のため、WHOの東南アジアおよび西太平洋地区の12ヶ国の関連施設を訪ねました。疫学部に入籍した7年間のうち、WHO医務官として勤務した2年間を含め、4回、4年余の海外勤務でしたが、いずれも先生の御推薦と御指示によるものでした。

昭和45年、総理府の中期在外研究員の応募をお勧めいただき、「急性伝染病のサーベイランスの研究」のため、チェコスロバキア、英国および米国での研修の機会を与えていただきました。海外の研究機関との交流、研究者との交友関係の広さに驚かされました。

昭和47年8月、WHO医務官としてマレーシア国保健省に勤務しておりました折に、先生御夫妻と御友人御夫妻がクアラルンプールの私どもの自宅に来訪されました。2日程の御滞在であったかと思いますが、市内の観光やショッピングの御案内をいたしました。先生には保健省の私のオフィス、チームスタッフや保健省の幹部職員にもお会いいただきました。

2年の任期を終え、昭和49年2月に疫学部に入転し、同年7月、新設の東京都立神経科学研究所疫学部に入転しました。先生には非常勤研究員をお願いし、研究計画の作成などについて御助言をいただきました。

昭和51年9月、第8回国際疫学協会(IEA)の学術集会がサンファン(プエルトリコ)で開催され、出席いたしました。先生もIEAの理事会に出席のため集会に参加されました。サンファンは世界第2の古都ということで、先生とオールドサンファンを散策し、古都の景観を満喫いたしました。懐かしい思い出となりました。

昭和55年10月、国立水俣病研究センター所長に御推挙いただき、単身赴任いたしました。先生は環境庁の「水俣病に関する総合研究班」の班長として水俣病研究センターとの合同研究発表会に参加されました。私が放影研をお訪ねした折には、研究活動の御説明をうかがいました。また、先生の御自宅にお招きいただいて手厚いおもてなしをいただきました。

私は平成元年に定年退官し、救世軍清瀬病院長を務め、平成7年に退職しました。

先生には平成9年5月、旗野先生の受章記念祝賀会でお会いしました。

翌年、脊柱管狭窄症の手術のため、東京医療センターに入院し、退院後リハビリテーションのため通院しておりましたが、平成13年1月7日、思い掛けず先生にお会いすることが出来ました。昔と変わらないダンディなスタイルで、久しぶりの再会を喜んで下さいました。また、御自宅に御

招待をいただきましたが、私どもの事情で、せっかくの御好意をお断りせざるを得ませんでした。

先生は卒寿を迎えられた後もワシントンに出かけられ、疫学部の忘年会にも出席されるなど、お元気にお過ごしの方でしたが、遂に直接お会いすることは出来ませんでした。

先生は卓越した識見と指導力、豊かな包容力をお持ちになり、わが国のみならず、国際的分野で数々の御功績を残されました。

「お別れの会」にあたり、先生の御生前の輝かしい御功績と御遺徳を偲び、心からご冥福をお祈りいたします。



1972. 8. 2
クアラルンプール滞在の黒子宅に重松先生、山崎先生ご夫妻が訪問



1971. 5
Dr. Velimirovic を囲んで雅叙園にて



1977. 9. 15 第8回 IEA 学術総会
プエルトリコのサンファンにて



1970. 5. 20
Dr. Velimirovic (Regional Adviser on Communicable Diseases, WHO/WPRO)と共に箱根にて

重松逸造先生との出会い、疾病地図作り、川崎富作先生およびスモン鑑定団のこと等

簗輪眞澄

元国立保健医療科学院疫学部

いつかの忘年会で、重松逸造先生は「君達、大還暦とは何か知っているかね」とわれわれに質問しました。誰も自信を持って答えるものはいませんでした。重松先生は「2回目の還暦のことだ。数えて120歳ということだよ」。なるほど。そして先生は大還暦を目指しておられることを仄めかされました。先生の元気いっばいのところで、1日1万歩を歩き、毎日ラジオ体操の会に出ておられるとのことでしたから、みんなで拍手をしたものです。それなのに、白寿にもまだ間があるというのに幽冥相隔つことになったのは実に残念です。

重松逸造先生との出会い

ところで私が金沢大学出身であることを知るとしばしば「それじゃ、重松先生に公衆衛生学を習ったのですね」と聞かれました。金沢大学では、早い内から医学部の教授に親しませようと教養部で重松先生のクロード・ベルナールの「実験医学序説」を使った講義が行われましたが、公衆衛生学の講義は受けませんでした。先生はわれわれが学部の2年の春に国立公衆衛生院に移られ、公衆衛生学は加藤孝之先生の担当でした。

高校の頃は数学が苦手で、生物学と人文地理学が得意だった私は、医師になる気もなく医学部に入り、卒業したら解剖学教室に入りました。与えられた仕事は、神経髄鞘に単波長のX線を照射して回折波を測定し、それをフーリエ合成して神経髄鞘の電子密度分布を決めるというものでした。しかし、教授から示指された方法では解が定まらず、新しい方法を提案し、ようやく私なりの解が決まりました。

この間の教授との対話に辟易した私は大学を辞めることにし、教室の先輩であり、石川県松任保健所におられた西正美先生に相談し、3年半で大学を辞めました（昭和47年10月）。そして、保健所での行政のやり方とか統計や疫学の勉強を始めました。そして、やっと疫学の面白さに気がついたのです。

そして、昭和48年度の基礎課程の学生として4月から7月まで石川県から公衆衛生院に派遣され、重松先生や柳川洋先生達から疫学を基礎から学びました。更に、昭和49年9月から7か月間に再び公衆衛生院に派遣されて、専攻課程を修了したのです。この2回目にはむしろ衛生行政に関心を持ち、橋本正巳先生や西三郎先生の薫陶を受けました。昭和50年4月には輪島保健所長を命ぜられて緊張しましたが、西先生のお教えを受け、部下達も信頼してくれてなんとかこなしました。

輪島も3年目（昭和52年）になったある日、7月頃事務室で庶務課長と話をしていると重松先生から電話があり、どうも話題が人事のことになりそうなので、所長室に引っ込んで先生のお話を聞くことにしました。要するに「簗輪、お前は若いのに保健所長などになって高い給料を取っている。良くないことだ。安くしてやるから疫学部に来い」というお話でした。県としては渋りましたが、西正美先生のご助力もあったので、11月には疫学部慢性伝染病室に移ることになりました。

疾病地図作り

疫学部での初仕事は重松先生や安西定先生の下での区市町村別の疾病地図作りでした。

昭和 51 年 3 月の予算委員会で、新潟県青海町にクロロブレンの工場があり、ここではクロロブレンが工場から漏れているので肺がん死亡率が高いのではないかという質問が出ました。厚生省は死因別の死亡統計は都道府県単位の集計しかしていませんから、高いかどうかは分らないと答えざるを得ません。小地域単位の死因統計が必要とされたのです。また 1974 年には米国で郡単位のがん地図が出版されたこともきっかけとなったのでしょう。日本での作業は、まず 1969-74 年から始めましたが、主要なプログラムは柳川、福富和夫、川口毅の諸先生、それに統計情報部によってほぼ完成していました。私が加わってからの実戦部隊の戦士は、永井正規、榎本信雄、大村外志隆、橋本修二の諸先生と私でした。

刊行は上記の 6 年間の観察結果から始まり、脳卒中、心疾患、肺がん、肝がん、結核、肝硬変など 10 疾患が 3 回に分けて財団法人大和ヘルス財団から刊行されました。その後 1969-78 年に延長され、沖縄県の合併、全国各地の町村合併と分区に対応するためのプログラムの修正が行われました。この際には疾患の範囲が、全死因、がん（全がん、および 8 部位）、など 20 疾患に拡大されました。この分布図は財団法人健康づくり振興財団の事業として行われ、「全国市町村別主要疾患の分布図」として刊行されました。

地図作りの件の詳細はひとまずおいて、重松先生はわれわれの作業をじっと見つめていて下さいました。もちろん大切なことは重松先生が決められましたが、それらの事は主として刊行に関することでした。それまでの作業は、私にとっては楽しい毎日でした（かつての解剖学教室とは違って）。

川崎富作先生の事

このころ川崎先生が時々疫学部に見えられました。それもあの頃は珍しかった Kentucky Fried Chicken を携えて。御用が終わると部長室から声がかかり、ウイスキーが始まります。私達も御相伴です。そしてそれが終わると酔ったまま（それほど大量に飲んだわけではないでしょうが）、車を運転してお帰りになるのです。でも、事故を起こしたということは聞きませんでした。今なら出来かねることでしょう。

スモン鑑定団のこと

1979 年のスモン訴訟和解に伴って 6,000 人以上の原告が真にスモンであるか否かを判定する必要が生じました。私は良く事情も分からないままにその鑑定を手伝うように指示されました。重松先生が中心になり、祖父江逸郎先生を始めとするスモン研究班臨床分科会の先生方が集まって、原告側が準備した診断書等からスモンに間違いないかどうかを確認しあうのです。事務局側には川邊典子さんと石川澄子さんという女性がいて、必要な書類を次々と準備します。先生達は 2 班に分かれ、スモンに間違いないと考えられればそのように判断し、疑いが残れば全員で協議をし、それでも判断が付かない場合には患者に近い班員が自ら診察するというものでした。会場には公衆衛生院の近くの都ホテルの大きな会議室が使われました。夕方早くに始まったと記憶していますが、特徴は一旦始まったら、

予定されている鑑定を完全に済ませるというもので、記憶では午前 3 時になった事もありました。私はあまり役に立ったとは思いませんが、こういうこともありました。会議中に大韓航空機が樺太付近で行方不明になり、重松先生から「テレックスを見てこい」と言われて、1 階と会場を何回も往復したことが、役に立ったくらいでしょうか。こういう難事業を引き受けられた、重松先生と鑑定団の皆さんには敬服しています。

最後に

私は 10 年ほど前にがんのため胃の摘出を受けました。そしてその秋の疫学者の集まりの中で重松先生は、私を指さして「この蓑輪はがんで手術をしたんだぞ」と面白そうにおっしゃるのです。そんなことを面白そうに言うことはないじゃないか、と反発を感じたことがあります。でも後で反省してみると、重松先生達の世代は死を恐れない、そして何時でも死を受け入れることを訓練として身に着けていたということなのではないでしょうか。



海軍兵学校跡後で

1983 年。向かって左から、竹内和子さん、志毛ただ子先生、勅使河原香さん、蓑輪、奥様、飯島（現在は関沢）恵子さん、重松先生、大村一郎先生、大村外志隆先生。

「応援するから教授選に出ないか」

小田清一（千葉県病院局）

昭和51年に厚生省に入省するとすぐに国立公衆衛生院専攻課程へ1年間の研修に出されました。当時はこれが厚生技官のお定まりのコースということでした。大学を卒業してすぐに厚生省に入り、学生気分が全然抜けていないところにまた3か月の合同講義ということで正直辟易していました。

疫学部には初めから顔を出していましたが、それは入省直後に配属された統計情報部衛生統計課（こちらにも新人技官の定番コースの1つでした）に国立公衆衛生院の疫学部にも所属していた川口毅先生が課長補佐を兼任しておられたことによります。私が公衆衛生院に通い始めるとすぐに気さくな川口先生は重松逸造先生、柳川洋先生をはじめとする疫学部の先生方に紹介してくださいました。講義にはあまり出ませんでしたでしたが疫学部には毎日のように顔を出していました。

当時の衛生統計課長は安西定先生で、私が入省して2年目に先生が予算要求した PPBS 研究費がついて、胃がん健診や子宮がん検診の効果をマルコフ連鎖モデルで計量する研究を統計情報部と疫学部が共同で何年間か行いました。私もそのお手伝いをさせていただき、重松先生と安西先生の会合にはほとんど出席させていただき、末席を汚していました。

そんなこともあってか公衆衛生院に研究課程ができたときは真っ先に手を挙げました。重松先生が指導主任であったと思いますが、いい意味で放任であり、自由にやらせていただいたので、主体的に研究課題に取り組むことができ、気長に相当の時間をかけて修了することができました。行政において疫学的視点からの調査や政策分析をいくつか手掛けることができたのはこの頃の重松先生の寛大なご指導のおかげだと思っています。

その後も疫学部の会合や研究班の会合などに時々呼んでいただきましたが、ある時私の母校である横浜市大の公衆衛生学教室の教授選考に応援するから出ないかと声をかけてくださいました。これも、先生に指導されたように、行政の場においてもいろいろと調査研究した結果を論文として残しておくように心がけたことによるところ大かもしれません。当時私は厚生省の母子保健課長で、行政官としては一番面白かった時期でしたので、重松先生からのせっかくのお誘いでしたがお断りさせていただきました。あの時の重松先生の言葉は今でもはっきりと耳に残っています。



1980 年、重松先生が Participant として招待された WHO と ESCAP (United Nations Economic and Social Commission for Asia and the Pacific、アジア太平洋経済社会委員会) 共催、マニラ (WHO 西太平洋事務所) で開かれた国際会議に、私は Observer (聴取者) として連れて行って戴きました。

南アジアと東アジアの各国について、1950-1975 年の間、大戦後 30 年までの死亡の動向を確認しようという会議です。目的は死亡率観察の意義を確認し、死亡率の国際格差、国内格差に注目し、その格差と趨勢変化に対する社会、経済、政策の影響を検討する。それに加えてこの様な検討をするための方法上の問題点も議論し、今後の方針を提案するといった欲張ったものでもありました。(大まかに言って) 今はもう戦後 60 (65) 年、当時は戦後 30 (35) 年、随分時間は過ぎましたが、当時でも日本の死亡率改善の成果はめざましい、特異的なものでした。日本についての報告は誇らしいと思うと同時に (他がそうではないから) 申し訳ないような気分もありました。多くの国は死亡統計も十分でない、感染症、下痢が重大問題で、乳児死亡率が 100 以上あるいは不明という中での報告でした。(年齢調整) 死亡率の年次変化の図に、結核予防法の制定、BCG の普及、所得倍增政策、国民皆保険、がん検診・住民 (循環器) 検診普及などを書き入れる。これら多くの変数を使って (都道府県格差の) 回帰分析をするなどして、日本の死亡率改善の理由を説明することをめざした報告をしています (Itsuzo Shigematsu and Masaki Nagai: FACTORS ASSOCIATED WITH THE DECLINE OF MORTALITY IN JAPAN)。「しかしながら、本報告で観察した変数、使った方法には限界がある。この観点からの更なる研究が必要である」というのが最後の一文です (更なる研究、この 30 年にできただろうか?)。

今はもう違っているのでしょうか、マニラの町を歩くときは鞆は持たず折りたたみ傘を持って歩くのだ。雨が降るからではない、防衛だ。と教えていただき、町歩きをご一緒させていただきました。「会議の時のお前の態度がなってない (いねむりしていた)。」と厳しく叱責いただいたこと、有り難く、その後私の恥として心にとめております。

この会議の記録が次の標題の本 (全約 600 頁) として WHO から出版されました (きつともうどこからも手に入らないでしょう)。私の宝となっています。

MORTALITY IN SOUTH AND EAST ASIA : A REVIEW OF CHANGING TRENDS AND PATTERNS, 1950-1975 Report and Selected Papers presented at Joint WHO/ESCAP Meeting held in Manila, 1-5 December 1980

厳しくて優しい先生

石坂 正綱

重松先生のもとへ参りまして60有余年になります。

先日までお元気のことと思い、今年は何とかして囲む会を開きたいと考えていた矢先、先生の訃報を受け、なんとも悲しい気持ちで今も信じられません。60年と言えば本当に長い年月で、思い出もあまり多くて何を申し上げてよいのか、頭の中は一杯です。

中でも、昭和26・7年(1951・2年)頃、先生が若い発刺としていた時代の事です。お正月に先生のお宅に押しかけて、当時は食糧事情も厳しい時代もわきまえず、奥様のお料理をご馳走になることが、私たちの何よりの楽しみでした。

仕事の面では、長年にわたり結核撲滅運動の原動力となる埼玉県(旧)高坂村での住民健康調査活動です。この間、先生を始め東京大学結研の皆さん達と共に村役場の2階で布団を並べ、ごろ寝して頑張ったことなど、枚挙にいとまがありません。

日常の活動は厳しい指導のもとで、X線の利用、影像情報の改善向上、患者の医療被曝低減、放射線防護・管理の徹底等々、多くの調査研究を進めました。

それは大変厳しい仕事でしたが、一つ一つ完成した時の喜び、楽しさはまた格別の思いでした。これらの成果は、医療法施行規則の改正に当たり、放射線防護の項目中に条文として取り入られるようになりました。ただ、法規条文に関して、一部の方から遮蔽過剰であるという批判を受けました。然し、人に不必要な被曝を与えてはならない。医療被曝は出来る限り少なくしなければならないと言われた先生の教え、理念を大切に放射線防護・管理を重視して参りました。

『放射線は危険である。』これは私が先生から学んで得た信念です。その後、国際放射線防護委員会の勧告でも、技術者や一般人の被曝線量制限は次第に厳しくなり、施行規則の条令は誤りではないことが理解されてきた様です。

宇宙・地球環境を考える時、これからの放射線被曝は如何ともなりません。医療の場では患者への被曝線量限度の勧告はありません。その為、放射線医療に関わる医師や技術者は患者の被曝線量を出来る限り減少し、最高の診断結果を得る努力を心掛けています。

国際放射線防護委員会が勧告の中で、一般人の受ける線量限度を年間1mSvとしたのも、この精神を示したものと思います。そこで、総て放射線業務にたずさわるものは、自然環境の汚染を排除し、人に対する被曝を限りなく零に近づける努力を怠ってはなりません。

放影研では先生を中心に、微量被曝問題に関して、実に長い年月を積み重ね、本人はもとよりその子供や孫に至るまで影響や健康状態の調査研究がすすめられていると聞き及びます。私としては、影響が長く後の世代にまで及ぶことなく、安心して生活出来る成果が示されることを願って止みません。

60年余り公私にわたり大変なご交誼を頂いた思いは尽きるものではありません。先生はいつも若々しく元気で、席のあたたまる暇もない程ご多忙の中に私達をご指導下さいました。その先生とお別れしなければならない、これほど辛く悲しい事はありません。先生のお志を受け継ぐ人は後を絶たないでしょう。

本当にご多忙だった先生、どうかゆっくりとお休み下さい。 ご冥福をお祈り申し上げます。

合 掌



2006.3.28
目黒の中華レストランにて重松先生を囲む会

恩師重松逸造先生に感謝して

北海道大学大学院医学研究科社会医学専攻予防医学講座国際保健医学分野教授

玉城英彦

1978年9月、私はテキサス大学（ヒューストン）で学位取得後、就職の当てもないまま帰国しました。

幸いに、テキサス大学の先生（Dr Lew Roht）の関係でお知り合いになった、旧厚生省高原亮治先生が当時の国立公衆衛生院疫学部いらした重松逸造先生をご紹介くださり、お訪ねしました。重松先生とはまったく面識がありませんでした。

お会いした途端、「明日から研究室に出てきなさい」

この一言で私の運命が決まりました。日本にまったく基盤のない私にとって、涙がでるほど嬉しかったことを決して忘れることはできません。そして、これは、運命的な出会いというものと思いました。この出会いが私の人生の道筋となり、その一言が、挫けそうになって落ち込んでいる私を「正の回路」の入り口に連れて行ってくれました。その後もずっと温かいご指導をいただきました。

1980年10月1日付けで、重松先生のお陰で、熊本県水俣市にある環境省国立水俣病研究センター疫学部に就職しました。もし先生の推薦がなかったとすれば、私の人生行路はまったく違った方向に行っていたでしょう。この研究所にも、重松先生はたびたび訪問され、公私ともどもご指導賜りました。

そして1980年11月22日の私たちの結婚式では、仲人として、門出を祝ってくださいました。

1985年3月にスイス・ジュネーブ（WHO）に異動後も、ジュネーブを頻繁に訪問していただきご指導をいただきました。私たちの自宅にもよく訪ねてこられ、時にはご夫婦で来くださり、きびしい異国生活の中で、とても元気づけられました。重松先生との会食はいつも楽しく、たくさんパワーをもらいました。

父親を持たない私にとっては、重松先生はまさに父親代わりでした。重松先生からいただいた、いろいろな励ましのお言葉やご指導は私の人生の貴重な財産として、これからもずっと大切にしていきます。また、重松先生は、私たち家族をずっと見守ってくださること、確信しております。

先生は昨年（2011年）1月21日、日本疫学学会総会のお忙しい中、私たちの札幌の家を訪ねて来てくださいました。大勢の若者を引き連れての来訪に、女房も大喜びでした。大変お元気で、相変わらずダンディで、いつもの「重松節」が健在でした。勿論、宴会も例の通り盛り上がりしました。楽しいひとときを、重松先生はとても喜んでくださいました【写真】。



その時、それが最後のお別れになるとはまったく予想していませんでした。重松先生、長い間、たくさんのご指導をいただき、そして、私の家族を励まし続けてくださり、本当に心から感謝を申し上げます。また、重松先生のご冥福を衷心からお祈りいたします。

Political Epidemiology

日本公衆衛生学会 理事長
大井田隆

(日本大学医学部公衆衛生学分野教授)

いつ、どこで聞いたか忘れてしまいましたが、重松逸造先生の学問体系は **Political Epidemiology** と聞いたことがありまして、その表現に妙に感心したものでした。重松逸造先生は厚生労働省や環境省の重要な政策にいつも疫学者と公衆衛生政策の専門家の両面から係わっておられました（係わるというよりも取り仕切っていたような気がします）。私が重松逸造先生と仕事上でお付き合いさせていただいたのは、今から 30 年前のまだ 20 歳代の頃で、環境庁環境保健部保健調査室（当時）にカドミウムの健康被害の担当官として勤務した時からだと思います。当時はカドミウムによる認定に新しい病理所見のどう評価するかを巡って、賛否両論の激しい議論がありました。それを評価する委員会で、重松逸造先生は座長を務められ、賛成者からも反対者からもじっくり意見を聞き実に貫録ある座長でした。環境庁側は早く結論を出してほしいものですから、座長に早急な審議をお願いしておりましたがそのようなことは気にもせずにじっくりと構えていたことが印象に残ります。

その後、厚生省薬務局（当時）に異動した時に、局には薬剤師さんが多くおりまして、その人たちから「スモン病の認定に関して、ほとんどの申請者を重松逸造は病氣と認めた。これは科学的ではないのではないか？」と疑問を呈せられましたが、後日そのことを重松逸造先生に申しますと「何を言うか、厚生省を救ったのだ。そうでもしなければ今もスモン病のことで厚生省は大変だった。」と言われました。その時は確かに科学的ではないかと未熟な私は思ったものですが、月日が流れこの年になりますと多少なりとも「清濁併せ飲む」という考え方も解るようになりました。このように重松逸造先生の体を張って公衆衛生的な問題を解決する姿は今でも目に焼き付いております。

平成 8 年、病原性大腸菌 O-157 の大阪府堺市における流行の原因解明に当たっては日本公衆衛生学会の理事長として厚生省の幹部とともに記者会見をし、テレビのニュース番組で「95%、原因はカイワレ大根に間違いがない」と言われたことは実にうまい表現だと感心していました。かつて厚生省内で「日本人はリスクという意味が解らない」あるいは「確率ということが理解できない」と言われていましたが、95%という言い方に疫学の何かを日本人に納得させるためになかなか味わい深い表現をされていると思いました。その後のいわゆる「カイワレ判決」に対して、裁判官の判断に疫学的な考察がなかったとの批判は大疫学者としての真髄を発揮しているような気がいたします。

私事で申し訳ございませんが、平成 22 年 10 月に日本公衆衛生学会を学会長として開催し、学会長講演をさせていただきました。その講演の中で公衆衛生学とは「疫学半分、政策半分」と申し上げました。つまり、住民の健康問題に対しては疫学をもってその要因を明らかにし、政府あるいは自治体による政策で解決を図るということで、当たり前といえば当たり前のですが、その源流は重松逸造先生から厚生技官の頃に学んだ **Political Epidemiology** だと思っています。

昨年、縁あって重松逸造先生の 5 代後の日本公衆衛生学会理事長に就任させていただきましたが、その直前に日本公衆衛生学会全評議員 300 人の約 6 割の方に「日本公衆衛生学会に何を望むか」という質問を遠回しに聞いてみました。その多くが日本公衆衛生雑誌を国際誌にすることやインパクトファクターが付く雑誌にしたいといった学術的なことよりも特定健診・特定保健指導を今後どのようにすべきか、あるいは地域保健における保健師をどのように育てるかといった政策的なことに大変興味があつたと記憶しております。今後、日本公衆衛生学会理事長として前述しましたように住民の健康問題に対しては疫学をもってその要因を明らかにし、政府あるいは自治体による政策で解決を図るという重松逸造先生からの教ををささやかながら守っていきたいと考えております。重松逸造先生、大変ありがとうございました。

重松逸造先生と国立公衆衛生院疫学部忘年会の思い出

土井 由利子

国立保健医療科学院統括研究官

重松先生にお会いしたのは、私が国立公衆衛生院疫学部に研究員として採用された平成7年の12月、当時の疫学部の忘年会でした。この疫学部恒例の忘年会は、重松先生をはじめ、退職・異動された先生方や秘書の方々や研究補助の方々、課程・コースを修了した方々がみえられ、当時の現職の私たちスタッフに、課程の研修生も加わり、都ホテルの会場が一杯になるほど盛大なものでした。いつも、重松先生は定刻より少し早くおみえになり、好きなお酒を召し上がっていて、英国紳士風にグラスを傾け、にこやかな笑顔で皆を迎えて下さいました。奥様のお見立てかと思いますが、ダンディな装いがとてもお似合いました。忘年会の幕は、このように、和やかで楽しい雰囲気の中で開くのが常でした。

忘年会では、参加した一人一人が、皆さんの前で、その年を振り返り来年に向けての抱負を語る、スピーチがあります。研究や仕事のこと、趣味や旅行のこと、子どもの誕生・成長や進学・就職・結婚のこと、転居や新居のこと、病気や怪我や介護や死別のこと、等々・・・皆がそれぞれの来し方行く末に耳を傾け、その年を締めくくりました。このようにして、重松先生とともに、それぞれが一年一年を積み重ねてきたのです。

ある年のこと。受付係をしていた方が、会場を出入りしていたために、順番が回ってこないまま、この恒例の全員スピーチが終わって会が次へ進行しようとしていた矢先、重松先生が大らかな口調で「〇〇さんのスピーチを聞いていない」とおっしゃって受付の労をねぎらわれ、そのお陰で、その方もスピーチをすることができ、全員スピーチが無事に終わったということがありました。その方は、大変恐縮しておられましたが、さぞや嬉しかったことと思います。その時、重松先生の俯瞰的な観察力と全員への細やかな配慮に心打たれたことが、今でも鮮やかに蘇ります。そして、この出来事を、重松先生が体現された「疫学の真髄（精神）」と私なりの解釈をして、深く肝に銘じています。

今年の忘年会のことを言うのは、気が早いと思いますが、重松先生は、きっと、天国から、いつものように、ダンディな装いで、グラスを片手に、にこにこしながら、私たちのスピーチに耳を傾けて下さることでしょう。でも、本当は、もっと長生きして頂きたかったです。

最後になりましたが、重松先生、長きにわたり、お導き下さり、本当にありがとうございました。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。合掌。

重松逸造先生に初めて会ったとき

千代田区千代田保健所

秋澤より子

何を書いたらいいのか途方にくれます。あんなにお元気でいらしたのに。にこにこしながら紹興酒をお飲みになっている姿が目に浮かびます。

初めて重松逸造先生にお目にかかったのは、たぶん昭和59年、私が国立公衆衛生院専攻課程の学生で疫学部に出入りしていた28年前のことです。重松先生は時々、簗輪眞澄先生のところにいらっしゃっていました。重松先生は、簗輪先生とのやりとりの中で「無駄なものは何一つないんだ。必ず何かの役に立つ。」とおっしゃられたことをよく覚えています。私が国立公衆衛生院に入った昭和59年には、既に重松先生の講義はありませんでした。私は、管理栄養士養成施設で学ぶことができなかった疫学を勉強したかったので、もう少し早く国立公衆衛生院に入っていたら、重松逸造先生の疫学の講義を受けることができたのにとその時残念に思いました。

簗輪先生が重松先生に私の研究論文の感想を聞く場面があり、重松先生は私ごときの学生にも目を向けてくださったことが驚きでした。

重松逸造先生の疫学は、志毛ただ子先生、柳川洋先生、簗輪眞澄先生、中村好一先生の疫学の中に溶け込んでいるように思います。重松先生から直接の疫学の講義は受けられませんでした。重松先生の教えを受け継がれている先生方から多大なご指導を受けることができたことを大変感謝しています。

重松先生の声は太く、偉大な研究者のオーラを漂わせる風格がありました。また、女性に優しく、周囲の人々全員にさりげなく気を配る上品な先生でした。様々な会でのお話がとてもおもしろく、毎回楽しい気分になりました。いつも元気をもらっていました。最近では、国立公衆衛生院疫学部OB忘年会でお会いするのが楽しみでした。最後にお会いしたのは、平成22年12月16日です。大変お元気で、毎朝ラジオ体操に行っているとおっしゃっていました。

私が重松逸造先生の業績を初めて明確に意識したのは、大学院が終わってその後の就職に困っていた時たまたま縁があり、国立公衆衛生院疫学部の研究員としての採用のための面接に向かう飛行機で読んだ「疫学とは何か―原因を追及する科学（講談社ブルーバックス、1977 年）」でした。それまで全く異なる分野の研究をしていた私にとっては、とても分かりやすい疫学の入門書であり、疫学に取り組んでみたいと興味が湧いてくるような、今でも心に残っている本でした。先生が取り扱われるテーマも先見性があり、原因不明疾患、環境汚染、放射線等、まさに現代の健康問題につながるものばかりでした。その本のお陰もあり、1990 年から疫学部の一員に入ってもらいました。当時は、公衆衛生院疫学部がどれほど重要な位置づけのところなのか知らずに働き始めましたが、重松先生の業績や果たしてこられた役割等を学ぶにつれ徐々にわかってきました。

疫学部での初めての仕事は忘れられません。1990 年に勲二等瑞宝章を受章されたときの祝賀会の案内の振り込み用紙をデータベースの名簿情報を枠にきっちり入るように連続紙に印刷するプログラムを 2・3 カ月もかかって作ったことです。当時は重松先生には数回お会いしただけでよくわからないまま、何度も何度も失敗を繰り返して作ったのを思い出します。印刷の際に、関係者の多さと数々の著名人との交流の多さに驚いたのを覚えています。そのお陰で不慣れだったパソコンやソフトウェアの使い方が身につきました。その後もたびたびいろいろな機会にお会いする際にも、ちゃんと名前を覚えていただき、声をかけて激励していただいたことはとても心に残っています。孫弟子とも言えないような私を含め、多くの関係者の名前を覚えておられ、温かいお言葉をかけて、激励される姿には毎回感謝の念を禁じ得ませんでした。

現在、私は大学で医学生の教育に携わり疫学も教えていますが、今の立場でなおさら重松先生の偉大さを感じるのは、金沢大学の公衆衛生学教授でおられたわずか 5 年位の間にその後のわが国の疫学や公衆衛生学を背負ってたつ多くの教授方を育てられた点です。大学に卒業生に残ってもらうこと、さらには衛生、公衆衛生分野に入ってもらうのがいかに大変なことか、今になって身にしみてわかります。どうしたらそのような若き医学生の人生の選択に多大な影響力を与えられたのか、とても不思議でいつかは質問したこともあったのかもしれません。いまだにその域には遥かに及ばない自分の姿を認識するにつけ、先生の偉大さ、カリスマ性には驚嘆いたします。

さらに、自分自身との因縁を感じるのは重松先生が亡くなられた日が、私が高校 2 年の時に亡くなった父と同じ日であったことです。この日はますます生涯忘れられない日になりそうです。いままで、いろいろな場面で私たちを導いていただき、本当にありがとうございました。ご冥福をお祈り申し上げます。

重松逸造先生に聞きそこなったこと

里見宏（元公衆衛生院疫学部客員研究員、健康情報研究センター代表）

国立公衆衛生院疫学部に専門課程・研究課程・客員研究員として出入りするようになって30年近くになります。暮れの忘年会や国際会議で会えば重松先生から声をかけていただいていた。先生はすでに疫学部から広島放射線影響研究所に移っておられて直接指導は受けたことはありません。でも、広島に来たら顔を出せと言うので本当にお訪ねしました。当時、重松先生のそばで仕事をしていた方の娘さんがフジテレビの御曹司に嫁がれ話題になっていたのですが、そのときの話や放影研の話、そして所内の案内までしていただきました。これというのも、私の義父（高橋暁正といいます）が東大医学部の同級生だったからだと思っています。重松先生と義父は晩年方向性に違いがあったようですが、同窓会などで会うと「重松は年をとらないな。私も長生きしているが、どっちが長生きするかな」などと話していました。その義父が86歳で他界したとき、重松先生から「高橋暁正とは学生時代に会社から頼まれて2人で原稿書きをしてよい収入があった」とか、「公衆衛生院の統計学部長の話もあったが・・・」など私たちが知らない義父の話を聞かされました。また、重松先生より最初で最後の謎が残るお手紙もいただきました。重松先生の義父への手向けとしてありがたく思ったことを覚えております。

もう一つ、2000年にスパイス協会が野菜を含むスパイス94種類に放射線照射を認めるよう厚労省に要請しました。これをあと押しする形で2006年には原子力委員会が厚労省に照射食品を認可するよう通知をしました。

私は照射食品の検知法の開発という仕事をしていたことがあって、照射された食品中に多くの化学物質ができ、安全性に問題があるということで食品への照射に反対していました。もともと食品衛生法は食品への放射線照射を禁じています。しかし、国民に原子力を身近に感じさせるために「照射食品」の推進が進められていたのです。しかし、隠れてベビーフードに照射するという事件が起き、このとき義父も私も検察側の証人になってほしいという依頼を受け、義父が出廷し照射食品の問題点を述べました。関係した2社には有罪判決が下りました。こうして照射食品の推進は止まったように見えたのですが、原子力委員会はほとぼりの冷めるのをまち照射食品の推進を始めたのです。

その頃、重松先生は放射線の世界で重要な立場になっていらっしゃいました。照射食品の反対運動の話をどこかで聞かれていたのでしょうか。重松先生に「お前らしいのう」とひと声かけられました。これは「好きなだけやってみろ」という重松先生一流の励ましと理解させていただきました。

原子力委員会・食品照射専門部会の委員が許可に向けてのシナリオの一端を自著に書いています。そこには厚労省の審議より先に食品安全委員会が安全審議をして外堀を埋めてから、厚生省に照射食品を認可させるという流れが作られていました。この流れになると国策に逆らうことは大変難しい状態になってしまいます。このとき食品安全委員会の委員をなさっていた疫学の大先輩の先生に資料をお送りし相談したところ、わざわざ食品安全委員会に出向いて、食品安全委員会は厚労省の諮問を待ってから審議するという道筋をつけていただきました。この先生が労をとってくださったのも、重松先生が疫学の世界で築

いた信頼があつてのことと今も感謝しております。

いろいろ経緯はありますが、最終的に厚労省は2010年5月、「(照射によりできるシクロブタノン類の発ガン性を否定するデータがないことについて)科学的知見が不足している」「(照射食品のニーズについて)国民との相互理解がない」と審議にかけうる条件が整っていない旨の通知を原子力委員会に返しました。疑問は40年前に法で禁止されているにもかかわらず照射ジャガイモを許可した厚労省が照射食品を許可する状況にはないという判断に舵を切ったことです。この背景には大きな力があつたように感じています。重松先生にお聞きしようと思っていたのですが、もうその真偽は私があの世に行つて直に重松先生にお聞きする以外に手はなさそうです。

重松先生のご冥福をお祈りいたします。



恒例の疫学部忘年会。全員写真終了後の女性人との別枠の記念写真。

重松先生はオシャレで白いソックスで足元が一人目立っています。

重松先生の左に歴代の旗野脩一部長、その左が簗輪真澄部長。筆者は後列左から3人目

そちらの美味しい酒は見つかりましたか

砂屋敷 忠

(診療放射線技師 元国立公衆衛生院 元広島大学)

この 2・3 年、お会いできる機会を逃してしまいましたので、随分久しぶりのように思います。先生に始めてお会いしたのは、1956（昭和 31 年）ですから、50 数年前になります。私が X 線技師学校を卒業し、就職試験の面接試験を受けたのが最初でした。幸いにも採用内定をいただき、国家試験合格まで無給という条件ではありましたが、就職難の当時、国立の研究所に勤務できる嬉しさは何物にも代えがたいものでした。新進気鋭の疫学研究者、重松先生はすこし怖い存在でした。私の所属する仕事場は、院内や集団健診での X 線撮影などを担当する「エックス線室」で、結核対策の効率化を担当しておられた重松先生の研究の一部を補助していました。在職先輩は石坂正綱、遠藤幸一氏、前任者は竹腰昭氏で新人教育をしていただきました。重松先生や先輩には後々まで何かに付けお世話になりました。

公衆衛生院時代に全国保健所のエックス線写真評価が何年かに亘り行われ、当時の保健所エックス線写真のレベルが一気に向上しました。重松先生を始め、関係者の発想と実践の様子は、私には、研究成果の社会实践として記憶に残ることです。この考え方や手法は今日の「マンモグラフィ（乳房健診）」精度向上の活動として、がん検診の進歩に引き継がれていると思います。1962 年、重松先生は金沢大学へ教授として赴任されましたが、偶然ですが私も同時期、郷里の広島に帰ることになりました。6 年間、指導いただいた先生とのお別れでした。

東京時代は戦後の混乱も残っており、ご一緒のお酒の席はごく限られていましたが、臨地演習先で差し入れされたお酒、個人宛には少量でしたが美味しくいただきました。

広島では大学の原爆放射能医学研究所（現…医科学研究所）に勤務、放射線の影響研究のための、各種放射線源の運転や管理、研究資料の X 線写真撮影などを担当しました。黒い雨降雨地域や環境中の放射性セシウムの測定も行いました。

後に、重松先生が放射線影響研究所（放影研）においてになろうとは思っても及びませんでした。1981 年から 16 年間、先生がなさったことは、市民と放影研を強く結びつけたと思っています。大学の業務と関係する出来事も沢山ありましたが、なかでも被爆者個々人の被曝線量算出のためのシステム（線量体系）を改善されたことは印象的な事柄です。

直接お役に立つようなお手伝いは出来ませんでした。時折、飲み屋さんで一緒することもあり、お酒や飲み方のノウハウを伝授いただきました。

私は医学部や歯学部附属病院勤務を経て、県立保健福祉短期大学（現県立広島大学保健福祉学部）に移りました。東京にお帰りになった先生を短大の客員教授でお迎えし、短大全学生を対象に、疫学の講義をお願いしましたが楽しい講義内容であったことを思い出します。

最近 10 年ほどは東京で数名の方と、年 1 回程度、飲み会をもって先生の「うんちく」に耳を傾けていました。

私が今日まで放射線技術学を続けられたのは、社会人になった最初に、先生の考え方が充満した雰囲気職場でお世話になったことかと思っています。

先生、本当にいろいろな事でお世話になり、ありがとうございました。そちらに伺いました折は、再度お酒をご一緒したいのでよろしく願いいたします。

わが師 重松逸造先生の思い出

元国立公衆衛生院疫学部長 篠野脩一

重松逸造先生と初めてお会いしたのは、「脳卒中の臨床専門家で疫学の素養ある者」という資格で、臨床を離れて1967年4月からWHOの心血管病課に勤務することになった時、疫学の無知を埋めるべく、公衆衛生院疫学部に先生をお訪ねした時である。一冊のご本を頂いた。それは広島放影研で、米国NIHから派遣された研究主任、矢野勝彦先生が、当時我が国の脳卒中の臨床医学の権威であった沖中重雄先生、上田英雄先生をお招きして、日米合同シンポジウムを開かれた際の記録であった。疫学とは何か？どんな方法で、何を明らかにしようとしているのか？米国NIHの国際共同研究、通称「Ni-Hon-San研究」で放影研が担当した研究成果供覧であり、大先生方への講義であり、疫学は、集団における脳卒中、心疾患の発生要因の分析から、その原因を明らかにし、効果的な予防法や対策を生み出す源泉となる医学の専門分野で、広島原爆被爆者を含む大規模な人口集団の追跡調査が貴重なデータを提供できること、臨床家にもこの知識は有用であり、日本の医療政策策定にも貢献することを示された、見事な脳卒中の疫学研究案内書であった。私のジュネーブでの新職務の出発点で大いに役立った、適切なご援助であったと感謝している。後に東京で、WHO主催で「脳卒中の疫学と対策に関する国際セミナー」を計画した時も、先生には費用捻出に大変お世話になった。先生は、国際的活動の重要性和日本の疫学研究のレベルアップを何時も意識して居られ、直接教えを受けたことが無い私のような傍系者でも、本気で応援して頂ける、頼りがいある親分であった。

厚生省が循環器疾患の専門家とのパイプが無くて困っていた当時、東大第二内科の小林太刀夫先生が日本循環器管理研究協議会（日循協 今は日本循環器予防学会と改称）を創設され、伊藤良雄先生に循環器臨床家の組織作りを委嘱された時、公衆衛生専門家の重松先生は臨床専門家の伊藤先生と連携して指導部となって、日循協を舞台に、循環器疾患の臨床家に疫学研究の面白さを教え、正確な調査記録の重要性や利用法を指導され、厚生省が必要とする資料を集め、分析し、全国の大学医学部、病院の臨床家に循環器疾患の疫学を普及し、保健所の職員には臨床知識を高め、臨床医学と予防医学（保健学）の連携を高めるための実地教育、研究の司令塔としての役割を長期に亘って果たされた。公衆衛生院という国の公衆衛生教育研修の中心らしい貢献であったが、臨床の大家達に、伊藤先生の右腕として助言して班員から信頼された。我が国の循環器疾患の疫学揺籃期に全国の臨床専門医を積極的に日循協に参加させて、臨床と疫学の連携、地域における循環器疾患予防作戦の実践と評価に尽くされたご功績を忘れてはならない。

先生が研究班長である研究班の会議などで、全国から参加した班員には必ず一席を設けてもてなされた。会議で疲れた班員同士がくつろいで語り合う良い機会であった。今は公費濫用の悪習と目され、宴席はすべて廃止されて居るが、班員相互の親睦や協力強化に極めて有用であった。先生のお心づくしが嬉しかった。臨床医学の学会では製薬会社スポンサーのランチョンセミナーやイーブニングセミナーとして続き、歓迎されて居る。

先生は戦争中海軍軍医として軽巡洋艦の乗員であった。そのこぼれ話に、艦長の考え方が乗員の運命を定める。命令に従って最前線に突っ込めば容易に捕捉され撃沈されるのがオチであった。そのような指令に従わず逃げて回って乗員一人も戦死させなかった艦長の下だから生還できたと言われた。尽忠の「愛国者」ではないが、良識ある指揮官の下で運

が良かった。(因みに日循協の相棒、伊藤先生は、敗残兵を率いて熱帯ビルマのジャングルを敗走するインパール作戦で散々ご苦労された。) 最前線のラバウル基地から、陥落寸前に引き揚げ船が着いて、優秀な人材を温存するために少数を選抜して連れ帰ることになった。選ばれて帰れる連中は嬉しさを隠せず別れたが、この人たちは途中で潜水艦に襲われて全員戦死した。二流と目された連中以下が生き延びた。明治維新でも一流の指導者は殺されて二流が生き延びて偉くなったと冗談めかして言われたりしたが、他の偉い先生が言わないそんな下世話なお話が耳に残っている。先生はバランス感覚に優れ、現実の世渡りの知恵にも長けた方であった。だから、SMON、「イタイイタイ病」など、いわゆる公害病や薬害病等について、官、民、被害者の主張や法律、経済、賠償、医療費負担、裁判など各組織や各人各様に利害が絡み合い、学者が手を出したくない難問の主任研究者を委嘱されることが多かった。先生は、こうした問題に当たって、犠牲者や scapegoat を出さないように、気を配られたように思う。調停者のような立場は、どちら側からも疑われたり、恨まれたりする危険があるが、先生は病因の追及には、あくまでも学問的な公正を保ち、科学的に解明する立場を崩さず、研究者として綿密に検証された。しかし人を「追いつめてはいけない。」と言われた。その原因、さらにその原因、と突き詰めていくと誰かが責任者と目されて終わる。警察は犯人を上げないと業績にならない。医療過誤裁判はシステムの不備には目をつぶって医療者個人の責任とする傾向が強い。これによって医師は防衛医療に傾き、危険なことには手を出さなくなる。医療衰退の有力な原因の一つになって居る。医師は、成功より失敗から学ぶことが多いのである。先生は、厚生省からも頼られ、学者仲間からも尊敬され、被害者側からも公正な学者と信用された。人情の機微をよく心得た指導者であったと感服している。私が先生のお傍について学ばれたことの一つである。

先生は、国際会議でも、型苦しい挨拶抜きで相手と親しくなってしまう、ウィットに富む達人であった。老化の研究でハワイにご一緒した時、初対面の米国の老年学の長老指導者の一人が先生を「子どもの頃からガキ大将だったのだろうな」と評した。疫学部の懇親会でも、先生は、新人にすぐ遠慮なく声を掛けられる。何時も親しげな笑みを浮かべつつ冗談のように、誰彼の別なくからかわれる。その言葉には毒が無くて愛情、親密さが感じられて、お声がかかれば嬉しく聞ける。座を賑わせ、弾ませるこのサービス精神は先生の独壇場。真似したくても誰にでもできることではない。後輩の彼や彼女のために何か応援できることは無いかと何時でもお考えなのではあるまいか？ 有望な研究者を見つけると応援を惜しまない。WHO の国際脳卒中登録プロジェクト（地域住民を対象集団とした比較研究）でも例外な職業集団である国鉄（今の JR）を飛び入りで推薦されて福田安平先生らの疫学業績を国際的に紹介された。川崎富作先生が発見された「川崎病」などはとくに先生のご推挽によって国際的に知られるに至った新疾患であった。

原発汚染の深刻さ、国の対策の遅れ、東電のデータ隠し、被災地の医師不足等が問題になっている。「重松先生ならどう対応されただろうか？」と何時も思う。公衆衛生学、疫学の大家、研究組織活性化の名人、賑やかで楽しい雰囲気づくりの先輩としての先生に忽然と逝かれて、力を落とされた方は私の他にも多いと思う。身辺に大穴が空いた気持ちである。でも先生ご自身は久しく取れなかった休暇がようやくあの世で取れてほっと一息ついて居られる所かもしれない。これまでの変わらないご支援に心から感謝申し上げ、謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げます。 合掌。

平成 24 年 3 月 30 日

記者として学んだこと

中国新聞客員論説委員／広島大学病院特命広報・調査担当役
山内 雅弥（やまうち・まさや）

広島市街を見下ろす比治山にある放射線影響研究所。理事長だった重松逸造先生を取材にうかがうようになったのは、旧ソ連チェルノブリ原発事故から4年後の1990年ごろだったと記憶しています。

事故で大量に飛散した放射性物質による健康への影響を確かめるために、ソ連政府の依頼を受けた国際原子力機関(IAEA)をはじめ、各国の専門家グループや市民団体などが続々と現地に入っていた時期でした。

「小児のがんや白血病、先天異常が事故後に増加している」といったセンセーショナルな情報が、ウクライナやベラルーシの医療関係者、各国のマスメディア、反原発団体などを通じてあふれていたころです。1991年には原爆被爆者のがんに詳しい広島の甲状腺専門医は現地で子どもたちを検診し、甲状腺のがんや異常が多く見られることを報告しました。

これに対し重松先生が委員長を務めたIAEA国際諮問委員会はこの年、「潜在的な健康上の影響に関する全ての疑問が解消されたわけではない」としながらも「放射線被ばくに直接起因するとみられる健康障害は見られなかった」との調査結果を発表しました。日本のマスメディアからも「過小評価ではないか」「政治的な結論」などと批判が相次いだことは周知の通りです。

当時、医療専門家と同行して被災地の現状を目の当たりにした私もIAEAの調査結果には首をかしげざるを得ませんでした。このような評価が裏二つに分かれる問題こそ、冷静で科学的な議論と市民への説明が求められるのではないか。「IAEA報告評価分かれるヒロシマの専門家や医師ら」という見出しで解説記事を中国新聞に書いたのも、そんな思いからだったように思います。

こうした中、激しいバッシングにさらされながらも、重松先生が動じるふうはありませんでした。2011年3月11日に起きた福島第1原発事故をめぐっても、同じようなバッシングが横行しています。被災地などの住民の間に「放射線パニック」とでも呼ぶべき不安が広がっている姿を、重松先生はどう見られていたのでしょうか。

先生にはこんなエピソードもあります。1970年代初め、広島県の島嶼部で骨関節結核が集団発生しました。「保健所が的確な予防措置を怠った」として患者と遺族が国と県を相手に起こした裁判の控訴審で、重松先生は原告側証人として法廷に立ちました。1990年のことです。発生直後に追跡調査をしなかった行政側の対応のまずさを指摘した—と中国新聞に報じられています。疫学の専門家としての矜持を見る思いでした。

はるか40年近くも前の私事で恐縮ですが、東京大学保健学科の学生だったころに疫学の手ほどきをしていただいたのは山本俊一、前田和甫の両先生でした。授業もろくに出ていないくせに、生意気にも「スモン」をテーマに自主ゼミを企画したこともありました。スモンをはじめ幾多の公害や薬害の疫学研究班の責任者を歴任されたのが重松先生でした。今更ながら、ご縁に思いを致しております。

記者時代、先生には気さくに声をかけていただきました。古武士のような気骨と共にユーモアや気配りも忘れない、そんなお人柄が今も目に浮かびます。いつか東京のご自宅を訪ねて戦後の公衆衛生行政や疫学の歩みをじっくりお聞きしたい—という願いは叶わぬこととなってしまいました。

「ただ可能性だけで論じてもらっては困るので、蓋然性にもとづいて予防対策上チェックすべき要因を指摘するのが疫学の態度ということである」。講談社ブルーバックスの1冊として書かれた著書「疫学とはなにか」（1977）にある一節です。ジャーナリズムにも共通する態度といえるのではないのでしょうか。先生の言葉を心に刻みつつ歩んでまいります。（了）

評伝 重松逸造さん

(27面 関連)

ややハスキーな声に、を熟っぽく語ってもら
自信があふれていた。 った。

落ち着いて遠ぶ言葉の 長尺の記事になった
端々から、科学者の信 が、思いのほか短時間
念が伝わってきた。

重松逸造さんに初め
てインタビューしたの
はもう20年ほど前。放
射線影響研究所（放影
研、広島市南区）の理
事長として脂が乗りき
ったころだ。

ヒロシマの被爆者医
療の蓄積をチエルノフ
イリ原発事故の被災者
支援に生かす。使命感
酒席を愛し、よくし

やべり、笑った。仕事も無理はない。融通が
を離れると、つくづく 利かない人だ。
豪胆な人でもあった。 チエルノフイリ事故
病気の発生状況を統 の5年後、国際原子力
計的に明らかにし、原 機関（IAEA）の現
因を探る疫学の専門家 地調査に加わり「住民
である。こつこつと積 の健康への直接影響は
やべり、笑った。仕事も無理はない。融通が
を離れると、つくづく 利かない人だ。
豪胆な人でもあった。 チエルノフイリ事故
病気の発生状況を統 の5年後、国際原子力
計的に明らかにし、原 機関（IAEA）の現
因を探る疫学の専門家 地調査に加わり「住民
である。こつこつと積 の健康への直接影響は

チエルノフ支援に使命感

科学者の信念時に迷いも

でまとめることができ
た。理路整然と考え
よむとなく語る重松さ
んのすゝみを思い知ら
された気がする。

密さを貫けば、しばし
は批判的にされるの 声が上がった。
相次ぎ批判されたこ
限界を自ら認めるを（論説主幹・江種則貴）

救済されるべきだ」
同僚記者が2年前、
原爆投下直後の「黒い
雨」の健康影響につい
て話を聞いた時も「科
学の判断とは別に、行
政としての救済が必要
だ」と言い切った。

長年追究しても解明
しきれない放射線被害
が、疫学の道に生きた
一人の科学者の信念だ
ったに違いない。

下下処分が司法の場
で、科学が持つ
たに違いない。

私が一番古い弟子です

志毛ただ子 元千代田区神田保健所長

先生とはじめてお会いしたのは 1957 年です。その頃、私は埼玉県所沢保健所に勤務していました。

当時の所長春日斉先生(後に東海大教授)が調査、研究に熱心で大学や公衆衛生院とも協力して、すでに疫学部の平山雄先生が所沢保健所管内でがん罹病率の疫学調査を実施していました。ついで重松先生から、所沢市富岡地区で以前に実施した農村結核の疫学調査を継続したいと申し出があり、まず 1957 年の春に地区住民の結核健診が開始され、その後数年継続されました。その時所長の命令で私がお手伝いすることになったのが先生との出会いです。

重松先生は健診現場に毎日いらして独特の雰囲気職員皆をすっかり魅了してしまいました。当時の保健所には常勤医師も数人いて、私は所長から必要なら毎日でも公衆衛生院疫学部に通って手伝えといわれ資料の整理や集計などまるで大学の公衆衛生教室にいるような毎日で公衆衛生の面白さを教えられました。その後重松先生が金沢大学に行かれるので、私もついて行っちゃいました。先生が疫学部に戻られたので私も一時期疫学部に席を置きましたが後に私は東京都の保健所に移りました。

その後も直接、間接に先生のご指導を受け、また先生のもとに集まった多くの弟子の方々が保健所現場を応援していただき私の長い人生の中で先生には本当にお世話になりました。

先生いろいろありがとうございました。



1957. 4 富岡村検診の現場、アサヒクリニックカーの前で。当時の所沢保健所職員、東大結核研究会のOBなど

重松先生 有り難う

窪木外造
金沢重松会

重松先生が金沢大学医学部公衆衛生学教授に就任されて、学生の公衆衛生学実習に大學周辺の一般家庭を対象にした家庭健康管理を実施されていました。私は、この内容に興味を持って、昭和 38 年 4 月に金沢大学大学院の公衆衛生学に入学したのが、重松先生の門下生になったはじめです。この家庭健康管理は、こども、老人を含む家庭について、学生による簡単な健康診断と定期的な家庭訪問で健康調査・健康相談を行うもので、学生と接触出来てとても楽しいものでした。

また、毎年夏休み期間に、福井県芦原町、金津保健所、公衆衛生学教室との共同で、3 泊 4 日の住民総合健康診断に参加して、健康調査をしました。当時、あまり普及していない、心電図、眼底検査、肝機能検査、胸部間接撮影を成人全員に実施しました。その後、脳卒中発生等の追跡も行いました。夜は、みな一諸で芦原温泉に宿泊して、とても和やかなひとときを過ごしました。

その後、福井県内の武生市、清水町、金津町、丸岡町など住民健康診断の実施に参加しました。その結果、芦原町は昭和 45 年に第 22 回保健文化賞（第一生命保険株式会社）を、武生市は昭和 52 年に第 29 回保健文化賞の栄に浴しています。これは、重松先生の先見性と指導力の賜です。

さらに、この芦原町の循環器関係のデータを基に私の学位論文をまとめました。論文作成に当たっては、重松先生の東京・目黒区下馬の自宅に泊めて戴いて指導を受け本当にありがとうございました。

また、昭和 45 年 4 月に重松先生の推薦により厚生省公衆衛生局保健所課に採用にされ、社会局、防衛庁、環境庁、広島市衛生局長、富山県厚生部長、北海道地方衛生局長、関東信越地方衛生局長の行政を経験し、昭和 48 年 8 月から 3 ヶ月間のWHO短期研修(欧州 8 カ国)も経験しました。行政業務の総括として、平成 20 年 11 月に瑞宝中綬章の叙勲を受けました。これも、ひとえに重松先生の表裏に亘る多大なご支援によるものであります。

重松先生の長年に亘るご指導に感謝いたします。ありがとうございました。

社会への第一歩は重松教室から

神戸市看護大学

金川克子

私は1963年3月に東大衛生看護学科を卒業後、金沢大学医学部公衆衛生学教室に助手として奉職し、重松先生のもとで、おもに医学生の公衆衛生学実習（家族健康管理実習として、当時の医学教育では先進的な取り組みのようであった）に関わりながら、実践現場の経験が必要ということで、金沢市の保健所や児童相談所等で学ぶ機会をいただきました。

金沢大学に就職の年はいわゆる三八豪雪の後であり、就職前に金沢におとづれた時は雪に埋もれた金沢を見るにつけ、さぞかし大変であったと記憶しています。

また、就職にあたり、東大の衛生看護学科の先生から、重松先生は結核の専門家だから、結核についての知識や結核菌の培養の方法等基本的なものは頭に入れておくようにと示唆され、就職に際しての気の使い方には大きいものがありました。

さて、当時の公衆衛生学教室は古い木造づくりであり、薄暗い廊下は歩くたびにきしむ場所もあり、近代的な大学や研究室とはかけ離れた粗末な環境であったと思っています。しかし、教室の雰囲気は家族的であり、重松先生をはじめ教室の先生方の働きぶりは時には厳しく、時にはあけっぴろであったと思います。夜になると教室の先生が近所のお店へおでんを買いに行き、舌包みをうちながら、わいわい討論をしたように思います。たぶんそのようなときには、よいアイデアやヒントが浮かび、研究へと繋がったものもあると思いました。

また、公衆衛生の仕事はフィールドで得ることが多いことも教えられ、石川県内の白峰村や福井県、富山県等多くの地域での保健活動や産業保健活動の場まで足を延ばさせていただきました。

助手と講師が同居していた研究室の隣に重松先生の教授室があり、ときおり、顔をだされては、たぶんいろいろな指令や指示が飛んだと思いますが、わたくしは実習の進め方や講義の補助、教室の記録作成の仕事のほかに、講座の運営、大学人、研究者としてのあり方を学ばせていただきました。しかし、当時はありがたみは薄かったように思います。

重松先生のもとでの直接の教えは比較的短かったのですが、職場を離れてもお会いする機会も多く、わたくしにとっては上司ではありますが、父親的な存在でもあり、学術的なことでも相談に乗ってくださり、家族を視点にした健康管理の重要性、意味合いをまとめる機会を与えていただきました。

当時は私は新米の助手であり、あまり深く物事を考えないことが多く、今にして思えばもっと、多くのことを学んでおくべきだったと思います。

それでも、重松教室への出入りの先生方が多く、その関係から今日までもお知り合いにいただいている先生方もみられ、貴重な財産になっています。

私が東大の地域看護学の教授を退官する折には御夫婦で会場にかけつけてくださり、お言葉も頂いたことがつい最近のように思います。

現在、わたくしは地域看護学をうたっていますが、その基盤は重松先生や重松教室で育てられたものであり、大切な宝物です。本当に長い間ありがとうございました。

昭和38年の金沢は豪雪の年であった。最後の臨床講義だったか卒業パーティの席であったか定かでないが、内科の村上元考教授から「卒業後、他の大学に入局する場合は当該教授の紹介状をもらうように」との勧めがあった。「例えば他大学の内科に入局するのであれば私が紹介状を書く、君たちは大事な本学卒業生なのだから。」と付け加えられた。大雪にウンザリしていた私は実家の近くにある病院でインターンをするため大阪に戻り、終了後は関西にある大学に入局しようと思っていた。

インターンも終わりに近づき、村上教授の言葉を思い出し、紹介状をいただこうと母校、金沢大学の公衆衛生学教室に重松先生を訪ねた。その時、重松先生は日本の医学部に公衆衛生学講座ができた由来から話された。「敗戦直後、GHQがアメリカにはある『公衆衛生学部』が日本にないのに驚いた。『公衆衛生学部』を創設しようとしたが当時の日本の経済状況からはとても無理な話だった。そこでしかたなく全国の各医学部に公衆衛生学講座を新設することになった。」先生はさらに続けられた。「公衆衛生学の基礎科学は『疫学』である。『疫学』という看板を掲げている研究所はわが国では国立公衆衛生院、広島・長崎の原爆調査委員会（ABCC）と当時新設したばかりの国立がんセンターだけである。私は国立公衆衛生院疫学部から本学に赴任してきたのだ。疫学に基づく真の『公衆衛生学』を学ぶにはわが教室以外にはない。柳川君ともよく相談したまえ」。

すごい迫力であった。それで一旦引き上げた金沢に舞い戻ることを決心した。それ以来ずっと生涯を通してご指導を仰ぐことになった

公衆衛生学教室は戦後新設されたというだけあって大学の片隅にあり、継ぎ足しでできたような木造の建屋であった。しかし教室には活気あふれるものがあつた。重松先生は、昼間は忙しい合間をぬって、時折「何をしているのか?」「どこまで進んだか?」と1~2分声をかけながら私どもの座っている後ろを通り過ぎていかれるが、本格的にご指導を仰ぐのは夜になってからである。それからまさに手取り足取りである。先生は私の作成した図表をながめながら、「原稿を読みなさい」といわれる。読み終わると「今、読んだ文章を半分に削りなさい」と云われる。その後、私が半分に縮めた原稿は原文が跡形もないように修正され、最終的には口述筆記となる。その原稿をお持ちすると、また「読みなさい」と云われる。文章の一言一句をしっかりと覚えておられ、少しでも違うと「そんなことは云っていない」とこっぴどく叱られ、一字一句の誤りも許されることはなかった。後日、国鉄中央保険所管理所で重松先生の師、岡 治道先生のご指導を受け、口述筆記を仰せつかったことがあつた。岡先生の許可を得て録音テープをとってはいたのだが、口術筆記したものがそのまま論文になっていることには驚いた。偉い人は言葉を大事にするものだとつくづく思った。重松先生は「拙速」とよく云われたのですが「拙速」は決して許されなかった。常に誠心誠意、心こめて真剣に仕事に取りかかるよう身を以て教えられた。

研究に関しては厳しい指導ではあつたが教室中は活気に満ちあふれ、温かみが充満していた。多くの研究生が出入りし、疫学談義に花を咲かせていた。大学院生として入局したての私も身のほどを知らずに首を突っ込むことができた。

いろんな方々が重松先生を訪ねてこられた。時には先生方に紹介していただき、夕食にも同席させていただいた。人との接し方、共同研究の進め方を時に触れ、折に触れ教えて

いただいた。

当時は循環器疾患疫学の幕開けの時代であった。「循環器疾患における眼底所見の意義について」が私の学位論文のテーマであった。眼底所見を観察する技術を修得するため1年間、眼科外来に行くようにしてくださった。また眼底写真についても「レンズを動かしてピントを合わせるのではなくて被写体を動かしてピントを合わせるのだ。何事も発想の転換が必要だ」ともおっしゃっておられた。眼底写真の解像度を解析するため、眼底カメラの研究室や工場に出かけたこともあった。デンストメーターを使って眼底の動静脈を測定するため、名古屋大学の工学部や金沢大学の理学部に出入りさせていただいた。何でもやりたいことはやらせてくださった。眼底の診断基準に関しても検者内・検者間の誤差をできるだけ少なくするため、何度も同じフィルムを読影し、診断が一致するまで根気よく訓練を繰り返すことを勧められた。

先生から薫陶を受けたのは研究、学問だけではない。疫学研究におけるフィールドワークの大切さ、市町村長さんとの接し方、地域住民や職域の方々との接し方についても身を以てご指導いただいた。循環器検診のため芦原や武生など、福井県の市町村に健診に出かけることが多かったが泊りがけでの調査も大変楽しい思い出である。

金沢では失敗も多かった。それも大失敗で恥ずかしくて人には云えないようなことも多々あった。先生の東京出張にお供した時のことである。私は列車のチケットを家に置き忘れたことに気が付いた。しかも金沢駅についてからである。当時重松先生が自家用車を運転されていたが、すぐさま私の家まで引き返してくださった。「拙速」は許されなかったが「失敗」には寛容であられた。「人間は失敗を繰り返して成長するんだよ」とにこにこされながら云われたことを覚えている。

重松先生が金沢大学に赴任されてこられたのは昭和37年4月であった。私が医学部最終学年を迎えた年である。先生は蝶ネクタイでさっそうと登壇され開口一番疫学の講義をされた。しかし、先生が金沢におられた期間は極めて短い。歴史に「もし」は禁物だといわれるが、先生に紹介状のお願いに金沢に来ていなかったら。公衆衛生学教室の諸先輩にお会いしていなかったら私はどのような道を歩んでいたのか想像がつかない。

勿論、金沢を離れてからも、ずっと続いてご指導を仰いできた。重松先生はわが生涯の師である。今、大きなよりどころを失った私どもは悲しみのため、途方に暮れています。

しかし先生がお育てになった直接、間接にご指導を受けた直弟子、孫弟子、ひ孫弟子が全国で、いや世界中で活躍しています。どうか先生天国からいつまでも私どもを見守っていてください。

一通の手紙が私のその後を決めたようです。昭和38年秋、京都大学でインターン中の私に重松先生直筆の公衆衛生学教室大学院へ勧誘の内容でした。

先生は私たちが学部3年生のとき、国立公衆衛生院から赴任されました。授業はそれまでの多くの授業と違って、「・・そうは言うものの・・」とがらりと裏話に入っていく、世の真なるものは何か、そこに至る過程はどうだったかなどなど派生する話が興味深いものでした。結核や塵肺の講義はその後私の保健所で活きました。4年生の夏休みに福井県のフィールドワーク（循環器検診が主）について行き、先生の後輩にあたる小町喜男先生を知ることとなり、お寺の蚊帳の中の心電図講義もまた、私のその後の保健所で生きることになりました。重松先生は各専門の先生方を活躍させる名人であったように思います。

私は自らの戦災被爆体験から、子どもが戦争や疾病から守られるべきと考えてきましたので、子どもの未だ病まざる状態を研究したいこと、小児保健を大学院の研究テーマにしたいと先の手紙の返事としました。先生がどんなテーマでも受けてくださるとのことでしたので。大学院に入ったときは丁度妊娠中でしたので、夏休みの出産を経て、木造教室の一室に、保育園入所までの一ヶ月間ベビーサークルを持ち込む許可を得ました。

教室スタッフや院生の総勢10名が出張やアルバイトから帰った夕方、口を滑らかにするお薬が入ると教授を囲んでの侃々諤々が始まります。ここで研究への、あるいは生き方への様々のヒントを得る至福の時であったはずでした。というのも、保育園に子どもを迎えに行かねばならない時間と重なって、私は翌日さわりの部分を先輩から聞かねばなりませんでした。当時は先生の新車が話題になることも多く、ついでに皆にも自動車教習所へ通う便宜も図ってくださったため、本当にあの時免許を取っていてよかったとつくづく思う昨今です。

結局、大学院4年間に2人の子ども（動物実験にしては少ない）を出産して（睡眠時間はナポレオン並み）、先生からは「ポンコちゃん」の渾名を授かることになりました。先生は私が院の3年生のとき、金澤を去られましたので、論文の完成には加藤助教授の指導を受け、さらに国立公衆衛生院へも伺いました。

先生から学んだ疫学の基本は疾病対策に有益なばかりでなく、私がその後、人の健康、生活、福祉など世のもろもろの課題にぶつかる度その解決に応用できる手法でもありました。ただ、時には時間や関係性―特に人間関係という概念を強く関与させないといけないときもありましたが。

昨年、断わり続けてきた叙勲の話があった際、病床にあられると聞いていました先生のお顔を思い浮かべて、授章を決断した部分もあります。7月、病院へ報告とお礼に伺った際に「昔で言う勲4等だな」と車いすの上で仰ったのが、思えば先生との最後の会話となりました。別れ際、奥様や先輩たちと共にベッドサイドで写真に納まれる先生の横顔を見ましたら、きっと眼を見開かれ、眼力を感じました。病魔を道連れにしながらも最期まで生き抜くお姿を見せていただきました。ありがとうございました。

今はただ、安らかにお眠り下さい。

奥様のご健康を祈りつつ

師として、そして時には慈父のごとく

(独) 富山産業保健推進センター所長
富山大学名誉教授 鏡森定信

重松先生には、金沢大学の医学部で専門コースの講義で始めてお会いした。今でも、疫学の三要因、Host、Agent、Environment の楽しい雰囲気だった講義を記憶している。その講義を完結すること無く、先生は公衆衛生院に戻られた。私は、社会医学研究サークルに属しており、先生がその顧問であったので公衆衛生学教室に出入りしていた。この時期に先生の門下生の多くの素晴らしい先達にお会いでき、先生とこれらの先達の方々からその後長きにわたりご指導ご支援を受けるという幸運に恵まれた。

先生は、古都金沢の守旧的雰囲気では十分フォローできないいくつかのことを先導された。北ベトナム友好団の歓迎会の世話人もその一つで、当時米国に気兼ねして多くの人は引き受けたがらなかっただけに学生として大変感銘した。金沢観光会館で開催された盛大な友好歓迎会の様子は今でも脳裏に鮮やかによみがえる。私は壇上のすぐ下で北ベトナムの皆さんのボディガード役を務めたので、重松先生のやや緊張した表情と声の歓迎の挨拶を面前で聞くことができた。先生はいつも笑みを含んで楽しげにお話しされる方だったので、私の記憶では、挨拶とはいえ緊張で笑顔もなかったのはその時が最初で最後である。

ところで、私の英国留学自体も重松先生のゆかりの先達の皆様の支援によるところが大変多かった。また、ロンドンでもウエールズでも重松先生の国際的な人脈のおかげで、一介の若い留学生にはありえない高名な方々から厚遇を受けることが出来た。故人となった飯淵先生と私が、航海するカティークサークが描かれた額入りの陶板をロンドンからお送りしたら、海軍にゆかりの深い先生はその絵を大変気に入られ、その続編を求めて訪英中にボンド街の何軒もの画廊を廻ったこともあった。また、先生は私の留学中にも何回も訪英された。その際、在英中の日本人留学生がロンドンに集まり会食し、さらにジョンスノーのコレラ流行の発端となった井戸の近くのパブで歓談をしたこともしばしばあった。これらは留学を支えた大きな庇護であり、日本から来た多く留学生は慈父にも似たケアを先生から受けたのである。もちろん楽しい思い出ばかりではない。先生に同行し訪英した厚生省の方が、ホテルに置いた有り金全部を盗まれた時の重松先生のスコットランドヤードとの丁々発止の交渉にひやひやしたり、街角で買ったアイスクリームが原因と思われる食中毒でシンプソンホテルで寝込んでおられた先生を数次にわたって見舞ったりしたことなどが懐かしく想いだされる。

帰国後、私は金沢の重松会に入れてもらったので、ここ 20 年余りは年に一回その会で実に楽しく直に先生とお話できた。残念ながら先生を囲んでの会はもう持てなくなってしまったが、平成 24 年 4 月には、先生が本格的な疫学研究を先導されたイタイイタイ病の富山県立資料館が開館する。私は、その運営のお世話をする事になり、先生とのつながりを感じながら仕事することとなった。本当に先生との長き因縁を感じている。

多面的な分野で重要な役割を果たされ続けた先生からは多くの示唆を受けた。「委員会を編成する際には、立場や意見の違う人にも入ってもらうこと」などは、このイタイイタイ病資料館の運営においても大切なことだと思っている。

人生における師としてそして時には慈父のようであった先生に深く深く感謝している。

学 際 的 思 考 を 学 ぶ

学校法人浅ノ川学園金沢看護専門学校顧問 西 正 美

昭和 30 年代後半のころ、当時私は金沢大学医学部解剖学教室にいた。マウスの延髄の神経細胞を、顕微鏡下で眺める日々である。その研究室の外側は、校庭というか、さほど広くもないが、疎らに育つ桜の木々があり、何となくアカデミックな風がそよぐ空間がある。その庭先に、公衆衛生学教室の一棟がせり出している。私の研究室のまん前に公衆衛生学教室の教授室がある。

新たに赴任した教授になってから、その教室からは時には笑い声が、時には英会話が、庭の空間を越えて、賑やかに、時には騒々しく響いてくる。夏になると、教授室の窓も開け放たれているのか、時折、教授が誰かに電話している大声が聞える。話の内容は分からないが、時には恫喝とも思しき雰囲気であったり、あるいは賞賛のような感じであったりする。公衆衛生学の教授というものは、何とアカデミックな雰囲気とは別世界の住人なのかと思ったものである。

ある時は、公衆衛生学教室で求めたと思われる小型乗用車パブリカを、教授を始め教室員が洗車している風景を眺めたこともある。顕微鏡下の世界と取っ組み合い、対象細胞を特異的に染色し、明確に識別できるようにすることに精力を注ぎ、それがアカデミズムの一端を負うと思っていた私にとっては、公衆衛生活動の一環として、特定地域に出向き、種々の調査活動をしているなんて想像もできない。とはいえ、私も某保健所の保健所活動の応援にも出かけていたから、公衆衛生と全く無縁であったわけではない。それでも、何のために、教室として小型乗用車が必要なのか、理解を超えていた。

金沢大学医学部に十全同窓会があり、その会報を年に数回発行している。どういう経緯か定かでないが、私はその会報の編集のメンバーを仰せ付かっていた。ネタを探し、紙面構成を先輩たちと、わいわいいいながらやっていた。当時富山県神通川流域に発生するイタイイタイ病が話題になりつつあった。解剖学教室にいる私には、さほど興味を引くものではなかったが、イタイイタイ病の解明に研究班？が組織されたと耳にし、公衆衛生学教室に重松逸造教授を訪れた。庭越しに居丈高な？声で電話している教授に恐るおそる面会取材をお願いした。予想したようにというか、大きな声で、一気にまくし立てられた印象であった。何となく雰囲気は感じ取れても、その詳細な内容は容易には理解できなかった。

その際に研究班？のメンバーを見せられて、正直驚きであった。金沢大学の理学部、法文学部、医学部の臨床、基礎の有名教授の名前が記されている。今日にして思えば、さほど奇異なことではないが、100 年の伝統を持つ老舗大学の教室間の連携も儘ならぬ当時の状況からすれば、青天の霹靂とでもいう思いであった。某臨床教授の話では、あれ（イタイイタイ病）はビタミン D 投与によって改善できるということだった。ことは差ほど単純ではないようであり、学部を超えて、英知を結集しようという試みである。このチーム結成に向けて、かの恫喝的言辞や賞賛措く能わざる言葉で電話説得を試みていたのだろうか？と、ふと思ったものである。

同窓会会報の記事はどのように纏めたか、記憶の彼方に消え去ってしまったが、個々の教室に閉じこもり、その中で細分化される科学技術と発想に、大きな風穴を開けられたような気がした。それでも当時は、極めて例外的な対応だろうぐらいにしか認識できなかった。

そして昭和 40 年、私は解剖学教室を辞し、行政畑へ転身した。衛生行政に身を委ねるならば、公衆衛生を改めて勉強しなければならないだろうと、重松教授の門を叩いたが、時すでに、重松教授は国立公衆衛生院疫学部長に転身されていた。幸か不幸か、暫時金沢大学医学部との兼務ということで、門下に加えて頂いたが、何となく外様の雰囲気は拭いきれない。その後、改めて国立公衆衛生院に笈を負い、数限りなく重松先生からお教えやご援助を頂いた。公衆衛生へ転身する以前に教えられた学際的思考への芽は、今もお内包したままである。

重松先生が国立公衆衛生研究院から金沢大学医学部公衆衛生学教授として赴任されたのは1962年（昭和37年）でした。私は、この時は医学部4年生で、医学部のサークルである社会医学研究会で活動していて講義の出席は芳しくはありませんでした。新しく東京から来た公衆衛生学の教授が講義をすることを聞いて出席をしました。重松先生はあの独特の声で疫学の講義をされました。疫学などという単語は聞いたことがありません。重松先生の講義は、一貫性がなく話は前後左右に飛びましたが私にはとても新鮮に感じられました。講義の内容はよくわからないのですが、とにかく面白いのです。目の覚める思いでした。このように感じたのは私だけではなかったと思います。公衆衛生学教室への入学者は重松先生の教授就任とともに急増し、その方々は日本いや世界の公衆衛生分野で活躍されています。大学の講義はこうあるべきだという思いを強く印象づけられました。

重松先生は4年間の金沢での教授生活で、多くのお弟子さんを育て、北陸の公衆衛生学を活性化して、私が医学部を卒業し衛生学教室の大学院生となった年に東京に戻られました。私は大学院4年生の1年間を国立公衆衛生院で勉強することにしました。社会医学・予防医学への方向性が見いだせず将来について思い悩んでいた時です。重松先生は疫学部長として古い建物の古い部屋で精力的に活動されていました。公衆衛生学の研究者としての重松先生のそばにいて新しい視点から考えることができるようになったようにわずかですが感じられました。教育・研究は本を読むのは一部分であり、活躍している教師・研究者のそばで刺激を受けることの方が有益なことを学びました。私は大学院4年生の時に国立公衆衛生院で過ごした1年間で重松先生から疫学的思考方法について実践的な感覚を学んだと思っています。

その後は、国内の学会、海外の研究会等で重松先生と一緒する機会があり、研究についていろいろと有益な意見を聞かせて頂きました。特に初めての海外の研究会に出席した時には、言葉も理解できない私を親切にご指導頂きなんとか発表できたことは今でもよく記憶しています。私は公害病であるイタイイタイ病について研究をしてきました。公害病の研究には広い視点が必要です。重松先生の疫学教育は私が研究を進める上でとても役立ちました。重松先生からは私は研究者としての教育も受けることができました。

私の大学での生活は金沢大学、金沢医科大学、千葉大学と36年間に及びます。この間に重松先生がなさったような講義をするように努めましたが、満足のいくような結果は得られませんでした。やはり、講義をする人の学識、性格、人間味が基礎になれば、あのような講義をすることはできないことを36年間かけて学びました。

偉大な教育者であった重松先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

いつまでもお若かった重松先生、さようなら

上島 弘嗣

いつの頃からか重松先生を囲む会に出席するようになって、奥様ともどもそのはつらつとした青年のようなお若さには、驚くばかりであった。ある時、妻も一緒に会に参加したことがあったが、お二人のあまりのお元気さと若さに、何としたことか、妻が「奥さまはおいくつですか」と単刀直入に聞いたので、そばにいた児玉先生や柳川先生らは大いに驚いたということであった。それだけに、先生がご病気で亡くなられるなどということは、思いも寄らぬことであった。

最初に重松先生にお会いしたのは、金沢大学の医学部の教養課程に在籍していたとき、基礎生物という科目があり、教養課程から医学部へ行ってその雰囲気味わうという授業の一つであったのではないと思うが、その時が初めてであった。誰もが、授業は断片的にしか覚えていないものであるが、重松先生の授業の中で能登には今も井戸がある、丸々太った赤ん坊が将来とも元気であるとは言えない、という二つのことを今も覚えている。その後は、先生は4年ほどしか金沢大学におられなかったが、ある日、教室の前を通ったら、何やら鶏の空揚げのようなものを楽しく食べておられる姿をお見かけした。後年になって聞くと、重松教室の習慣だったようだ。

先生はお酒が好きなのは良く知っていたが、重松会で温泉に泊まった時の朝であったろうか、朝食を囲んでいるとき、「ちょっとビール、コップ一杯でも飲もうか」と言われて、朝からコップ一杯のビールを、重松先生を囲んでいるもので飲んだ記憶があるが、この時も本当にお元気だなと思った。

よき教育者・研究者は人を育てるのも上手であると思っているが、私は若いころから、重松先生はそれがとりわけ上手だなと思っていた。先にも述べたように、先生は金沢大学には4年ほどしかおられなかったが、金沢大学からは柳川先生、橋本先生をはじめ、多くの優れた方々を世に出された。簗輪先生も金沢大学入学時の同級生である（私は遅れて卒業した）。一度、私も東京へ来ないかと声を掛けられたことがあったが、持病もあり東京には行かなかった。某大学の教授選考があるとき、重松先生からある先生に電話がかかって来て、「これが最後のチャンスかもしれない」というような事を言われ、大学に赴任された方もおられた。面倒見の良い先生の一面を端的に表しているのではないと思う。

最後に、先生から直接聞いた話で、とても印象に残っていることを記して、先生を偲びつつ筆を置きたい。先生がアメリカへ留学されるとき、今のように英語を練習する機会がないので、「羽田で英語のアナウンスを聞いて勉強した」と話されていたことがある。これも、私達後輩は見習うべきことのひとつと思っている。

別れは常に世の理とはいえ、やはり寂し思いがしますが、ここに先生のご冥福を心よりお祈り申し上げ、お別れしたいと思います。先生さようなら。



2006年5月、「柳川先生の古希を祝う会」の時の重松先生と柳川先生。柳川先生は、児玉先生の用意した「長寿の心得」の手ぬぐいに重松先生初め参加者がサインをしたものを広げ、それを見て重松先生が笑っておられる。

国立公衆衛生院とその後の思い出

埼玉県春日部保健所 大村外志隆

私は昭和 56 年 1 月に、金沢医科大学公衆衛生学教室（加藤孝之・河野俊一教授）から、国立公衆衛生院疫学部へ重松先生にお呼び頂きました。疫学部では当時の簗輪眞澄室長の下、全国市町村別主要疾患死亡率の分布に関する研究に従事しましたが、その他にも、スモンやイタイイタイ病、水俣病、難病などの疫学研究においてもご指導頂きました。

その後、昭和 58 年 4 月に秋田大学医学部公衆衛生学教室（滝澤行雄教授）に異動し、更に、平成 4 年 4 月からは埼玉県衛生研究所（川口毅埼玉県衛生部長）に移り現在に至っています。この間にも川崎病原因究明委員会や難病の疫学研究に携わらせて頂きました。

この度の先生のご逝去の報に接し、これまでのご指導ご鞭撻に感謝し、ここよりご冥福をお祈り申し上げます。

重松先生と金沢と疫学と

滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 教授 三浦克之

私の重松先生との最初の出会いは、金沢大学医学部に入学してすぐ学生サークルである金沢大学社会医学研究会に入部し、木造の古い部室の本棚にあった「疫学とは何か―原因追及の科学」（重松逸造著、講談社ブルーバックス）を手にとったときでした。過去に金沢大学にこのような素晴らしい教授がおられたことを誇りに思うとともに、疫学の魅力に引きつけられ、現在の道を選ぶ大きなきっかけになりました。

その後、内科研修を経て金沢大学公衆衛生学教室の大学院生になりましたが、教室の本棚にあった何かの古い本の裏表紙に書かれた重松先生による「上医医未病病」の毛筆の文字を発見し、これを大事にコピーし、以来ずっと自宅の書斎の壁に貼ってあります。大学院では動物実験も勧められましたが、「疫学がやりたい」と断り、重松先生が金沢大学在任中（昭和 37-41 年）に始められた石川県白峰村（現白山市）住民のコホート研究データをまとめて学位論文を作りました（日本公衆衛生雑誌 1992）。

金沢医科大学公衆衛生学赴任後は、重松先生とのご縁はさらに深くなりました。故河野俊一教授は重松先生の直弟子、中川秀昭現教授は孫弟子、それで私はひ孫弟子に加えていただきました。金沢で「元祖」重松会のお世話をお手伝いさせていただき、毎年重松先生にお会いし、お話を伺える幸運に恵まれました。一度は先輩の先生方と重松先生が行きつけであった金沢のおでん屋「若葉」にご一緒し、「金沢での 4 年間は本当に楽しかった」と語っておられたのが印象的です。ちなみに私は昭和 38 年生まれですので、私が生まれた頃重松先生が金沢におられたこととなります。金沢大学の古い資料を調べたことがあり、その中に以下のような記述がありました。「重松教授は着任以来、結核を主とする胸部疾患の疫学、循環器障害の疫学、小児の追跡的研究、生活環境や労働条件の健康への影響、集団や地域の健康管理などをとりあげ、巾の広い分野にわたって研究を進めた。しかも、これらの数多くの研究の中心を公衆衛生学の診断学ともいえるべき疫学が貫いている。」 4 年という短い間にこれほど多くの課題に取り組まれるエネルギーに驚くとともに、時代ごとと地域ごとに流行する多様な疾患に果敢に立ち向かう「疫学者」の姿勢を学びました。

2 年前、私の滋賀医科大学教授就任祝賀会にご出席いただき、お言葉をいただきました。海軍でのご経験から、講座を船に例えられ、「三浦丸が沈没しないよう、妙な方向へ行かないよう、しっかり舵を取れ」との叱咤激励は生涯忘れられないものです。現在取り組んでいる NIPPON DATA80 のベースラインである 1980 年循環器疾患基礎調査の委員長は重松先生であり、ここでも深いご縁を感じています。

以上のように、重松先生に常に導いていただいて今の私があると言っても過言ではありません。先生のこれまでのお導きに感謝するとともに、先生が築かれた日本の疫学をしっかり受け継ぎ、人々の健康を守る仕事を続けたいと思います。

心よりご冥福をお祈りいたします。



平成 17 年重松会 石川県粟津温泉「のとや」にて

以前より重松先生のご容体が思わしくないとお聞きしていたので覚悟はしていたものの、先生の訃報が届くと、力が抜けてしまいしばらくは何も考えられませんでした。半年前には私を公衆衛生学に導いてくれた加藤孝之先生がお亡くなりになり、2重にショックでした。

重松先生は金沢医科大学公衆衛生学教室にとって大変大きな存在でした。当教室は昭和48年に初代教授加藤先生の下で開講し、加藤先生が昭和53年に愛知医科大学に転出されると、河野俊一先生が2代目教授として着任されました。両教授とも重松先生が金沢大学医学部教授であった時代の助教授、助手として教えを受けており、金沢医科大学公衆衛生学教室は重松先生の疫学の流れをくむとともに、先生が金沢大学教授時代に始められた循環器疾患予防とイタイイタイ病研究を引き継いで現在に至っています。重松先生が金沢大学で始められた福井県芦原町の循環器疾患の疫学研究は、加藤先生に受け継がれ、福井県三国町、石川県鶴来病院、富山県小矢部市の健康調査につながり、現在ではYKKのコホート研究として多くの成果を上げられるようになってきています。また、イタイイタイ病や慢性カドミウム中毒の疫学研究は、重松先生が班長を務められた昭和51年からの環境省委託研究「イタイイタイ病に関する総合研究」では加藤先生、河野先生がイタイイタイ病班の班長として神通川流域や梯川流域カドミウム汚染地の研究を行っています。重松先生には教室開校時の祝賀会や講演会の特別講師を始め、研究の節目節目で教室を訪れられ、我々を叱咤激励されました。

私と重松先生の出会いは昭和50年に公衆衛生学教室に入局して以来です。私が金沢大学生の頃は岡田教授の時代に入っており、重松先生のことはほとんど知りませんでした。ただ医学概論研究会というサークルの中でイタイイタイ病を取り上げており、先生の存在を文献の上でわずかに認識している程度でした。加藤先生の下で、先生の疫学に関するご本を読み、また国立公衆衛生院講義を聴きに行き、先生の疫学について感銘を受けたものでした。その後先生にはいろいろと研究面でお世話になりました。イタイイタイ病研究に関しては、私たちとは意見を異にすることもありましたが、ご自分の考えを押しつけるのではなく、私たちの思うように研究させていただきました。私のライフワークの一つとなっているカドミウム汚染地域住民の追跡調査は、河野先生が始められた梯川流域について研究を行っていましたが、汚染の程度も規模も大きなイタイイタイ病発生地域である神通川流域で研究を行ってみたいと思っていた私たちに重松先生はその機会を与えていただきました。昭和54～59年に実施された住民健康調査の26年後の追跡調査は、簗輪眞澄先生の活躍にもより、95%の高い追跡率で死亡原因調査も含めて実施でき、今は論文を作成するだけとなっています。

この10年間余りは重松会にも参加させていただき、芦原温泉、山中温泉、片山津温泉、

栗津温泉、辰口温泉、湯涌温泉と毎年先生の訓辞をいただいたのも心に残っています。加賀市橋立「舟重」でズワイガニ料理を楽しんでいたお姿、また広島重松会で「中谷宇吉郎雪の科学館」を興味深く見ておられたお姿、「九谷焼美術館」で古九谷について博学を披露していただいたことなど思い出されます。もう一度辰口温泉松崎に行きたいおっしゃったことが実現できなかったのが残念です。また悔やまれるのは先生の色紙「上医」をいただけなかったことです。まだまだいただけるまでに成長していないということでしょうか。

金沢医科大学公衆衛生学教室は初代加藤孝之教授、2代河野俊一教授、3代私と続いています。重松先生は我々3人の研究を一層高いものへと導いていただき、0代教授とも言えるものです。先生の教えをかみしめ、さらに教室発展のために努力していかなければならないとも思っています。また、私的にもいろいろとご配慮いただいたことを感謝するとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。



平成20年度重松会での集合写真
(常連の花岡先生が体調が悪く
ご出席できませんでしたが、久
しぶりの二口先生を交えて話が
尽きませんでした。)

平成20年11月15日 辰口温泉
松崎にて

平成21年度重松会での1コマ
(重松先生からのご訓示をいた
だいています)

平成21年11月14日 山中温泉
花椿にて



重松先生の思い出 ―国際川崎病シンポジウム、MCLS研究班、たばことがん、
金沢兼六園、川崎病親の会の保健文化賞―

日本赤十字社医療センター小児科顧問、NPO法人日本川崎病研究センター理事、
VPDを知って、子どもを守ろうの会代表 菌部 友良

今年（2012年）の2月7日から、京都で第10回国際川崎病シンポジウムが開催されました。学会会長は東邦大学小児科の佐地勉教授で、なんと世界24カ国から、合計431人の参加者があり、実りある会でした。中でも日本のRAISE研究グループ（佐地教授や群馬大学の小林徹先生を中心とした日本全国の川崎病患者の多い協力病院）の成果で、日本で開発した免疫グロブリンとステロイド漸減療法の組み合わせが、現時点で世界最高の川崎病治療法であることが発表されました。そして、その成績がすぐその後に、ランセットにも掲載されたのです。

この川崎病の発表当時の名前は、急性熱性皮膚粘膜リンパ腺症候群（略称MCLS）でした。実は、今年の2月7日は川崎病発見者の川崎富作先生の米寿の誕生日に当たりますので、ありがたいことに佐地教授がその日に合わせて開催スケジュールを決めてくださいました。その為、初日のウェルカムパーティーは、川崎先生の米寿の会も一緒に行いました。小生は川崎先生の下で約45年間一緒に川崎病の研究を行ってきましたので、そのパーティーの総合司会を担当しました。

そして、パーティーの開会に先立ちまして、川崎病研究の基礎を築き、川崎病の知識を日本のみならず世界に普及させた重松逸造先生の多大な貢献に対する国際川崎病シンポジウムからの感謝状の贈呈式が執り行われました。元埼玉県立大学学長の柳川洋先生が今までのご功績を写真など交えて紹介されましたが、海外の研究者も感慨深げに聞いておりました。そして、最後に直江史郎NPO法人日本川崎病研究センター副理事長（元東邦大学病理学教授）から感謝状が贈呈されましたが、重松先生は残念ながらご出席になれないので、中村好一自治医大公衆衛生学教授が代わりに受け取られました。

小生も司会をしながら本当にお世話になったことをいろいろと思い出しました。この国際川崎病シンポジウムが世界各国から多くの参加者のもとで定期的に行われていることも、まさに重松先生のおかげであることを実感しました。そして柳川先生、中村先生らが調査、研究されている川崎病の疫学調査も重松先生のおかげです。この調査によると、日本での患者数が断然世界一です。日本では年々患者数は増加傾向にあり、最新の第21回調査では罹患率は240（0-4歳人口10万対年間）と史上最高になり、2010年の年間患者数は12,755例に達しました。累積罹患患者数から考えると、小学生では100人に1人以上が罹患患者で

あると考えられます。まさに川崎病は日本の国民病ともいえるものです。重松先生も心残りと思いますが、川崎病の原因は未だに不明です。しかしこれだけ患者数の多い日本の研究者が究明してくれると小生は信じております。

小生は医学部卒業約3年後に、川崎病発見者の川崎富作先生がおられた渋谷区広尾の日赤中央病院で小児科医として勤務を始めました。勤務をしてすぐから川崎病の患者さんを多く受け持って、川崎先生記載通りに経過していくのを、感激しながら診療に当たっておりました。そして小生が現在でも川崎病に関係するようになったのは、乳児川崎病の突然死例を経験したからです。この不幸な例の解剖できませんでしたが、実は川崎病の症状を呈して死亡する「乳児結節性動脈周囲炎」という病気があることを川崎先生や先輩医師から教えられました。しかしすぐその後に、この死亡例が「乳児結節性動脈周囲炎」とは異なり、川崎病の最重症型であり、日本の他の病院でも経験されていることを知ったのは、重松先生が開催にご努力されたMCL S研究班のおかげでした。

小生が赴任した当時の日赤の神前章雄小児科部長と川崎先生はなかなか川崎病が新しい病気として日本で認められないので、困っておりました。そして川崎先生が重松先生とお会いすることが出来、スモン病などでの手法を用いて川崎病(MCL S)の疫学研究が始まったのです。当時重松先生は国立公衆衛生院におられました。そこは港区白銀なので、渋谷区広尾の日赤病院から車で10分はかからない距離でした。小生もだんだんお供をして重松先生との交流が始まりました。学問的なことは抜きにしましてエピソードのいくつかを記します。

重松先生と川崎先生が話合いに入る前の儀式がありました。川崎先生が当時東京の中心部に开店し始めたケンタッキーフライドチキンの大きな“バケツ”とコールスローを持ち込みました。そして時には重松先生のお好きなシーバスを賞味して、それからが本格的な話し合いです。小生はオブザーバーですが重松先生が実力、人格とユーモアともに最高の方であることはすぐに分かりました。多くのエピソードがありますがタバコの話が思い出されます。WHOの禁煙の専門家会議は紫煙がもうもうと立ち込まれる中で開催されていたこと、しかしこれではまずいとある時から少なくとも会議中は禁煙と決められたことなどです。また、タバコががんの誘因になることに関しては、「どのような喫煙者にタバコによるがんのリスクがあるのかを疫学者が見つけ出さなければならない。」と“力説”されていたことも印象深かったです。そのほかのことで言えば、第9回国際小児科学会が1980年にスペインのバルセロナで開催されたときに、初めて川崎病が認められて国際シンポジウムがもたれました。そのときは奥様も同伴されておられましたので、奥様にもお目にかかることができました。今から数年前に小生が金沢に出向いたとき全くの偶然に、重松先生ご夫妻にとっても思い出が深いと思われる兼六園でお目にかかれたことも感慨深いことでした。

長くなりますので最後にお目にかかった時の話を致します。それは、2010年の11月に日赤医療センターで開催された川崎病親の会(浅井満会長)の「保健文化賞受賞の記念パーティー」の席でのことです。このときの司会も小生でしたが、いかに保健文化賞が価値のある賞であるかなどの重松先生のスピーチの素晴らしさに、出席者一同大感激致しました。健康状態も極めて良さそうで、白寿の会が持たれるのも確実だと思っておりました。しかし今となってはこのことは無理になってしまいました。今後は天の上からお弟子の先生方のみならず、川崎病関係者もご支援ください。



重松先生有難うございました

今田義夫

ご体調を崩されたと伺ってから、あまりに早い訃報に、未だに信じられない思いでいます。昨年、日赤で「川崎病親の会」の朝日文化賞の受賞祝賀会でお会いできたのが最後になってしまいました。あの時も、いつものように「今田君！元気か」と声をかけて頂きました。

重松先生とは 1975 年に、川崎富作先生に連れられて白金の公衆衛生院疫学部にお邪魔して初めてお会いいたしました。ご高名な先生を前に緊張しきっていた小生に、気さくに接していただき、包みこまれる様な暖かさを感じたことが忘れられません。それから時々疫学部にお邪魔させて頂きました。当時、先生はまだかなりのヘビースモーカーで、「今田君、タバコが体に悪いとは誰でも言える。どのような人に悪いのかを調べるのが疫学だよ」と半分冗談のようにお話になり、同じくスモカーだった小生は何か安心したのを憶えています。いつも、仕事が一段落されると柳川先生、川崎先生と川崎先生持参のフライドチキンをつまみながら、遅くまで雑談？されるのを黙ってお聞きするだけでしたが、人間としての「豊かさ」「あたたかさ」が伝わってきてとても好きな時間でした。終わるといつも、目黒の駅まで車で送っていただき大変恐縮したのも思い出します。

1982 年には、少し臨床を離れて川崎病をテーマに勉強したいと思っていた時、昭和大学公衆衛生学の安西定教授に紹介して頂き、5 年間お世話になることになりました。重松先生は、1982 年 7 月に、一口千円の国民募金が始動され、日本心臓財団に第一次川崎病原因究明委員会が設立されて、その委員長に就任されました。この時有難いことに、幹事の 1 人に小生を推薦いただきました。当時の著明な先生方と接する機会を得たことは、私にとって何物にも代えがたい経験であり、今も重松先生に感謝しています。1986 年には第二次、1989 年には第三次原因究明委員会が引き継がれ、1993 年までの 11 年間活動が続けられましたが、残念ながら原因究明に至りませんでした。先生は最後の報告書に「臨床・疫学・基礎医学の専門家が緊密に連携して、研究目標・作業仮説を 1 つにしたプロジェクト研究がさらに進められることを期待したい」と結ばれています。この言葉は現在も川崎病の原因究明のために最も必要であることに変わりありません。

その後第一線を退かれても、有難いことに、本をお出しになる度に小生にまでお送りいただきました。その中の 1 冊に『日本の疫学』があり、その副題は「放射線の健康影響研究の歴史と教訓」とあります。福島原発事故に翻弄されている今こそ、先生のご指導があればと感じるのは私だけではないと思います。

この本の中で、先生は座右の銘として「温故知新」をあげられ、更には、「温故創新」という表現で我々後輩に新しい分野への挑戦を促されています。私も微力ながら、このマインドを更に若い世代に伝えるべき努力すべく心を新たにしています。

重松先生が天上界からいつもの笑顔で見守ってくれていることを信じて。

やはり川崎病の思い出が一番

田辺 功（医療ジャーナリスト）

重松逸造先生のご逝去は本当に残念です。私は実は先生に取材の予定がありました。入院中の先生は「必ず元気になる」とおっしゃっていると聞いて、いずれ取っておきの話が書ける、と思っていたのですが。

元気な重松先生と最後にお会いできたのは 2010 年 2 月でした。湯島天神のお店で、ご夫妻を囲んで、元日本心臓財団勤務の木谷道宣さん、浜西島子さん、浅井利夫先生、そして私が四方山話に花を咲かせた、といった感じです。その時に先生は「つい最近、運転をやめたが、92 歳まで自分で車を運転し、家内と一緒に広島まで往復していた」などと話されていて、とてもお亡くなりになるようには見えませんでした。

私は朝日新聞の医学・医療担当として国立公衆衛生院疫学部長時代からお付き合いができました。当初の取材はイタイイタイ病だったと思います。いつか毎週のように部長室で日赤医療センターの川崎富作先生と小児科の先生、疫学部の先生らが集まって内輪の飲み会をやるようになりました。話題は何よりも川崎病でした。

重松先生が放射線影響研究所理事長に転じたのは 1981 年 7 月です。すっかり忘れていたのですが、翌月、私は「ひと」欄で重松先生を取り上げていました。

さて、重松先生が公衆衛生院を離れた途端になぜか川崎病が空前の大流行をします。82 年 5 月、朝日新聞は 3 面トップ記事で「川崎病が猛威、全国的に昨年から」、4 面の解説面で「ナゾ深まる川崎病」と報じました。その時、流行時こそ原因を見つける最大のチャンスではないか、と思いつきました。

私は心臓病取材が多かったこともあって心臓財団と日常的な付き合いがありました。事務局長の木谷さんらと話しているうちに「日本人が発見した病気の原因を突きとめる国民運動を起こそう」となり、木谷さんの根回しで、わずか半月後には心臓財団が 1000 万円を出し、1 口 1000 円の国民募金運動を展開し、集まった募金を研究費として配分する方針が決まりました。

この「川崎病原因究明委員会」の委員長をすんなり受けたのが重松先生で、川崎先生との毎週の飲み会の成果です。ウイルス学の大谷明、高橋理明、細菌学の小谷尚三、免疫学の多田富雄、医化学の早石修氏ら日本を代表する先生方に加わってもらえたのも、重松先生のネームバリューがあったからだと思います。重松先生が会見で「3 年以内に原因をつきとめる。失敗したら腹を切る」と宣言されたのを思い出します。

実力ある研究者の協力が得られたことで、私はうまく行くような気がしていたのですが、世の中はそう甘くはありませんでした。残念ながら川崎病は未解明のままです。でも、重松先生を先頭したキャンペーンのおかげで、この病気は医師にたまねく知られるようになり、親の会ができ、治療法も大きく進んだのはたしかです。

朝日新聞
1982.6.13

川崎病解明へ国民募金を

研究費不足 一口千円呼びかけ

心臓財団



重松 委員長

日本で見つかり、日本の乳幼児に多発している川崎病の原因を日本人の手で解明しよう――財団法人・日本心臓財団(岩佐親美会長)は十一日、研究費として二千万円を出資する

とともに、近く一般国民を対象に研究費の募金活動を開始、川崎病解明のための国民運動を展開することを決めた。新しい国

川崎病 川崎寛作・日赤医療センター小児科部長が一九六七

の研究費では十分な研究が行われていないとの認識から、募金は財団内に設置する特別委員会(委員長・重松逸造・放射線影響研究所理事)が、研究状況を常時監視し、研究者に配分する。これまでに例のない民間主導型の新方式で、三年以内で原因解明を目標としている。

川崎病は主に、四、五歳以下の乳幼児がかかる病気で、一部に心臓異常が残る。百人に一人ぐらいが心筋こうそくで突然死する。溶連菌・ウイルス、ダニなどの原因説があるが、まだはっきりしていない。

先がけく。百人に一人が心臓病状動脈にコブ(動脈瘤)ができ、心筋こうそくで死んでいる。日本の患者は昨年未

きりしていない。五十年以降、患者は年間二十人を超えており、とくに去年秋からは爆発的な急増。今年は、前年流行の五十四年(約六千八百人)を上回り、一万人を超すと予想されている。必要な医療費は今年だけで二、三十億円にのぼるとみられるが、厚生省、文部省の川崎病研究班には年間各四百万円しか出ておらず、研究者一人あたりでは年に二、三十万円にしかなっていない。

日本心臓財団(事務局・東京都千代田区丸の内一〇四)は、心臓病、脳卒中の研究助成や啓発活動を行っている財団法人だが、川崎病の急増により、患者が五十分の一しかない米国が日本の何倍もの研究費をつぎこ

みていることを知り、「日本でも

同財団は、経済界などの会費や寄付をもとに、毎年二千万円を研究者に配分している。毎年一千万円を負担している大口寄付者の東京海上火災保険会社(本社・東京、渡辺文夫社長)が趣旨に賛同、今年の方針を賛同、川崎病研究につき込むことを求めた。

これだけでは不足で、少なくとも一億円近い研究費はいりそう。そこで同財団は、「一口千円」で、広く国民から研究費の寄付を呼びかけることにした。

実際の研究は、全国の川崎病

研究者たちに委託されるが、二、三クなのは、財団内に設置される「川崎病原因究明委員会(仮称)」。研究内容を監視し、今後の研究が必要かを判断、研究費を配分する。事務局となり、金責任を受け持つ。現在、重松委員長、日本心臓財団理事長の村上元孝・東京立憲病院院長らの間で人選を進められており、七八人のメンバー、細田、免役などの専門家が予定されている。研究テーマの公募も考えられており、七月中旬から活動が始める。



放射線影響研の三代目理事長になった



重松 逸造

大阪府出身。昭和18年東京大学医学部卒業。余大教授、国文公衆衛生学部長を経て月一日付で現職。六十三歳。

米国の会合で、日米合。しかし、今、健康診断の組織に変わっても、被爆や放射線検査のレベルは高く、被爆者に役立ちたい。検査しつづけるAHC「検査しつづけるAHC」の時代イメージが残っている。被爆者の悩みを少しでも

朝日新聞
1981.8.10

川崎病と重松逸造先生

浅井 満・川崎病の子供をもつ親の会代表

1967年川崎富作先生が川崎病の原著である「指趾の特異的落屑を伴う小児の熱性皮膚粘膜リンパ腺症候群：自験例 50 例の臨床的観察」を『アレルギー』に報告され、1970年に厚生省（現厚生労働省）の川崎病研究班（班長神前章雄先生）が発足、第1回の川崎病全国調査が実施されるまでの過程は数多くのハードルを乗り越える必要があったと川崎先生からお伺いしています。その時一番頼りになり、力になって下さったのが重松逸造先生であったことも。川崎病全国調査はその後、自治医科大学公衆衛生学柳川洋先生、中村好一先生に引き継がれ、調査を支えて下さっている屋代真弓先生のお力添えもあり、40年以上にも渡り実施されております。第1回全国調査への重松先生のお力があったからこそ第21回まで継続出来たと言っても過言ではないと思います。

川崎病研究の最初のまとまった文献は 1976 年近代出版から発行されている『川崎病(MCLS)研究のあゆみ』一病因、診断から治療まで—ではないかと思いますが、それらを川崎富作先生、草川三治先生らと編集に携わったのも重松先生です。その文献の序文に重松先生は「この疾患の本態究明は、日本の研究者の責務ともいえるのである」と書かれています。それらを自ら実践・挑戦したのが 1982 年 7 月に発足した財団法人日本心臓財団「川崎病原因究明委員会」の委員長就任です。同年 9 月私たち「川崎病の子供をもつ親の会」が発足し、「川崎病原因究明委員会」を毎回傍聴させて頂き、重松先生とお話する機会を得ることが出来ました。会議中、「この疾患の本態究明は、日本の研究者の責務ともいえるのである」という内容を何回も強調されていたことを記憶しております。

その後、第2次の財団法人日本心臓財団「川崎病原因究明委員会」では私をオブザーバー委員として迎えて頂き、私にとって初めての海外でしたが、1986年にハワイで開催された第2回国際川崎病シンポジウムに参加させて頂きました。こうして重松先生とお話する機会も増え、ご一緒にお酒を飲む機会も多くなりました。その度に「重松先生はお酒が強い」という印象をもっております。

そして、1991年に実施した「親の会」第10回総会記念事業の「川崎病の原因究明を願うチャリティー公演」にも出席して下さり、ご挨拶の中で「この疾患の本態究明は、日本の研究者の責務ともいえるのである」と強調されていました。

残念ながら財団法人日本心臓財団「川崎病原因究明委員会」は各分野における最先端の先生方の研究にも拘らず、川崎病の原因究明には到らず、第3次の川崎病原因究明対策委員会をもって解散となり、重松先生とも直接お話しする機会が少なくなりましたが、私たちの会報「やまびこ通信」はご自宅お送りしておりました。お会いするたびに、手を上げて「いつも会報ありがとうございます」と声をかけて下さいました。

その後、直接お会いする機会がなくなりましたが、一昨年私たち「親の会」が第62回保健文化賞を受賞した時、一番でお祝いの FAX を贈って送って下さったのは重松先生です。『祝 第62回保健文化賞受賞決定 長年にわたる「親の会」の活発な御活動に改めて敬意を表し、今回の受賞を心よりお喜び申し上げます。今後とも子供さん達の幸せと川崎病制圧のために御尽力をお願いします。重松逸造』と書かれていました。

そして、NPO 日本川崎病研究センター理事有志の先生方が祝賀会を企画して下さい、

重松先生のご年齢を考慮し、ご招待客として重松先生をお迎えするか正直迷いました。

「でもお祝いの FAX も頂いているのだから、無理ならばきっと先生の方からお断りなのでは」の思いで、ひとまずこわごとご自宅にお電話をしました。すると、「おめでとう、喜んで出席します」という元気な声が返ってきました。そして、祝賀会に参加して下さった重松先生は以前の重松先生と全く変らないお姿でした。手を上げて「おめでとう」と声をかけて下さり、心温まるお祝いのお言葉を頂戴すると共に「この疾患の本態究明は、日本の研究者の責務ともいえるのである」と強調されていました。

川崎病は原因不明のまま増え続けておりますが、この間の疫学調査、研究の積み重ねは大きな力となっています。その調査の一石を投じて下さいました重松逸造先生に心より感謝申し上げますと共にご冥福をお祈り申し上げます。



2010 年 11 月 30 日

「川崎病の子供をもつ親の会」保健文化賞受賞祝賀会に駆けつけて下さった重松先生
いつものようにお酒を楽しまれ参加の先生方と歓談
左 柳川洋先生・右 川崎富作先生禮子夫人



重松先生のご挨拶と表彰状

心配りと気遣いの親分

村松孝夫 公益財団法人日本心臓財団

私が重松先生を初めてお見受けしたのは、1981年、先生が日本循環器管理研究協議会の第16回総会会長をお務めになられた懇親会の会場でした。このとき私は、まだ日本心臓財団の職員ではなく、その後、まもなく勤務することになりました。

川崎病が大流行した1982年に日本心臓財団に川崎病原因究明委員会が設置され、その委員長に放射線影響研究所理事長の重松先生が就任されました。そして私がその事務方を担当することになりました。委員はといいますと、小児科、循環器内科、疫学、ウイルス学、細菌学、免疫学、生化学、病理学などさまざまな分野の日本を代表する研究者で構成されました。委員会は第一次、二次、三次委員会まで10年余り続けました。

委員長として専門家による会議を進めるなかで、先生は全体を眺めながら、時間の配分とどのタイミングでどの分野の研究者の意見を引き出すか、といったところまで気を使われ、心臓財団の職員として2年目の私に委員長席から目で合図を出され、そろそろ飲み物の準備を始めるように、食事の用意をするようになど微に入り細に渡りご指導下さいました。

また委員会には医学者のほかに新聞、テレビといったマスメディアの人たちにも参加を呼びかけ、その人たちも同じテーブルに着いてもらい、ときに意見を求め、同じ仲間として分け隔てなく接しられました。このことを意気を感じたメディアの人たちは社会に向けて、川崎病の現状を一層広く報道してくれるところとなりました。このように人を動かすことのできる先生でした。

「川崎病は日本で発見された病気だから、やる以上は3年以内にメドをつけないければ切腹ものだ、それぐらいの覚悟でやろう」と委員長を引き受けられました。その後30年経過した現在も未だ原因は解明されていません。原因が発見されていないことは大変残念ですが、このことに対して先生は疫学でなく易学者だったかなと言われ、厳しさの中にもとてもユーモアを持ち合わされておりました。

日本心臓財団では、1985年から日本と中国とで交互に循環器病の交流会議を行っておりました。中国から研究者を迎えた1987年、広島を訪れる機会があり、そのとき先生が理事長を務めておられた放射線影響研究所の視察と平和記念資料館見学、原爆慰霊碑に参拝、それと広島市長を表敬訪問する段取りもされ、臨機応変に采配を振るわれ、歓待していただいたこともありました。

ここ数年、お目にかかる機会がありませんでしたが、川崎病の子供をもつ親の会が保健文化賞を受賞された2010年、親の会の祝賀会にご出席され、久しぶりにお会いすることができました。そこでのご挨拶もいつもの重松節が飛び出しとてもお元気でした。これなら日野原重明先生のように100歳までも大丈夫と思っていましたが、今年1月に入院されているというお話を耳にし、このたびのご訃報、とても残念でなりません。でも私の中には心配り気遣いの親分という重松逸造先生のお姿が今なお強く残っています。

「温故創新」の言葉

日本公衆衛生協会 会長
多田羅浩三

重松逸造先生にはじめてお会いしたのは、1977年の秋、私の恩師の関悌四郎先生の追悼会の後、先生にご挨拶したときです。先生は「関先生は、日本の公衆衛生の新しい道を開いた」とおっしゃった。その言葉が、今も、昨日のこのように思い出されます。また先生は、私が1979年にイギリス、ケント大学に留学したときも、わざわざ大学のあるカンタベリーの町まで尋ねてくださり、ワレン教授にも会ってくださった。そして、帰国後、広島放射線影響研究所にお礼の挨拶にうかがったときには、おいしい蛸の刺身をご馳走になったことなど、あまりにも嬉しかったことが懐かしく思い出されます。

先生が、戦後のわが国の公衆衛生の世界にのこされた業績の大きさは、唯一、無二といっても過言ではありません。心からの敬意を表させていただきます。

関先生が開かれた道を継承された、朝倉新太郎先生も、藤本伊三郎先生も、小町喜男先生も、重松先生から絶大な支援を受けられ、輝くような業績を残されました。

私にとっても、先生の存在はあまりにも大きく、長年にわたっていただいたご指導、ご鞭撻に衷心より御礼申し上げます。私の今日あるは、文字どおり先生のお陰です。御礼の言葉ありません。関先生の追悼会の日に、先生にはじめてお会いすることができたのは、関先生の導きによるものと、勝手ながら私には思えてなりません。

先生とは、日本公衆衛生協会発行の雑誌の対談で、2010年の暮れに芳枝奥さまも一緒に、親しく話をさせていただくことができました。先生は大阪の天王寺で生まれ育ったこと、医学生時代にシベリア国境まで結核患者の調査に行かれたこと、奥さまは先生にはじめてお会いになった当時のことなど、印象深い話をいっぱいしてくださった。そして、お話しの最後に先生は、『論語』に『温故知新』という言葉があるが、これからは『温故創新』である。『古きをたずねて新しきをクリエイトする』という考えが必要です。ぜひ、その精神でやっていただきたい」とおっしゃった。遠くにばかりに目をやるのではなく、自らの世界の足許にこそ、新しい飛躍の生まれる素地があるということを、先生は教えてくれたのだと思います。「温故創新」の言葉、忘れません。先生、ありがとうございました。

重松逸造先生のこと

日本公衆衛生協会（日本公衆衛生学会事務局）

山 崎 幸 子

日本公衆衛生協会に私が就職した当時、日本公衆衛生学会理事長は重松峻夫先生でした。

協会で私が重松（峻夫）先生のことを話すと、前からいる周りの職員と話がかみ合わず
釈然としないことが多かったのですが、しばらくしてその理由がわかりました。

協会の中で重松先生と言えば、「重松逸造先生」のことだったのです。ご親戚ではないけれども、重松姓の理事長が 2 代続いたことになります。その時はお目にかかったことはありませんでしたが、「立派な偉い先生がいるのだ」と思っていました。

後に、重松逸造先生とは何度かお会いする機会があり、先生は私のようなものにも気を配りよく声をかけて下さいました。そこで普段は聞けないお話を伺いました。戦争中のラバウルでのこと。戦争から帰る時、野菜のオクラの種を日本に持ち帰ったこと。ノーベル賞受賞者の福井謙一氏とは高等学校で同級だったけれども、成績は重松先生が一番だったこと。ラジオ体操の朝の会と夕方の会のこと。それから奥さまとの馴初め。などなど楽しいお話ばかりでした。

また、日本公衆衛生雑誌の編集事務をしている中で、査読の早い先生方に共通する一つ
のことに気がつきました。それはどこかで重松逸造先生と関わりを持った先生方だということ
です。表に出ることではありませんが、重松先生の研究姿勢が脈々と沁みわたっている
ことを実感した次第です。

重松逸造先生 長い間 ありがとうございました。

ご冥福をお祈りいたします。

重松 逸造 先生を偲んで—— ハワイのビーチとR E R F

廣畑 富雄 九州大学医学部名誉教授

昨年（2011 年）の 1 月、日本疫学会の創立 20 周年の学術総会が札幌で開かれ、記念講演（田中平三教授と廣畑）の座長を、重松先生と青木先生がつとめて下さった。重松先生は、大変お元気そうに見えたとし、適切な発言をされていた。その一年以内にこの不幸があるとは、夢にも思わなかった。本当に痛恨の極みであり、ここに先生を偲ぶ拙文を記させて頂きたい。

私が九州大学医学部の助手の頃、重松先生はすでに公衆衛生の分野で、重きをなしておられた。重松先生と、最初の個人的な出会いは、変わった場所だが、ハワイのホノルルであった。当時は東西冷戦の最中で、米国の China Medical Board は、共産党に支配された中国大陆を支援するわけに行かない。China Medical Board が、発足間もないハワイ大学公衆衛生学部を、太平洋のハブにしようと支援していたのも、多分そういう事情からであろう。支援の一環として、初めに東京大学の小泉明先生が、公衆衛生学部に半年か 1 年行かれ、私とその次に、客員教官として半年間赴任した。

大学への責任はもちろんあるが、時間的に比較的余裕があった。それで日米の科学会議でハワイに来られた重松、鈴木、喜多村先生など 7—8 人の方々と、数日ご一緒したことがあった。重松先生には、ハワイ大学で講演をして頂いたり、ビーチに行ったり、夜バーベキューを楽しんだりした。ただビーチで、先生のめがねが浪にさらわれ、海中を探しても見つかるはずもなく、強い近眼？の先生だけに、大変心配した。ホテルに予備のめがねを置いておくと聞き、ほっとした記憶がある。

この追悼文をお読みの方には、疫学関係の方が多くと思うので、お許しを願って個人的なことも記してみると、この半年の間に、ハーバード大学 MacMahon 教授の、*Epidemiology: Principles and Methods* 「疫学：原理と方法」の翻訳をした（金子、額田教授と共著）。現在福島原発事故で、放射線発がんが大問題だが、*Radiation Carcinogenesis in Man* 「人の放射線発がん」の原稿を一応書き上げた。これはその後の R E R F での、重松先生とのつながりを作る事となる。この論文は、国際連合の放射線障害科学委員会の承認を得て、委員会名で発表した。線量単位の放射線発がんリスクを推計した、世界で初めての報告であった。

先生の業績は数多く、多くの優れた弟子を育てられた。放射線影響研究所（R E R F）の理事長を、随分長く勤められたと思う。私は R E R F の専門評議員、さらに研究監査をつとめ、重松先生とご一緒の機会が数多くあった。米国での会議にも、何回かご一緒した。先生が理事長をしておられた時代、放影研の運営は、いたってスムーズであったと思う。一つには、放影研のミッションは疫学中心であり、そのトップの理事長が、疫学の大家である重松先生というのは、スムーズな運営がなされた大きな原因であろう。今一つは、先生ご自身の人柄、包容力のある人柄のせいではないかと思う。先生の周りには、なんとなく明るく、楽しい雰囲気があった。いつだったか、放影研でのある会合で、あるアメリカ人が重松先生を評して（酔ってはいたが）、*He is my brother* 「彼は私の兄弟だ」と数回言うのを聞いた事がある。それだけ親近感を持っていたのだろう。

日本疫学会の巨星、重松先生のご冥福をお祈りし、この拙文を閉じたい。

1990 年、チェルノブイリの原発事故（1986 年）の 4 年後、チェルノブイリ事故救援活動を財団の事業として行わなければならなくなった。日本財団の笹川陽平氏が当時のソ連邦の要人と面会したとき、まだ冷戦状況であったアメリカとの協力よりは、被爆国である日本からの協力を強く求められ、医療関係の国際協力の実績のある笹川記念保健協力財団に協力の打診があった。元々、ハンセン病の国際協力を目指して 1974 年に設立されたこの財団は、ハンセン病に関してはかなりの知識が蓄積されていたが、放射線関係については全くといってよいほど無知で、対応は困難であった。

筆者は筑波大学社会医学系の教授であったが、人事について重松先生との交流があり、早速、放影研の先生に助力のお電話をさせていただいた。その後のお話を聞くと、1986 年 7 月に既に先生は米国とソ連の医療関係の橋渡し役であるアーマンド・ハマー氏とロサンゼルスで援助策について打ち合わせをされたとき、ハマー氏は笹川良一さんが助けてくれると言明されていたそうである。御快諾を頂いて、1990 年の 4 月に重松先生を委員長とするチェルノブイリ笹川医療協力委員会を立ち上げ、90 年 8 月に調査団が現地を訪問し、調査を行った。当時はまだソ連邦時代であり、モスクワでゴルバチョフ大統領の側近と打ち合わせ、夜行列車で、ゴメリをはじめ、キエフ、チェルノブイリ発電所などを調査した。短期間のうちに世界的な放射線医療関係者 11 名のメンバーを集めることができたのは、ひとえに先生の広い人脈の結果である。モスクワからゴメリへの夜行列車で冷房が故障し、先生のコンパートメントが暑くてかなわないということで、ウォッカやウイスキーで酒盛りをして体温を上げて過ごしたことも思い出される。

結果として、最も不安を抱えているのは周辺地区の母親であり、その子ども達の検診をすることがユニークかつ必要であると決め、超音波検査、ホールボディカウンターを積んだ検診バス 5 台を特別に注文し、翌年 4 月、成田からアントノフ輸送機で空輸した 5 台の検診車を赤の広場で贈呈し、医療協力事業がスタートした。重松先生は、調査ばかりするよりは住民のために役立つことをしようということで、不安を取り去るための具体的な援助のアプローチを主張された。笹川は人道的とだけ皮肉る科学者がいたが、いや人道的でかつ科学的だと云いかえされた先生を思い出す。

結果として、事故当時 0 歳から 10 歳の子ども達 20 万人の検診を 5 つのセンターで実施することができ、統一プロトコルでの厳密な検査を多くの子ども達に、対照群として事故後に生まれた子ども達の検診をした結果が、チェルノブイリ原発事故での現在までに科学的に証明された唯一のリスクである、子どもの甲状腺がんの増加の証明に役立つことが出来た。

もちろん多くの方々の努力の結果ではあるが、このプロジェクトの指揮を当初からの確に指導いただいた重松先生の努力なしには不可能な事業であった。毎年 1 回 1 年間の仕事を振り返ってシンポジウムをロシア、ウクライナ、ベラルーシの各地で行ったが、そのすべてに出席され、討議をリードして下さったのも重松先生であった。

改めて、先生と飲んだウォッカの味を思い出しつつ、先生のご冥福をお祈りしたい。



第1次調査団 中央は、アレクサンドル・ヤコブレフソ連大統領評議会委員（1990年8月）



重松先生の一言のおかげ

愛知県がんセンター名誉総長
富永 祐民

重松先生の一言のおかげ

標題の「重松先生の一言のおかげ」は私が昭和52年の4月に愛知県がんセンター研究所疫学部長になった直後に、重松先生と平山先生が飛行機で羽田から福岡空港へ向かわれた時に、全くがんの疫学的研究をやっていなかった私が青木国雄先生の後任の疫学部長になったために、私が話題になったらしく、重松先生が「うん、彼はなかなかいいよ」とほめていただいたようである。実は環境庁から愛知県がんセンターへ移る直前に、国立がんセンター疫学部長の平山先生にあいさつに出向き、「4月から愛知県がんセンターへ行くことになりました。先生が計画調査で喫煙の健康影響を明らかにされましたので、私はたばこ対策の推進に取り組むつもりです。できれば厚生省のがん研究助成金によるがんの疫学的研究班に参加させて下さいませんか」とお願いしたところ、平山先生は「すでに研究班のメンバーは決まっているし、愛知県でフィールドを作り、がんの疫学的研究をやられてから考えましょう」との返事で、まあ仕方がないことだとあきらめていた。ところが数日後に平山先生から電話があり、「先日重松さんが福岡へ向かう飛行機の中であなたのことをほめておられたので、班長協力者として参加しませんか。研究費も少し上げますよ」とのことであった。重松先生の一言で平山班に協力者として参加させてもらい、その後まじめに胆道がんの疫学的研究に取り組んだ。3年後に平山先生の班長の任期が終わった際、平山先生の推薦で協力者からいきなり班長に抜擢してもらった。平山班はいわば”平山ファミリー”で構成されていたので、その際、青木先生、廣畑先生、加美山先生らにも新たに班員になってもらった。重松先生の一言でうまくがんの疫学研究のスタートを切ることができたが、後日（二十数年後）に重松先生に上記の話をすると、「そうかねー」と全く覚えておられないようであった。重松先生の何気ない一言がその後の私の研究人生に大きな影響を与えたといえる。

重松先生には私が昭和49年から52年まで環境庁に医系技官として勤務し、大気汚染や重金属汚染による健康影響に関する仕事に従事していた時に研究班、審議会、専門委員会などで大変お世話になった。重松先生はイタイイタイ病にしろ、慢性ヒ素中毒にしろ、なにか問題がおこると、班長をお願いして調査研究をしていただいた。重松先生はどんな課題でも器用にこなされ、きちんと結果を出されたので、行政にとっては大変ありがたい先生であった。

「たばこを吸っていても健康になる研究をやってくださいよ」

1980年のWHOの世界保健デーのテーマが禁煙であったので、厚生省は喫煙に関するシンポジウムを開催した。その際、私もシンポジストとして喫煙の健康影響について講演した。重松先生は最前列に座って、だまって私の話を聞いておられたが、私の話が終わってから、個人的に「富永君。本当の公衆衛生は、禁煙で健康になるだけでなく、たばこを吸いながらも健康になることですよ。このような研究もぜひやって下さいよ」と恨めしそうに話された。重松先生は当時はたばこを吸っておられた。数年後に重松先生から電話

があり、「君、たばこを止めたら不整脈がでてきたよ」とこぼされた。重松先生はその後どうやら完全に禁煙されたようであるが、もしたばこを吸い続けておられたら94歳の長寿を全うされなかったのではないかと思う。小見出しの「たばこを吸っていても健康になる研究をやってくださいよ」のご要望にはまだ応えていない。平山先生の計画調査から緑黄色野菜を毎日摂取する喫煙者では緑黄色野菜をほとんど摂取しない喫煙者に較べて肺がんリスクが低い（ただし、非喫煙者と較べると高い）ことがわかっていた。その後緑黄色野菜の有効成分のβカロテンを喫煙者に投与する介入研究が世界各地で行われた。ところが1995年頃に多量(15-20mg/day)のベータカロテンの摂取群では逆に肺がんリスクが高くなるか全く無効という報告が続出し、βカロテンの摂取は中断された。低タール・低ニコチンたばこの肺がんリスクの低下も期待するほどにはなっていない。受動喫煙、たばこ代も考慮すると、現時点ではやはり禁煙が最も安全で、効果的な健康法であると言える。

生意気な後輩

岡山大学名誉教授 青山 英康

故重松逸造先生の訃報に接し、衷心より哀悼の意を表します。実は、先生と筆者との間には恩師大平昌彦名誉教授を介しての関係であり、直接的には「生意気な後輩」としてしか認識されていなかったと思われます。先生と恩師とは敗戦を激戦地ラバウルで海軍軍医として迎え、復員後アメリカの School of Public Health に留学した後に我が国の医学教育に公衆衛生学を導入した仲間として強い繋がりを持って居られました。金沢大学での経験は持って居られるものの主に行政畑での御活躍だった重松先生がハーバード出身であったのに対して、大平教授は産業医学の分野での活躍が中心になったのはピッツバーグ卒であったためと思われます。我々の世代は衛生学や法医学を含めて公衆衛生学も卒前学部教育においては「基礎医学」に包括されている中での公衆衛生学の教育・研究を担っていました。大学院の課程でようやく「社会医学」として独自の分野が形式的に認められるようになった今日でも、大多数の医師の理解を得られたとは言い難い状況が続いています。その意味で、我が国の保健・医療の中での「公衆衛生」については、平均寿命や乳幼児死亡率など世界一の保健水準と言う業績を挙げながら、「公衆衛生学」の教育・研究については国際的に後進国と言わざるを得ない位置付けしか得られていません。このような状況の中で、我々の世代こそが我が国の公衆衛生学の先達だとのプライドが強く、この分野の諸先輩には大変に失礼な態度をして来たと今になっては反省しきりと言った状況です。

重松先生との出会いについても、国立公衆衛生院やスモンの疫学調査研究班での恩師の「お伴」的な存在であったにも拘わらず、当時の公衆衛生院の統計学は「古典統計学」とも言うべきものであり、平山 雄先生の疫学についても「なにとはともあれ数を沢山集めていればよい」といった様相であり、研修生であったにも拘わらず「推計学」を武器にして痛烈な批判を行ったり、感染症に重点を置いたスモンの疫学調査班では、アメリカ帰りの若手研究者として未だ我が国では誰も口にさえしていなかった RCT とか二重盲検法を駆使した EBM/EBHC の実践によって、最初に「感染症よりも医原病を疑うべきでは・・・」と報告して、以後の研究会では発言の機会さえ奪われたこと等を思い出します。

放射線影響研究所に移られてからは、距離的には非常に近くなったにも拘わらずお逢いする機会がなくなり、公害や放射線被曝などでの出会いが増えれば、もっと嫌がられることが多かったのではないかと考えられます。

再度、衷心より哀悼の意を込めて追悼文に代えさせて戴きます。

重松先生のユーモア

福岡女子大学 吉村健清

重松先生の訃報に接したときに、日本の疫学の重鎮を失ったということをしみじみ感じました。心からご冥福をお祈り申し上げます。

重松先生と私の接点は、私の恩師の倉恒先生に連れられて、厚生省の研究班に出席していたとき、当時国立公衆衛生院の疫学部長でおられた重松先生に紹介頂いたのが最初の出会いである。当時、大学院生の私にとって、疫学のえらい先生という印象が強かった。その後、厚労省がスモン病の原因究明のために設置したスモン研究協議会で重松先生が疫学部会長を務められていた時に、いろいろご意見頂く機会があり、徐々にお話する機会が増え、国立公衆衛生院の75周年記念に重松先生と私の対談のビデオを撮るような事にまでなり、恐れ多いことであった。さらには、20数年前に開始された原子力作業従事者の疫学調査では、計画段階から重松先生のご指導で参加させて頂き、勉強の機会をいただき、今でも、このプロジェクトに関与させて頂いている。恩師倉恒先生とともに私にとってかけがえのない先生であった。

重松先生は、いろんな事に直言され、いつの言葉も核心をついており印象的であった。一方、面白いジョークも得意であった。このジョークを海外でも英語でお話しになり、多くの外国の友人達を楽しませられたのではと想像している。浜松町での会議後の懇親会で私に言われたジョークを紹介し、私にとっての先生の手向けとしたい。乾杯のあと、先生はある飲み物を片手に私に質問された。「吉村君、このカクテルの名前を知っているかね？」酒はもともと飲めない私に聞かれても判るはずはない。「先生、私はカクテルなど全く判りません」事実、私が知っているカクテルの名前は、「ヴァージンキラー」（どんなものかは知らないが、名前だけ）と「ブラッディ マリー」（私の友人がアメリカ出張の時に教えてくれたカクテルで今でもジンの量を自分に合わせて楽しんでいる）だけであった。「これはね、吉村君、シルクロードと言うんだよ」私の若いころからの夢である「シルクロード」という言葉にびっくりし、「何を混ぜて作るのですか？」と質問した。重松先生は「君、ウィスキーとウーロン茶だよ」怪訝な顔をしている私に向かって得意げにその心を語られた。「君、ウィスキーは西洋の飲み物だろう。ウーロン茶は中国だろう。西洋と東洋を結んだのがシルクロードだからね、君、飲んでみないかね」ここで、福岡への最終便に乗る時間になったため、ついに先生の「シルクロード」を味わう機会を逸した。このとき「シルクロード」を飲んでいれば、とくに憧れの「シルクロード」踏査が実現していたのかもしれない。

「シルクロード」の言葉を聞くたびに重松先生の得意げで、いたずらっ子のような表情を思い出すのである。

重松先生、いつまでも疫学の発展を見守っていて下さい。（了）2011年3月20日

重松逸造先生と私

稲葉 裕（実践女子大学生活科学部食生活科学科公衆衛生学研究室）

「最近、臨床家の間でも疫学に対する関心が高まってきている。臨床疫学が目標とする疾病自然史の理解に、疫学の果たす役割が改めて認識されたことにもよるが、一方臨床医学自身が、個々の患者の診療だけでなく、疾病予防の面も含めた地域医療の推進を目指すようになって、疫学的なアプローチの必要性が生じてきたともいえよう。」これは、1978年発行の「疫学——臨床家のための方法論」（講談社）の編著者としての重松先生の序文である。

当時私は大学院を修了して5年目で、恩師山本俊一先生のもとで、疫学の面白さが少しわかってきた頃であった。重松先生とは、1972年に開始された特定疾病対策で、山本先生が主任になった難病8疾患の全国疫学調査で初めてお会いしいろいろとご助言をいただいた。お二人の絶妙のコンビネーションが、難病研究を通して多くの疫学研究者を育てられたのだとの思量する。前記の本は当時の疫学研究に従事する者にとって、とても読みやすく、何回も参照したことを覚えている。とりわけ、この序文にあるように、当時疫学研究に関与された臨床家との対話によく利用させていただいた。

SMON（亜急性脊髄視神経症）の他、難治性肝炎などの難病、イタイイタイ病をはじめとする公害病、循環器疾患、放射線の健康影響などなど日本の疫学の、そして予防医学・公衆衛生学のリーダーとして、私の関連する領域のどこに行ってもお会いする先生であり、多くの著書からも学ばせていただいた。いつも穏やかなまなざしと、あのしわがれ声で若輩の私にも気さくに声をかけて下さったことが印象に残っている。

昨年もお会いして、100歳までは現役で活躍されと思っていただけに、今回の訃報には驚かされた。心から哀悼の意を表します。

2012年3月21日 記

先生の後進育成に対する
限りなく暖かいご配慮を忘れることができません

鳥取大学医学部社会医学講座環境予防医学分野
岸本拓治

重松先生に初めてお会いしたのは、1979年に国立公衆衛生院（現：国立保健医療科学院）での専攻課程医学科における疫学の講義を受講した時でした。今も鮮明に覚えています。講義に先立って読ませていただきました先生の著書「疫学とは何か 原因追究の科学」（講談社）の内容について質問した時のことです。著書の中の疫学における健康のとらえ方（健康観）について質問させていただきました。その時、「君、その質問は大切なことだ。」とご指摘して頂き、丁寧に先生のご経験を踏まえてお答えいただいたことに、感謝の気持ちを持って昨日のように覚えています。本当に先生は、後輩の育成に関しては、何を置いても最優先される先生でした。

また、当時の国立公衆衛生院の講義の中には、実習もありましたが、私たち専攻課程医学科受講者は、先生の指導の下に川崎病の症例対照研究に参加させていただきました。症例は、東京都内での罹患患者で、対照を性・年齢・居住校区をマッチさせて選び、実習生が家庭訪問して保護者にアンケート調査するというものでした。症例を都内の基幹病院における罹患患者を選んでくださったことや、院内での発表会には、川崎富作先生も参加して頂くという、今から考えると本当に中身の充実した実習でした。この実習の研究結果を、専攻課程医学科受講者全員の連名で日本衛生学会総会において発表したことも、先生のご指導のおかげでした。発表原稿を先生に見ていただいた時、厳しくも暖かく指導して頂いたことは、私の宝物となっています。先生の講義・実習により、私のその後の研究生活に関する羅針盤をお与え下さったように思います。

私どもに指導していただきました先生の教育・研究に対する哲学は、「真理は、現実の健康問題と病んだ人々から学ぶ中に存在する」というものであった様に思われます。先生は、学問に対する真摯な姿勢と人材教育に対する限らない配慮と努力を、生涯貫かれました。

先生のご逝去は、私ども後輩にとりまして、かけがえの無い損失であり、哀惜の情を禁じえないところであります。先生の疫学という学問に寄せられた限りなき情熱に思いを新たに、謹んで敬弔の意を表するとともに、先生のご冥福をお祈りいたします。

重松逸造先生の思い出

秋葉澄伯

重松逸造先生のお名前を初めて知ったのは、私が札幌医大の大学院（衛生学）に入って、疫学とその応用を読まされたときだと思います。その時には、将来、重松先生に直接お会いしてお話することが有ろうとは夢にも思っていませんでした。私は1981年から1982年に広島放射線影響研究所で客員研究員として一年間過ごし、その間に重松先生が理事長として赴任されました。放影研時代、理事長室に呼ばれて重松先生とお話をしていると、普段頭の血の巡りが悪くて人の名前をなかなか思い出せない私が、不思議なことに人の名前を思い出すことができるのに驚いたことがあります。晩年の重松先生は、奥様の目を盗んでお酒を飲まれるのが何よりの楽しみといった風情で、私も何度かお付き合いいたしました。一度などは、会議が4時過ぎに終わり、そのまま、飲みに行こうと言われて、まだ、開店前の酒店にお願いして飲み始めたこともありました。奥様には、おそらく、秋葉は重松先生が奥様の目を盗んでお酒を飲む機会を増やしている大変悪い奴と睨まれていたのではないかと思います。

昨年、重松先生が入院されて、お加減が悪くなり、面会も限られた方だけに許されているようだと言った時、もう重松先生と直接お話をすることはできないのだと悟り、大変寂しい気持ちとなりました。私が放射線関連の講演会の座長をする場合も、最後の締めは重松先生にお願いするのが常でしたが、それもできなくなってしまいました。

現在、私が関与しています我が国の放射線作業者の追跡調査、また、中国広東省の陽江市の高自然放射線地域住民の疫学調査は、重松先生のご命令で調査・研究に加わったものです。残念ながら、いまだに十分に期待にお答えできる結果を出せないでおりますが、次の世代に引き継ぐ前に、国際的な評価に耐えられる仕事にできればと思っております。

最後になりましたが、弟子の末端に名前を連ねさせていただいているかどうか分からない私に、追悼の文章を書く機会を与えていただきました柳川先生、児玉先生をはじめとします実行委員会みなさまに感謝いたします。

重松逸造先生を偲んで

三重県津市在住

笠島 茂

伊賀神戸に向かう近鉄特急の車中で、去る二月に歴史の世界へと旅立たれた重松先生を偲び、私の心にいらっしゃる先生の思い出の数々を回想しております。私の研究生生活の中で先生から受けた深いご恩のいくつかを記して追悼の文とさせていただきます。

留学での思い出

重松先生の最初の思い出は、私が富山医薬大の大学院生でありイギリスに留学しようとしていた時のことです。私の恩師、鏡森教授が重松先生に留学のことでご相談頂いたことをよく憶えています。鏡森先生は重松先生の門弟であります。この時、ロンドン大学の・マーモット先生の教室でお世話になり、故ローズ先生がご存命で何度かご指導をたまわる幸運も得ました。この留学は私のその後の公衆衛生学研究にとって決定的なものでしたが、そのきっかけは重松先生につくって頂いたものと深く感謝しています。

論文での思い出

富山医薬大で始めた労働時間と心筋梗塞との関係についての研究は、私にとって疫学の本質的な部分が見えてきた貴重な経験でした。しかし、その論文作成にあたっては、いくつかのジャーナルでリジェクトされ、行き詰まっていました。そこで鏡森先生のご配慮で重松先生と児玉先生に論文の草稿をみて頂きました。その時の貴重なコメントをもとに書きかえて暫く後に漸く医学誌に掲載されることになりました(BMJ1998)。この論文はマーモット先生の教室への留学とともに今日の私にとって重要な意味を持っています。

京都での思い出

平成12年に、京大で社会健康医学系専攻が創設され、理論疫学分野（現在の医療疫学分野）の開講時に助教授として赴任しました。その時、重松先生が祝宴を催して下さり、励ましのお言葉を頂きました。大変、不謹慎なことに先生からの祝辞ははっきりとは憶えていません。「お前はこれからどんな研究をするつもりか」と重松先生にお訊ねいただき、「経済学と疫学との相互干渉モデルを構築するつもりです」とおこたえしたのですが、その内容についての討論で緊張していたためだと思います。実のところ、京大以降の研究の骨格はこの時の重松先生との問答が基礎になっています。

保健医療科学院での思い出

京都で暫く研究と教育に専念した後、公衆衛生院から改組されて間もない、厚労省の保健医療科学院に移動しました。重松先生が疫学部初代部長であられた公衆衛生院を源流とす

る研究所から招いて頂いたことに大きな誇りを持ちました。保健医療科学院への移動前後から、自分の研究のキーワードは、経済学、疫学に、はじめて「行政」が加わりました。疫学における個と集団との調和をはかる場としての行政を考えるようになったのですが、私には、この研究の発展にも重松先生のお導きがあったと思っています。私にとって行政情報に基づく疫学の構築は現在に至るテーマです。

最近の思い出

平成 22 年に、私は三重大大学の公衆衛生学教室に移動しましたが、その前後から、重松先生と私的なお話をさせて頂く機会がとても増えました。埼玉県立大学での日本疫学会学術集会のとき、中目黒のご自宅まで自家用車でおおくりしましたが、その時のことが昨日のことのようです。先生ご自身、車がとてもお好きでしたが当時はもう運転はなさっていなかったはずです。しかし、埼玉からご自宅までナビよりもずっと詳しい道案内をしていただきました。

重松先生には三重大大学教授に着任したことを、誰よりも喜んで頂けたように思います。私のようにできの悪い孫弟子のことに紙面にあらわせない思いやりを頂戴いたしました。先生からたまわりましたお祝いの書状の達筆は私にとって終生の宝物です。

合掌

平成 24 年 3 月

「Field Epidemiology」についてのビデオ教材

大月邦夫（元群馬県衛生環境研究所長）

厚生省の地域保健推進特別事業：『ビデオの活用による地方衛生研究所の実践的な疫学に関する研修機能の強化・拡大事業』による平成9年度研修講座が平成10年3月17日（火）、前橋市上毛会館で開催され、国立公衆衛生院名誉教授、（財）放射線影響研究所名誉顧問重松逸造先生から「Field Epidemiology その基礎と実際」と題した基調講演（保健所、研究所、本庁勤務の技術系幹部職員70人受講）がビデオ撮影とともに行われた。

本事業は、先駆的保健活動等支援事業（国庫10/10）として平成9年8月に追加募集があり、急遽実施計画書を提出、11月採用内示、さらに、10年3月9日、国庫とりこみのための補正予算が県議会で議決承認、以後事業の実施、という異常つづきの事業展開であった。

計画書（事業の実施目的）では、『地域保健活動においては、専門家のリーダーシップが最も重要である。地域保健に関する基本的指針では、地方衛生研究所に当該地域における地域保健関係者に対する研修を具体的行うことを求めている。昨年（平成8年）来、猛威をふるっている腸管出血性大腸菌感染症の流行においても、その感染源や感染経路の究明、的確な防疫対策の展開には、「疫学」のわかる「防疫専門家」が不可欠であり、そうした意味でCDCのE I S（Epidemic Intelligence Service）が注目され、早速国立感染症研究所から2人の研修生が米国に派遣されたという。E I S的な職員は、各地域（できれば第2次保健医療圏レベル）毎に必要であり、そのための研修システムの確立が喫緊の課題となっている。本事業では いわば“sandal Epidemiologist”の養成を目的とする疫学研修講座：基礎コースを開設し、その講義内容をビデオに録画し、教材として編集するとともに、テキスト（印刷媒体；参考資料等）も作成して、自主学習型教材を制作する。さらにこの教材をプリントし、各保健所や衛生研究所等に配布し、その多面的な活用によって「疫学」研修機能の強化・拡大を図りたい。』と企画した。

「疫学」を系統的に勉強したことのないエーケン所長のこのような思いつきに対し、大御所重松先生は、救世主のように、当所の「窮状」を察知し、その企画のすべてを真摯に対応していただき、年度末に急遽開設した研修講座へのご来県がご多忙な日程を繰り合わせて実現したことは、未だに信じがたい奇跡であった。先生は、M. B. Gregg の Field Epidemiologyを紹介されながら、「現地疫学の基礎と実際」をわかりやすくお話された。

また、折角の講演の理解を深めるべく、テキスト（後の研修ビデオノート）用の原稿として、レジュメおよび講演内容；OHP原稿55枚及び講師紹介用の資料（略歴、参考図書、文献、著書・論文、名言、写真）の事前提供等、失礼も省みず無茶ともいふべき要望や注文に対してもそのすべてを誠実にお応えいただき、感謝感激の極みでした。

さらに、学習用補助教材（参考図書）の作成についても、重松先生の格別なるご高配、ご指導をいただき、平成9年度は「疫学よもやま話」、平成10年度は「続・疫学よもやま話」の著書を当研究所で発行させていただき、受講者をはじめ県内の保健所、医療短期大学など関係機関、全国の地研、公衆衛生院等にも提供し、好評を博していることも特記すべきことである。

（添付した写真は、平成10年3月17日、実践的な疫学研修講座における重松先生ご夫妻と受講生の記念写真です。）

実践的な疫学研修講座; 自主学習型教材ビデオ (全50巻) 及び研修ビデオノート (23冊)

(平成9～12年度厚生省地域保健推進特別事業 制作: 群馬県衛生環境研究所)

1 平成9年度制作教材(1097)

[1097-101] 「Field Epidemiology: その基礎と実際」

国立公衆衛生院名誉教授

(財)放射線影響研究所名誉顧問 重松逸造

1) 第1巻; 疫学の基礎と方法

1. 疫学の基礎: 疫学の歴史、定義、目的、原則についての概説
2. 疫学の方法: 疫学方法論の原則(記述・分析・実験疫学的方法) (36分)

2) 第2巻; Field Epidemiology 現地疫学

1. Field Epidemiology 現地疫学とは何か; Michael B. Greggらの定義
2. 流行調査の原則①流行の発生と規模の認知 ②流行状況の検討
(応急調査) ③流行原因の把握 ④防疫

(21分)

3) 第3巻; 実例編

1. 川崎病: 疫学研究における調査手順を現地疫学の観点から例示。
2. イタイイタイ病: 原因追求と因果関係推定の実例
3. スモン: 原因としてキノホルムが決定された過程 (41分)

4) 第4巻; これからのField Epidemiology

1. これからのField Epidemiology: モニタリングとサーベイランス
レコードリンケージ、個人曝露量、分子疫学などについて

Q & A: ①サンプリング

②感染症サーベイランスと変異図表の利用 (26分)

5) 研修ビデオノート; 「Field Epidemiology: その基礎と実際」 38頁

国立公衆衛生院名誉教授

(財)放射線影響研究所名誉顧問 重松逸造

6) 参考図書; 疫学よもやま話 重松逸造著 162頁 群馬県衛生環境研究所刊 1998年3月

2 平成10年度制作教材(1098)

[1098-201] 「Field Epidemiologyの展開」

国立公衆衛生院名誉教授 重松逸造

1) 第1巻; 1. 疫学: 集団観察の科学・公衆衛生学の方法論-疫学の方法-

①疫学の方法 ②流行調査の原則

2. 実例編A: コレラ(①カイ二乗テスト、②オッズ比) (66分)

2) 第2巻; 3. 実例編B: 食中毒における原因食品推定法

(①カイ二乗テスト、②相対リスク、③オッズ比)

4. 実例編C: O-157(堺市学童集団下痢症)

5. 実例編D: インフルエンザ (47分)

3) 研修ビデオノート; 「Field Epidemiologyの展開」 31頁

国立公衆衛生院名誉教授 重松逸造

4) 参考図書; 続疫学よもやま話 重松逸造著 142頁 群馬県衛生環境研究所刊 1999年3月.



重松先生は私が昭和大学に就職する以前の1984年4月から公衆衛生学教室の客員教授として在籍していらっしゃいました。故安西 定先生が教授として赴任されて3年後のことでした。先生は次に教授として就任された川口 毅先生の恩師ということもあり、引き続き客員教授をお引き受け下さいました。そして川口先生が退任される2006年3月までの21年間、長きに渡り客員教授として、教室員、学生に多くのご助言、ご指導をいただきました。

元教授の安西先生は1927年生まれで、1917年生まれの重松先生より10歳年下でしたが、時には尊敬する恩師のように、時には親しい友達のように話していらっしゃったことが思い出されます。

川口先生時代には、毎年医学部での公衆衛生学の最終講義をお願いしておりました。先生も快くお引き受け下さり「予見医学」と題して講義をしていただきました。私も毎年、先生の講義を学生と一緒に拝聴させていただいたのですが、今でも印象に残っているのは「上医、中医、下医」の孫思邈の著の一説です。

また、先生のご自宅と昭和大学はそう近い距離でもないのですが、ご自宅のある目黒の八雲から、ある時などは、大学まで歩いて講義に来て下さいました。80歳を過ぎてなお、その健脚ぶりには本当に驚かされました。数年前から講義の形態がスライドからパワーポイントに移行されておりますが、先生もパワーポイントをいち早く取り入れ、わざわざこちらまで作成しにいらっしゃったこともありました。時代の進歩にも遅れることなく、最先端でご活躍されていたところは、本当に頭の下がる思いがしました。

先生と最後にお会いしたのは、昨年の北海道での疫学会でした。現在は客員教授を退かれており、あまりお会いすることもなかったのですが、久しぶりにお目にかかり、お元気そうなお姿を拝見したばかりでしたのに、本当に残念でなりません。先生から「もうこれは絶版になって、手に入りませんよ。」と言われ、『疫学とはなにか』という本を頂きました。今でも大切にしております。

先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

昭和大学公衆衛生学川口教授退官
記念パーティにて重松先生の祝辞
(目黒雅叙園シリウスの間)

2006. 2. 25



まえがき

表題の文字をご覧になると、全く無名な私と重松先生の様な高名な学者がどんな関係？と皆様は不思議に思われると推察します。それは先生が我武者羅な若者を何とか世間に出して下さる名人とでもまず言っておきましょう。私は米国MITとさらに五年後ボストン大学医学・歯学部大学院に各2年ずつ留学しました。アメリカでリポプロテイン代謝の研究をしていました。帰国後、都の老人研に入り（1973年）、太田邦夫先生の指示で「集団老化の指標」に取り組むことになりました。WHO、FAOの資料を漁るうちに、南太平洋に浮かぶトンガ王国には、肥満があるのに高血圧症は終生にわたってない、という情報が目に入りました。そこで、肥満、高血圧症の分布をキーワードに死亡率や食生活との関係などを探ってみるため、トンガ王国に出かけてみよう計画書をつくり、太田邦夫先生に提出しました。太田邦夫先生は良いとも悪いとも言わずに、「君が信頼できる人に相談して組織化しなさい。」といわれました。そこで東大第一内科出身で医科学研究所附属病院院長をされていた真下啓明先生に相談にゆきました。真下啓明先生は計画書に目をとおして、すぐ電話をとりあげて重松先生のアポイントメントとって下さって、同じ敷地内にある、公衆衛生院の重松先生にお会いできました。（重松先生と真下先生は高校、大学医学部と同級。軍人としても同じ地であわや玉砕かということでした。）そしてその日のうちに、お役所への届出、名目上の主催機関、上納金？などすべての構想が決まり、順次各所に出向いて、また逐次報告して、短期間に組織化が完了しました。あとは資金のことですが、大変苦勞をしましたが、それは私事です。

重松先生の持っておられた夢の大きさ、華やかさと果てしない寛容の精神が夢のようなプロジェクトを実現させるのだと思いました。それはまた本文に登場されます太田邦夫先生も同じことで、この話を私が持ち出したとき、太田先生の方は、少し口が悪く、「世間に二階から目薬と云う諺があるが、横野の場合は、二十階から目薬」だと言われたときには、私は身の置き場のない思いをしました。それでもポケットマネーはちゃんと頂きました。弟子を育てるコツですね。

後先になりますが、このように以下の研究のお膳立てを全てして下さったのは重松先生だったのです。ここで感謝を込めて、先生のご冥福をお祈りいたします。

紙数が少ないので、以下、大雑把な話になりますが……

トンガ王国調査研究の概要

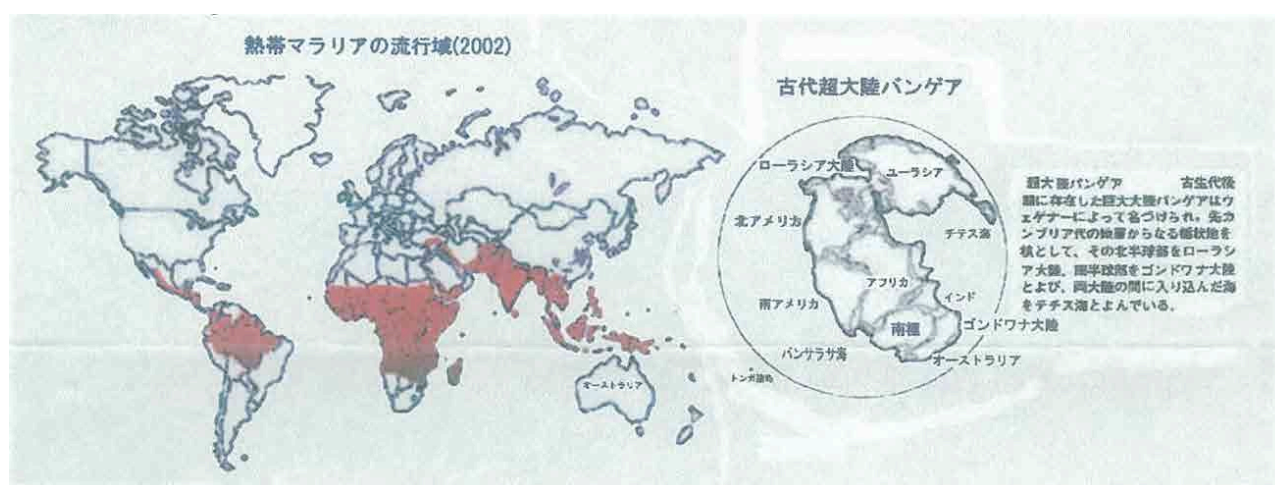
「トンガの老人が長生きなのは心臓病、高血圧症、マラリア感染がないから」です。加えて小児の死亡率が先進国並みに低いのです。これでは予想が全くはずれてしまいました。しかしながらも、断続的に約5年間続けての一応の結論を簡単に話しますと、当時、男女ともやや肥満傾向のトンガの人たちに（当時:1976年）心臓病、高血圧症は殆どありませんでした（心電図検査）。加えて、小児の死亡率も世界でも極めて低い部位に属する国（WHO資料）と云う様な、通常平均寿命延長の条件の存在を確認しました。肥満については、ローレル指数で日本人と比較すると、明らかにトンガ人は肥満傾向です。しかし皮下脂肪厚計測値（現地で計測）を加えて比較すると男女とも、30歳～40歳代では差がありません。トンガ人の肥満は40歳代男女、50歳代男にありました。そして、トンガ人では70歳代になると肥満がなくなります。

筆者はその後、トンガにはマラリアが存在しないという聞き込み（ブローカ公衆衛生局長）を頼りに、文献学的な研究を続けて、パプアニューギニア以東の太平洋域には、オーストラリア大陸の大陸棚に阻まれて、マラリアの流行はないという結論に至りました、現在でも世界で最も人命を奪うマラリアが存在しないことが、トンガ王国の、長寿の第一の理由であろうと考えました。マラリアは、第一宿主のハ

マダラ蚊から第二宿主のヒトに唾液と共に子虫を移し、赤血球の中で無性生殖を行い、破裂するまで増殖します。その間、人が蚊に刺されると、第一宿主（蚊）に戻り一部が有性生殖を行って、新たに子虫を増やし、子虫は蚊の唾液腺に集まります。この宿主のハマダラ蚊は、ニューギニア以東のオーストラリア大陸の大陸棚に浮かぶ島々には、元来いないのです。つまりハマダラ蚊という種が発生しない前に、バンゲア大陸から分離したためと推定されます。デング熱を媒介する熱帯シマ蚊はどっさりいます。そしてマラリア伝播の東限であるニューギニアでは不思議な現象、つまりヒトのマラリアに対する免疫学的寛容が起こっていて、年齢とともに死亡率の低下が見られています。これらの事実は、太古に地球上で全部の大陸が融合していて、バンゲア大陸と呼ばれていた頃が続いて、南極大陸、オーストラリア大陸の分離、インド亜大陸のユーラシア大陸への衝突（ヒマラヤ形成）などの出来事の後、形成されたチテス海という赤道上の暖かい海で、生命が誕生し、原生動物の胞虫類であるマラリアもずっと下って、いまから十九億年前（真核生物が誕生）～五億年前（多細胞生物が誕生）の間の後期の頃発生し、その領域に閉じ込められたという説に関係がありそうです。また、西のマラリア伝播のバリアーはアフリカ大陸東岸赤道直下から、トルコにいたる地域の住民に40%の率で現存する遺伝病の鎌状赤血球症の子供がマラリアに強い抵抗性をもつことに原因し、それより以西への伝播が阻止されたといわれます。

まとめ

因みに、現在世界で、子供の命を奪う一番の原因はマラリアです。WHOの推計では、全世界で1年間に3億～5億人の患者、150万人～270万人の死者があると報告されています。また、そのうちの90%はアフリカ熱帯地方であると報告されています。二番目の原因は麻疹、三番目はインフルエンザであり、いずれもトンガでは流行は稀なのです。日本でも、もう一息の長寿を阻んでいるのは、老人のインフルエンザによる肺炎です（死亡原因第四位）。それにしても日本は長寿の国になりました。



横野靖（ヨコノ・オサム）

（元東大病院第一内科医師、元都立老人総合研究所栄養学室長、元東京外国語大学教授）

重松先生と結核対策

遠藤昌一

元結核予防会医師

先生は保健の分野で広い視野をお持ちでした。タイトルに重松先生と結核対策としましたが、この文では私の存じ上げている事だけを申し上げます。

1960 年代台と思いますが、重松先生、故御園生圭輔先生、島尾忠男先生、柳川洋先生などが主となり、都道府県および企業の結核対策に興味を持たれる保健関係の方々と厚生科学研究費を頂き、結核対策向上の研究会を数年にわたり持ちました。日本では当時結核対策には早期発見・早期治療が主な課題でありまして、研究会は集団検診受信率向上を目指していました。未受診者の多い市町村や企業を対象と、地域 3 分割 3 年一巡方式や、未受診者勧誘など方策を参加研究者の地域や団体に試施行してもらい、その結果を全国での施行を勧奨し、一定の効果を収めました。ところが受診率が向上しても有病率や罹患率が下がらない地域が沢山あったのです。そこで治療を向上おさせるため、患者管理即ち規則的治療の徹底を課題にしたのです。重松先生はこの時、アメリカで患者管理のために使われていたヴィジブルカード方式を提案され、これが厚生省で採用され、全国の保健所で採用され、保健所結核担当者は管理に便利に使う事ができました。それは結核患者ひとりひとりに個人別のカードを作り、追跡順に一枚ごとに 7mm 位ずらして並べ、一番手前のカードから取れば、簡単にその時追跡必要な患者のカードを取りだすことができると言うものです。カードに色の付いたシグナルを付ければ患者の種類によって分類するのも容易です。重松先生はアメリカで高度な学問的な事だけでなく、こんな現場の業務を便利にする、しかもわが国に適用させることが可能な方策を観察されてこられたのかと感服致しました。その後私が 1973 年に WHO 西太平洋地域事務局の結核チームに参加し、グアムを訪れたとき、保健所でこのヴィジブルカードを使っているのを見て、先生を思い出し、感無量でした。

先生は研究会の休憩時間に茶目っ気のある話をよくなさり、皆を和ませてくれました。例えば 壱万円札が初めて出たとき、あまり高額なので釣銭が問題でした。先生ご自身でなさったのかどうか分かりませんが、バスがお釣りを持っていないのを見越して、壱万円札をひらひらさせて降りてしまったとか。宴会の後、交番の後ろで立小便をしたとか。

私が WHO を辞め、栃木県に就職をした頃、先生は自治医大の柳川先生を訪れ、その際宇都宮で会食を致しました。そこで私に放射線影響研究所に来ないかとお誘いがありました。しかし私は既に栃木県に就職してしまい、それも就職直後でしたので、とても魅力的なお誘いでしたがお断り申し上げました。広島に行って重松先生の下で働いたらどんな人生になっていたかと思います。

サルコイドーシスと重松先生

結核予防会結核研究所名誉所長 岩井和郎

我が国でそれ迄国民病とされていた結核が漸く減少し始めた頃、結核に良く似た組織像を示すサルコイドーシス（サ症）という妙な病気が日本でもあるらしいということが問題となり、我が国でサルコイドーシス臨時疫学研究班が形成されたのは1960年であった。班長は公衆衛生院長の野辺地慶三先生で、結核との関連が問題にもなっていたこともあり、公衆衛生院から重松逸造先生、結核予防会結核研究所の岡治道先生や岩崎竜郎先生、結核疫学的研究の重鎮だった国鉄保健管理所長千葉保之先生ら（いずれも故）がメンバーとして発足し、サ症の全国調査が手弁当で始まった。若手として国鉄保健管理所からは(故)細田裕、東大3内から三上理一郎、結核研究所からは岩井などがその末席を穢していた。

その後厚生省の難病研究8班が我が国で初めて結成された時期に、重松先生と千葉先生が厚生省に働きかけてサ症を難病の仲間入りをさせ、その後サ症は形を変えつつ今日まで研究班としての研究活動が続けている。当時サ症で死ぬことはあまりないのに難病と言えるのかという疑問も出されていたが、原因不明の疾患であり決して少なくない慢性疾患であると主張して難病研究班の一端に加わることが出来たのは、このお二人の先生の陰の努力に負うところが大きかったものと思われる。

当時国鉄保健管理所は山ノ手線原宿の線路沿いの高台にあり、ここで全国から集められてサ症報告例のデーターを、まだコンピューターが無かった時代のタナックというパンチカード・ソーティングマシーンに入れて、カタカタという喧音を出しながら集計をしていたことを思い出す。当時は関東中央病院の(故)小須田達夫先生も加わって、研究室の雰囲気の中で和気あいあいと仕事が続けられていた。そしてそこに時々ひょっこりと重松先生が現れて、どうだ進捗しているかなどと陣中見舞かたがた我々を叱咤激励されていかれることも多かったことが思い出される。

重松先生は理論的先端的な研究者というよりもデーターに基づいての現実的な思考をされるのが得意な先生であつたと思われ、放射線影響研究所で日米の研究者を束ねながらそのリスク評価に力を注がれ、どちらの立場にも成程と納得させられる結果をまとめられたのではないかと推定される。筆者はその後ディーゼル排ガス粒子の健康影響を調べることになって、動物実験の成績を基盤にしてその人へのリスクを推定する研究に携わったが、その時知ったのは「計算されたリスク値がどの程度（10の何乗）以上であつたら人間の健康に害があると考えたらよいか」、「その値が社会生活の中での日常的リスクの値と比べてどの程度なら問題にならないか」という思考の上に算出された最大許容量の数値であつた。人間生きて地球上で生活する以上はリスクは0にはならないという考えで、重松先生はどの場所でもそれを端的に表現して話されるために、聞く人の耳目を峙たせるものがあつたのだらうと、今にして思うのである。

何だ、今頃そんなことに気付いたのかと墓の下で笑っておられるのではと思いつつ、改めて先生の御業績をたたえ、御冥福をお祈りする次第です。

重松先生と水俣病

九州看護福祉大学

学長 二塚 信

私は重松逸造先生にお目にかかる前に既にご著書「臨床家のための疫学」を大学院時代から座右に置き、非常勤講師をしていた諸学校で資料として使わせて頂いていた。先生は当時金沢大学でイタイイタイ病の疫学的研究等を着々と進めておられる頃であったと思う。従って、当時イタイイタイ病と並んで、学会でも社会的にも注目を集めていた水俣病に興味をおしめしになっていた。公衆衛生学会や衛生学会の私の発表に対して貴重なご助言を頂いた。その後、三木大臣の英断で、国立水俣病研究センター（当時）を現地に設立することになり、私は企画委員として特に疫学部の企画をたてる使命を感じた。私は直ちに放射線影響研究所の被爆者への綿密な追跡調査を水俣病に導入しようと考えた。放影研との決定的な違いは、個々の地域住民のメチル水銀摂取量のデータが殆んどないことであった。これは後の研究にも大きな障碍になった。しかし、研究センターの設立後も疫学部の重松先生のお弟子さんである玉城英彦君達と放影研を何度か訪問し、当時理事長であった重松先生から数々のご指導を受け、多数の出版物を頂いた。数年後、放影研で重松先生の下で成果を挙げておられた加藤寛先生を国水研の所長としてお迎えすることができた。加藤先生は幾つかの断片的な資料から、過去のメチル水銀曝露量の推定を行うべく金城芳英君とともに当時まだ新しい手法であった、ホッケースティックモデル等を用いて、その解析に大きなエネルギーを注いでおられたことを鮮明に記憶している。その後も環境庁（当時）の会議等で色々ご配慮を頂いた。私が印象に残っているのは、メチル水銀代謝の第一人者で、直接ご指導を頂いた東大の鈴木継美先生から、重松先生のことを「あの先生は化け物だよ。私などは到底太刀打ちできない」旨のことを伺ったことである。一般には重松先生は水俣病に係わっていらっしゃることを意外に思う方が多いと思い、ここに敢えて私ども水俣病の研究者も陰に陽に先生のご指導を受けたことを述べておきたかった。私も偉大な重松逸造先生からのご指導を頂いた弟子の末端に名前を連ねさせて頂くことが出来れば大変光栄である。先生のあの温かいお顔とお言葉に二度と接することが出来ないことは本当に淋しい。先生、誠に有難うございました。

「彼奴は暇だから…」

長崎大学 柴田義貞

重松逸造先生に初めてお目にかかったのは、1983年3月に国立水俣病研究センター（現、国立水俣病総合研究センター）で開かれた外部委員による研究評価の委員会の席でした。疫学研究部調査室長として1982年9月に東京大学工学部より転出してきました私は、責任者として疫学研究部の1982年度の研究成果を先生方にご説明しましたが、質疑応答の場で重松先生から開口一番いただいたお言葉は「相変わらずだな」でした。そこで私は、なぜ「相変わらず」にならざるを得ないかということを当時の疫学研究部を取り巻く研究環境の説明を通してお話したところ、矛先が環境庁に向けられ、私にはそれ以上のお答めはありませんでした。当時は水俣病認定を巡る裁判がいくつか行われており、赴任前に当時の所長から東京で伺った話とは全く異なり、疫学研究部が独自の疫学調査を行うことはきわめて困難な状況にありました。

その後縁あって、重松先生が理事長をされていた（財）放射線影響研究所（放影研）への転出話が持ち上がりました。当時は放影研の詳しいことは知らず、原爆被爆者の調査研究を行っている広島の日米共同研究機関という程度の知識しかありませんでした。話が具体化する中で、広島行きに少し躊躇するところがあり、それが重松先生のお耳にも入ったようで、長崎にも放影研の研究所があるからどうか、といった趣旨のご丁寧な長文のお手紙をいただきました。そこで意を決し、お世話になることとし、1986年9月1日付けで長崎支所疫学・生物統計部の副部長（部長代理）に採用していただきました。その後15ヶ月ほど米国の大学・研究所へ遊学させていただきましたが、1991年5月からはチェルノブイリ笹川医療協力プロジェクトに疫学担当として参加することになりました。参加の理由は、当時現地の関係者と日本側の研究者との間で健診に使用する質問紙の書式で合意が得られなかったということで、それを担当する日本側の人材探しの話が当プロジェクトの委員会で話題に上ったとき、重松先生が「長崎放影研に居る彼奴は暇だから」と仰って私の名前を挙げられたためのようなのです。

チェルノブイリ笹川医療協力プロジェクトで頻繁に現地を始めとして、会議等で海外に出かけることが多くなり、米国側の理事からは一言あったようですが、「不在でも部がきちんと回っていればよい」というようなお話をされて庇ってくださったという話が私の耳にも後日入ってきました。

チェルノブイリ笹川医療協力プロジェクトへの参加で得たものは大きく、それは東京電力福島第一原子力発電所の事故が及ぼす健康影響の予測および調査の実施においてきわめて有用であると確信しています。重松先生からのお手紙がなければ、またあの一言「彼奴は暇だから」がなければ、今日の私はありません。改めて感謝申し上げます。

最後になりましたが、謹んで重松逸造先生のご冥福をお祈り申し上げます。合掌

重松先生とイタイイタイ病研究

イタイイタイ病弁護団

団長 朝 倉 正 幸

イタイイタイ病被害者にとって、重松先生はなくてはならない存在でした。

イタイイタイ病被害者が三井金属鉱業株式会社を被告として訴訟を提起したのは、1968年（昭和43年）3月9日でした。

その少し前、東京在住の原告代理人は、昭和42年に厚生省の委託で構成された日本公衆衛生協会イ病研究班の班長をされており、国立公衆衛生院疫学部長でもあった重松先生をお訪ねし、イ病の原因についての調査研究についてお話を伺いました。

古色蒼然とした建物の疫学部長室で、すでに重鎮の趣を備えておられた重松先生を前にして、私たちは緊張して、神妙にお話を伺いました。

先生から疫学についてお教えを受けた後、イ病の原因について、カドミウムが関与していることは間違いなく、疫学的にも裏づけられる、と述べられました。疫学の権威者である先生からこのように言われ、大変心強く思いました。

1968年5月8日には、イ病に関する厚生省見解が発表されました。この厚生省見解に重松先生が大きく関与されていることは間違いありません。

「イタイイタイ病の本態は、カドミウムの慢性中毒により腎臓障害を生じ、次いで、骨軟化症を来し、これに妊娠・授乳・内分泌の変調・老化および栄養としてのカルシウムなどの不足が誘因となってイタイイタイ病という疾患を形成したものである。」

1971年6月30日、イ病訴訟の第一審判決が言い渡されました。判決は、原告側の請求を基本的に認めるものでした。

三井金属はこれを不服として控訴し、翌1972年7月20日には控訴審判決が言い渡されました。控訴人の控訴を棄却し、被控訴人の請求金額（被控訴人は控訴後、請求金額を2倍に拡張した）を認める画期的な判決でした。

その内容も、一審判決をさらに前進させたもので、「(本件は)疫学的因果関係によりイ病の原因物質はカドミウムであることが証明されたのであるから、臨床および病理学による解明によって、右証明が覆されないかぎり、法的因果関係の存在も是認されるべきである」として、公害訴訟における法的因果関係論を明確に宣言しています。

判決の翌日、被害者らは、三井金属鉱業本社で直接交渉を行い、イ病の原因と補償に関する誓約書、農業被害に関する誓約書および公害防止協定の3つの文書による合意を勝ち取りました。

これらは、公害訴訟として画期的成果であり、その後の粘り強いイ病被害者らの活動によって、今日までにこれらの合意はほぼ実現されました。

イ病の問題は、前記判決と合意によって収束するかに見えましたが、1975年（昭和50年）頃から政財界からの「巻き返し」が始まりました。

まず、文芸春秋2月号は、「イ病は幻の公害病か」を載せました。

次いで、1976年（昭和51年）4月6日、自民党政調審議会環境部会が、「カドミウム汚染問題に関する報告」を発表しましたが、そこには、少なくともイ病カドミウム原因説は学者の認めるところではない」との結論が記載されていて、被害地から驚きと抗議の

声があがりました。

この見解が誤りであることは、専門学者たちの指摘で明らかになりました。重松先生は、「程度の差こそあれ、カドミウムとの関連を否定する学者はほとんどいない」というのが正しい結論で、自民党にもそう説明した筈なのに極めて残念だ、と記者に述べています。

1976年（昭和51年）5月、WHOもカドミウムを肯定するに至りました。

有害物質の規制について国際的な基準作成を進めていたWHOのカドミウムに関する専門家会議の「環境保健基準」最終案には、「イ病への進展にはカドミウムが必要な役割を演じている」など、イ病とカドミウムの因果関係をはっきり認める項目が盛り込まれたのです。この専門家会議には、重松先生をはじめ13人が正式メンバーで参加していました。

これは、1968年にイ病を公害病と認定した日本の厚生省の判断や、イ病訴訟の判決に国際的な支持を与えたものです。

加えて、同じ頃、専門家会議の有力メンバーであるフリーベルグ博士が来日し、重松先生と対談を行い、WHO報告書の最終的な打ち合わせも行いました。

フリーベルグ博士は、記者の質問に、

「カドミウムがイ病の発現のために必要な原因であるとの点で完全に一致している。カドミウムはイ病の主要原因である」と発言しています。

このような流れの中で、環境庁の委託でカドミウムの人体影響について研究成果をとりまとめていた重松先生ら13人の専門家グループは、「イ病の発生には、カドミウムがなんらかの役割を果たしていることを否定する根拠は見当たらない」との報告書をまとめました。この報告書によって、「イ病の原因に関する厚生省見解を見直すという政財界の意図が挫折した」といってよいのです。

さらに1998年（平成10年）5月に、富山市で「イタイイタイ病とカドミウム環境汚染対策に関する国際シンポジウム」が開催されました。国内外からイ病に関する世界一流の研究者が参加しました。重松先生もその一人でした。

シンポジウムの対論の冒頭、司会者の一人フリーベルグ博士は、「まず、イ病の問題を取り上げたいと思います。皆さんに伺いたいのですが、イ病はカドミウムが原因なのでしょうか。・・・反対という方はいらっしゃいますか」と発言しました。重松先生をはじめ誰も反対する人はなく、「いらっしゃいませんね」と確認されました。この全員の賛成がこのシンポジウムのハイライトでした。

このようにして、現在では、イ病はカドミウムが原因で発症することが定説となっています。

公害における原因物質（科学的真実）が定説になるには、さまざまな障害を乗り越えなければなりませんが、イ病の場合、揺るがし得ないものとなっているのは、イ病被害者の存在と、その被害者が長い間たゆまず闘ってきたからに他なりません。その陰に重松先生をはじめとする良心的な研究者のお力があつたことを忘れてはならないと思います。

最後に、ICRPやIAEAなど、重松先生は、原発に関する機関に深く関与されていますが、3・11の福島原発事故についてどう思われていたのでしょうか。原発を廃止する方向しかないと、重松先生の厳かで力強い声が聞こえてくるような気がします。

清濁併せ呑み、かつ吐いた男

北川正信（富山医科薬科大学名誉教授）

重松逸造先生は“大物”ではあられたが、“偉大なる人物”とは言えず、その生涯には“毀誉褒貶相半ば”の評が付きまとう。

重松逸造先生が金沢大学に赴任されたのは、私が同大学を卒業して東京に去った後であったこともあり、お名前を知るのは私が母校の病理学講座助教授に招かれてイタイタイ病（イ病）の解剖もするようになってからである。私は足掛け7年の在職期間中に4例のイ病患者を解剖したが（1971~1976年）、それはちょうどイ病裁判の1審、2審、さらに、いわゆる“巻き返し”の時期と重なる。そして、当時私の上司であった梶川欣一郎教授（故人）が解剖症例を用いて被告企業に肩入れする態度に終始したため、私もその一味と目され、肩書きが新設の富山医薬大に移ってもイ病の解剖は許されなかった（1977年の2例は金沢医大で行われた）。

その後、患者団体の私に関する誤解が消え、医薬大で解剖が出来るようになった1979年からイ病の解剖を再開している。ちょうどそのタイミングに合わせるかのように、重松先生らのご努力で、環境庁（当時）から解剖を許されたご家族に弔慰金（10万円）が提供されることになった。重松先生が金沢大学ご赴任以来イ病問題の科学的解決に精力を注がれ、その正攻法の一つが病理解剖であることを認識されたことによるものと、私は深い敬意の念を懷いたものである。それに応じる意味でも、イ病の解剖には解剖料（学外からの場合徴収）を頂かない、つまり学用扱いとした。かくして、私の在任23年間に87例のイ病症例を重ねることができた。重松先生は既に金沢を去っておられ、専門も異なることとて、直接お会いして議論するという機会はなかったものの、私が東京大学に居た間の情報を得ておられたようで、私に対するご発言にはうそ偽りは無く、深甚の信頼をいただいていたと思っている。

ところが、である。イ病に関して疫学的根拠とそれを裏打ちする臓器内重金属の測定値から「イ病は上流の神岡鉱山から神通川に流されたカドミウムによる」ことが科学的に明示されてからも、環境庁（省）委託の日本公衆衛生協会（なる民間組織は私どもには不可解な存在であったが）の研究組織代表として、玉虫色の采配を執り続けられるのであった。患者認定審査会に影響を及ぼす「骨軟化症の病理組織学的判定基準」の設定にもお骨折りいただいたが、「出来るだけ認定患者を出したくない」という企業側の意図に沿うものになったし、研究組織では、恥じらいも無く産業界を代弁する土屋健三郎とのコンビで、研究組

織の継続を逆手に取って（未解決だから研究を続けなければならないとの詭弁で予算を取り）“非カドミ説”なるものを支援してやまず、正論の諸論文そっちのけでの研究組織中間報告書や対国際的擬態報告書を作成、さらには WHO のドキュメント「カドミウム」にさえも不当な介入を繰り返す土屋代表を牽制できず、いたずらに時間を失ったのであった。

「学者は政界や財界に関与してはならない」との先人の教えを、反面教師として示したのが重松さんであり、“世渡り上手”で、最後には放射線影響研究所理事長の席を得、かつそれを維持するために「人体影響は認められない」の発言に代表されるような自らを貶めるような振る舞いをされたのであった。憎めないお人柄ながら、総じて“立派な人であった”と褒めてもらえないのは大阪人であったためか、と言え、大阪人に咎められるであろう。晩年、環境省委託の研究組織班員の発表会の場に現れ、日当をもらっている姿は哀れであった。「人間あまり長生きすべきではない」とは、かつてのわが師吉田富三先生の言葉である。

我らが愛すべき重松先生、辛口の思い出になり申し訳ありません。しかし、先生の良い面が語られるだけでは物足りません。“清濁併せ呑むの肚”を持たれながら、それを肚の中に収めて置けなかったところが俗人、つまりわれわれと同じ人間であられ、親しみも持たれたのだと感じております。人懐っこい、あの眼鏡の底からの温顔で、「北川君らしいな…」とお許しをいただけるのではないかと想像しております。荒波を上手に乗り切られて逝かれました、安らかに眠りください。

註：私の人生経験からの定義

大物または有力者とは 表に出せない手段で人事や物事を決めてゆく人（英語の fixer の説明に dishonest or illegal methods で事を決めてゆく人 とあるのに相当）。この種の人は概して金権に媚びる。

偉人とは 私利私欲を抑えて、生来の良心・正義感によって世のため、他人のために尽くし、大きな成果を挙げた人。このような人には宗教心の篤い方が多い。

未だ見ぬ師 重松逸造先生についての 私の記憶

松 波 淳 一

私は昭和四〇年に弁護士となり、四二年秋からイタイイタイ病裁判に関与することになりました。素人の私には医学問題に関しての三人の先生と思う方がおられ、私はこれらの先生方のいわば門外の小僧の類になります。イタイイタイ病については石崎有信先生と重松先生が、スモンについては井形昭弘先生がそれらの方々です。石崎先生と井形先生には何回も教室へ伺って教えて頂きましたが、石崎先生と共にイタイイタイ病の疫学調査を完成された重松先生には、先生が昭和四一年に金沢大学教授から国立公衆衛生院疫学部長に転出されておられたために、残念ながら、一度もお会いする機会がなかったのです。

にもかかわらず、重松先生のお書きになった「序―疫学とは何か」（『最新医学』二六巻一〇号）、「公害と健康障害―序説」（『日本臨牀』三二巻六号）や「序説―疫学と臨床」（重松逸造編『疫学―臨床家のための方法論』講談社刊）、「疫学とは何か―原因追求の科学」（講談社刊）などは裁判中だけではなく、その後も、必要に応じて繰り返し読み、引用もさせて頂きました。このように習わぬ経を読んできていた門前の小僧でした。世間では、重松先生を非カドミウム説論者と評する人々もかなり多いようですが、確かに誤解を招きかねないこともないではありません。たとえば、『環境保健レポート』五六号（上巻）での「中間取りまとめ報告」の冒頭の「イタイイタイ病及び慢性カドミウム中毒に関する総合的研究班総括報告」の中で、総合的研究班会長重松逸造と総括委員会委員長土屋健三郎の連名で、「カドミウムの長期低濃度曝露が直ちに腎性骨軟化症の発症に結びつくという考え方を肯定することは現時点では困難である」とするような発言です。

しかし、非カドミウム説とする見方は、重松先生のイタイイタイ病に関する考え方、視点を捉えていないためであらうと思われます。

重松先生は、「イ病の発生機序は、現在でも不明な点が残されているが、そのことが疫学的に推定されていたイ病とカドミウムとの関係を否定することにはならない」が、「イ病の地域的限局性を矛盾なく説明するには、カドミウムが骨軟化症の素質をもつ人に長年作用して発病させたと考えている」（昭和五八年八月九日、富山市公会堂での講演録）と述べられており、その「骨軟化症の素質を持つ人」とは、「富山県で明治の終わりより大正の初めにかけて骨軟化症が全県的に多発していたことは有名で、この時の患者の年齢はピークは一〇歳台、そのほとんどが女子であった。イタイイタイ病は、これより約四〇年後に、年齢も約四〇歳遅れた五〇歳台をピークとしてやはり女子を中心として発症したわけだ、本病の骨所見については、昔、潜在的であった骨軟化症がこの地区の要因（前述のとおりカドミウムを指す）の働きで再発したと考えられる」（『世界大百科事典』二巻、平凡社、三四九頁）と理解されておられるのである。即ち、重松先生はイタイイタイ病の発症にカドミウムが関与することは疫学的に否定出来ないとされるものの、発病には、潜在的な骨軟化症の素質が必要とされている。言うなれば、カドミウムの触媒的作用によってイタイイタイ病が発症することになるというのであろう。が、これに関しては、門前の小僧には納得できないものがあります。

しかし、先生のお考えは、イ病カドミウム説にとっても非カドミウム説にとっても、それらの説と矛盾するものではなく、いわば双方の説を許容出来る両棲類的な立場と受け取られるところがあるためや、公衆衛生行政面でのボス的な立場を兼ねておられることもあって、双方の説の論者や官僚からも、頼りにされがちであった印象を受けていました。

ところで、私にとって雲の上の方であられた重松先生との間に文書上での交流が始まったのは、平成一三年からであったと記憶しています。

というのは、私は平成九年より定年となる一一年まで新潟大学理学部での非常勤講師に就いていたことから、裁判後のイタイイタイ病の研究成果を『環境保健レポート』などで学んでいたのですが、イタイイタイ病裁判の経緯などを一般向けに書くことを地元の出版社から勧められて、平成一三年に『イタイイタイ病の記憶』（桂書房）などを出版し、その一部を重松先生に贈呈したのが切っ掛けでした。

それ以来、短い小論を書く度にお届けし、その度毎に、墨の薫りも残っているようなお便りを頂いて感激しました。そのお便りの中に「私は昭和三十七年より萩野昇博士を通じてイ病問題に関係することになりました。イタイイタイ病問題で「河野稔氏（学生時代の友人）や富田国男氏（大学同級生）」と出会うことになったのは誠に偶然でした」と述べられていたばかりか、「厚生省見解」をまとめた厚生省初代公害課長橋本道夫氏とはハーバード大学留学で同期であったことも知り、その奇遇さに驚かされたものです。

その後にお届けした平成二〇年五月出版の『カドミウム被害 百年 回顧と展望』（桂書房）については、当然ながら、つぎのような批判的なお便りを頂きました。

「祝『定本 カドミウム被害 百年』御出版。この度は本書を有難く拝受。多数の文献・資料に基づいた御労作に心より敬意を表します。イ病とCd問題を論ずる人の立場によって見解の分かれるのは当然かもしれませんが、研究班が長く存在した理由の一例として江頭靖之博士（元・国立予防研究所病理部長、著名な病理学者）の意見を別送します。一筆お礼まで。勿々」。

そして、別便で『所謂イタイイタイ病についての私の考え方』という同博士の七頁の冊子を受け取りました。この内容は「イタイイタイ病の原因は腎病変とは無関係であって、ビタミンドの過剰投与から生じた骨軟化症である」というもので、言わば、イタイイタイ病カドミウム説を書いている私への重松先生からの挑発とも言うべきものでしたので、早速と、『イタイイタイ病カドミウム説を否定する江頭レポートについて』と題する反論書を書いて重松先生に届けました。

その返信は左記のような内容で、併せて、重松説の主張でもありました。

「冠省 この度は江頭レポートに対する貴コメントを有難く拝受。一般に病理学者は自分の目で確かめたもの以外は信用しない傾向があり、江頭博士もその一人かもしれません。彼は『貴公子』のアダ名がある紳士で、江頭レポートも自分の疑問点を率直に表明されたのでしょうか。Cdがイ病の発生に関連することは十分に証明されていますが、イ病多発のCd以外の条件説明も研究者に求められていると思います。一筆お礼まで。勿々」。

小生は、重松先生の述べられておられる条件とは別の条件（らしきもの）を最近主張しているBrett L. Walkerの『Toxic Archipelago』の第四章にある「神通川流域での鉱山事業による疾病史」についての論評に、本年二月から取りかかり、五月頃までに草稿を作り、出来ることなら重松先生にお会いしてこれまでのお礼を述べるとともに、御一読願って御感想を述べて頂くようにお願いしたいと考えて作業中だったのですが、その二月に逝去されたことの連絡を頂き、お会いする機会を逸したことを心から悔やんでおります。

今回、門外の小僧に過ぎない小生にまで、「お別れの会」実行委員会から追悼文を求められ、恐縮しながら、重松先生に関する小生の小さな思い出を綴らせて頂きました。

サルコイドの会

仲村 英一（前・結核予防会理事長）

いつの頃からか記憶が定かではありませんが、元国鉄中央病院長の千葉保之先生をスポンサーとし、最初の頃は結核の研究者、その後はサルコイドーシスの研究者をメンバーとする会合が、年に1回築地の料亭で行なわれておりました。そのメンバーの中心人物の1人が重松先生でした。重松先生が広島に勤めておられたので、ABCCでの御用納めが終わって帰京される年末ギリギリの29日とか30日に開催される会となり、メンバーは主にサルコイドーシス難病研究班の主力メンバーで元国立相模原病院長三上理一郎先生、結核予防会複十字病院長工藤翔二先生、JR 東京総合病院副院長山口哲生先生、その他若手サルコイドーシス研究者が適宜参加されて、時節がら重松先生が約半分スポンサー、あとは参加者ワリカンの会費制で運営されていました。（この頃から、この会を「サルコイドの会」と呼ぶようになりました。）

小生がこの会に参加したのは冒頭書いたように大分以前のことですが、小生が厚生省の初代の難病対策課長で、数少ない難病対策対象疾患に最初からサルコイドーシスを入れたことへの謝意を含めてメンバーに入れて頂いたものと理解しています。

宴会では重松先生独特の語り口が中心で、いつも焼酎のお湯割りの作り方の講釈が含まれ、談論風発、年の瀬の忙しい一時の中でゆったり時間を送ったものでした。

この暮にも、当然のことながら予定した会合が事務局長格の山口先生からの御連絡で、体調不良で会合開催が難しい、とりあえず会合延期にしようとした矢先の訃報でした。永年にわたり公私ともにお世話になった重松先生と焼酎を飲み交わすことも不可能となってしまうました。

心からご冥福をお祈りいたします。

「困った時には必ず助けて下さった恩師、重松先生」

厚生労働省関東信越厚生局長
石塚正敏

重松逸造先生との出会いは、昭和53年、私が厚生省に入省してすぐ、国立公衆衛生院（現・国立保健医療科学院）の専攻課程で1年間の研修を命じられた時のことであった。と、思っていたのだが、実を言うと重松先生は多くの大学で特別講義を受け持っておられたので、私が講義に真面目に出席する学生であったら大学時代に先生とはお会いしていた筈であった（このことは、結婚式＜写真＞のスピーチで暴露されることとなる）。当時、疫学部長であった先生は、疫学の教科書の著者であり、強面（こわもて）の風貌からも近寄り難い存在であったため、その頃は、30年以上に亘る先生との長いお付き合いが待っているとは、予想もしていなかった。

1年後に役所勤務に戻り薬務局に異動して薬害問題を担当するようになり、再び重松先生とのコンタクトが始まる。当時、SMON研究班の班長を務めておられた先生には、和解が成立した後、SMONの恒久対策を研究面から如何に進めるかについて、種々ご相談をしていた。学界に限らず厚生省にとっても、重松先生は重鎮として受け止められていたので、他の局では課長クラス以上が面会に来るのが常であったようだが、これに対し薬務局ではヒラ技官の私がいつも対応していた。それでも先生は嫌な顔もせず、真剣に相談に乗って下さったばかりでなく、役人として至らぬ点は親身になって指導・教育もして下さいました。

当時の薬務局では、SMONの和解は成立したものの、未だ多くの薬害裁判を抱えていた。薬害裁判の上でも「疫学的因果関係」は、重要な争点として位置づけられるようになっていたため、被告国としても疫学論を裁判で展開していく必要に迫られ、この面でも重松先生を“師匠”として頼むことが多くなった。被告側にアドバイスすることは、先生にとって決して楽しいことでないことは容易に窺い知れたが、それでも頼まれれば嫌とは言わずに、ご教示下さる先生であった。

薬務局での私の仕事は、副作用被害救済制度の創設等の前向きな仕事もあるにはあったが、中心的な業務は、あらゆる薬害事件の被告（被告国指定代理人）として裁判所の被告席に座ることであり、法務省の検事に代わって患者や証人の尋問を任されることもあった。「こんなことするために厚生省に入った訳ではない」と悩んだ時には、重松先生が愚痴の聞き役にもなって下さった。30年以上も役人生活を続けてこられたのは、先生に依るところも大きい、と考えている。

多忙を極めた仕事の合間を縫って、薬務局在籍中に結婚式を挙げることになった。最近の結婚式は媒酌人も立てずに自由なスタイルで行われるようだが、私が挙式した当時は、形式にも相当のこだわりがあった。役人の世界では序列が厳格に定まっているため、来賓の席順を決めるだけでもかなり神経を使った。媒酌人には私の所属する医系技官グループのトップである医務局長（当時）をお願いしたが、新郎側主賓に誰を据えるかは相当悩むこととなった。局内で複数の課を兼務していたため、直属の上司も法律事務官、薬系技官と複数の高官が存在したためである。そこで最後に頼ったのが、誰からも文句のでない重鎮・重松先生であった。その頃、国立公衆衛生院に新設された研究課程（いわゆる公衆衛生大学院）に先生の薦めで籍を置いていたので、披露宴座席表での先生の肩書きは「恩師」とさせていただいた。

主賓としての出席をお願いしに伺った時、ご快諾いただいたので何も問題はないと思い込んでいたのだが、実は先生の渡米日と重なっていたことを式の当日知ることになる。

奥様の運転する車にスーツケースと着替えの背広を積み、式場の外に待機させておられたのである。主賓スピーチは披露宴の冒頭で終了するので、奥様のご負担を考えればそのまま空港へ向かわれても良かった筈であるが、写真を見るとお色直しの後も、先生は席に留まっておられる。主賓が早々に退席しては座がシラけるだろう、との温かいお心遣いが伝わってくる1枚として、今回この写真を掲載させていただいた。

結婚式の後程なくして、3年に及ぶ薬務局勤務からようやく放免され、公衆衛生局、三重県庁を経て昭和62年に母子衛生課の課長補佐となって、再び重松先生のお世話になる。当時、ATL（成人T細胞白血病）が、母乳で感染する“がん”として社会的問題となっていた。産婦人科学会は妊婦のスクリーニングを行い原因ウイルスのキャリアには母乳育児を制限するよう主張し、一方、小児科学会は、母乳育児のメリットを犠牲にしてまで制限すべきではない、と主張する。国としてATL対策の検討会を設置することとなったが、問題は誰を座長にするかであった。両者の意見が対立している以上、どちらサイドから選んでもまとまらなないと懸念された。そこで、中立であってなおかつ両者に抑えの効く人物として、やはり重松先生にお願いするしかない、との結論に達した。先生には難しい役どころを快くお引き受け頂いたが、我々が困った時にはいつも、最後の拠り所となって下さるのが重松先生であった。

その後、環境庁勤務時代にも公害病問題で色々にご教示をいただくことになるが、長い役人人生のあらゆる局面で重松先生に助けられ、ご指導を受け続けてきたような気がする。毎年末に開催される国立公衆衛生院疫学部の同窓会で、重松先生の御尊顔を拝し説教を聞いてから年を越すのが恒例となっていたが、昨年末は先生のご入院で寂しい会となった。重松先生の存在が大きかっただけに、再びお声を聞くことができなくなっただかと思うと、心に大きな穴が空いたような気持ちである。

先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。 <合 掌>



昭和57年6月、結婚式に主賓としてご臨席頂いた重松先生。この日は先生も渡米当日で、成田空港へ向かう途中わざわざ式場にお立ち寄り下さった。因みに、媒酌の大谷藤郎厚生省医務局長（故人）は当時、歯科医師国家試験漏洩問題でマスコミの取材攻勢を受け、自宅にも帰れない状況であった。式の翌日が新聞休刊日でなかったら、媒酌人抜きでの結婚式となるところであった。

『比治山の先生』の思い出

WHO 本部事務局長補
中谷 比呂樹

当地に再赴任後 5 年が過ぎましたが、毎年の年賀状を欠かすことなく、先生のご長寿を願ってきたところでした。今年は、賀状が無かったので不安がよぎっていたところの訃報でした。

残暑厳しい中を比治山の放影線影響研究所理事長室にご挨拶に伺った日のことを今でも思い出します。

私が広島県に最年少の県福祉保健部長として赴任した 1994 年当時、周囲は大分心配したとのこと。中四国の雄県、しかも、被爆者支援、福祉と保健の行政サービスの統合、西日本特有の地域特別対策といった課題を抱えた行政分野で、5 年にわたる WHO 勤務を終えて帰国間もない若造で、全国一若い知事を良く輔弼できるか、先輩方も大変な勇断で古巣の厚生省を送り出されたものと思います。送り出された方も大変不安。しかし、1 に県民、2 に職員、3 が無くて 4 が自分と家族といった姿勢なら大丈夫と励まされての赴任でした。

先生には、国立公衆衛生院の疫学部長として何度かご指導を受けたことがあるので、勝手に困ったら相談に伺おうと思っていたのです。まずは赴任当日にご挨拶。残暑の厳しい午後でした。真夏のような太陽、青い空、白ペンキのかまぼこ兵舎を活用した建物、県庁公用車のマツダファミリア。昨日のように思い出されます。先生は、本館の理事長室におられ、あの僅かにかすれた大きな声で「まあ、中谷君。じっくり腰をすえてやることだよ。」と仰ってください、アイスコーヒーを飲みながらの歓談となりました。不安がコーヒーの中の氷のように解けていくことが分かりました。しかし、先生の活発なこと。県庁では、重松先生というより、「比治山の先生」、とか、単に「山の上」とか言われて超然とした存在であられましたが、実態は、人を酷使することの天才。放影研の将来構想や建て替え問題、被爆 50 年記念事業、放射線被爆者医療国際協力推進協議会（HICARE=ハイケア）の運営など。先生も忙しくて大変ですが、対応窓口となる県福祉保健部長も大変。しかし、被爆者支援担当課長の松野明弘氏や同補佐の金本和己氏といった情熱あふれる県庁マンとの堅い結束でそれらに対応することが出来、行政官として一回り大きくなった気がしたものでした。まさに重松マジックでした。

これらから先生の中に見えるものを私なりに思うに、新しい分野に対する科学的アプローチと、それを実務に移す行動力、そして、周囲のものを掌で動かす人間力と包容力であろうと思います。

私も、種々のご縁で WHO に戻り、8 人の事務局長補の 1 人として 40 カ国 300 人の同僚と働いていますが、先生の大きなお姿が今もそのまま憧憬となっています。

及ばずながら、自分を含めて、先生が例示された科学者の顔・実務家の顔・教育者としての顔をもった公衆衛生関係者が世界で育つよう、微力を尽くすことをお誓いして、簡単粗文ではありますが、追悼文とさせていただきます。

重松逸造先生ありがとうございました。

編集後記

2012年2月15日に近親者による葬儀が執り行われた後にご家族の皆様と相談させていただき4月22日に「重松先生とのお別れの会」を開催することとし、生前重松先生とご親交の深かった人達、ご指導を受けた人達にご連絡を差し上げることにしました。折角皆様方に集まっていただくので、この際重松先生への思いを皆様に書いていただき、これから続く若い人達に伝えたいという願いから、重松先生追悼文集をまとめることにしました。

実行委員の方々が手分けをして、案内状の発送先と追悼文寄稿依頼先の名簿を作成し、3月2日に依頼状を発送しました。時間が逼迫しているために3月21日に提出期限を設けさせていただきました。無理なお願いにもかかわらず100人以上の方々から玉稿と関係写真等を寄せていただきました。ご多忙中にもかかわらずご寄稿いただいた皆様に心から感謝の念を捧げたいと思います。

当初は、これだけ多くの人からの寄稿があるとは、まったく予想もしていなかったこともあって、原稿の整理と編集作業をしていただいた自治医科大学公衆衛生学教室の屋代真弓さん、放射線影響研究所事務局の石邊綾子さんに大変な無理を強いることになりました。しかし、二人とも抜群の事務能力を発揮していただき、栃木と広島間の見事な連携プレーによって、まさに神業ともいえる仕事ぶりで4月4日に最終稿を完成し、印刷にまわすことができました。

お二人のお仕事には大勢の方々のサポートとチームワークがあったことは言うまでもありません。一致団結してこの仕事をやり遂げた陰には、重松先生のお人柄と絆の強さがあることは疑う余地もありません。生前の重松先生の笑顔を思い浮かべながら仕事をしていただいたのではないかと思います。お二人を中心とする関係者のご協力をお許しいただいた放射線影響研究所大久保利晃理事長、自治医科大学公衆衛生学教室中村好一教授に心から感謝致します。

平成24年4月4日

「重松先生とのお別れの会」実行委員代表 柳川洋、児玉和紀

柳川 洋 略歴

1966 年 金沢大学大学院医学研究科修了（重松逸造教授）

1966 年～1967 年 Research Associate, Department of Public Health and Preventive Medicine,
University of Pennsylvania（Johannes Ipsen 教授）

1967 年～1977 年 国立公衆衛生院疫学部室長（重松逸造部長）

1977 年～1999 年 自治医科大学公衆衛生学教授

1999 年～2003 年 埼玉県立大学副学長

2003 年～2007 年 同 学長

2007 年～2019 年 （公社）地域医療振興協会アドバイザー（吉新通康理事長）

重松逸造先生のご指導のもと、結核、がん、循環器疾患、原因不明疾患・難病の疫学研究に従事

児玉和紀 略歴

1972 年 広島大学医学部医学科卒業

1976 年～1981 年 Resident in Medicine (3 years) and Cardiology Fellow (2 years), Hospital of St.
Raphael, Yale University School of Medicine, New Haven, Connecticut

1989 年～1999 年 放射線影響研究所臨床研究部 部長

1999 年～2002 年 広島大学医学部保健学科 教授

2002 年～2007 年 放射線影響研究所疫学部 部長

2007 年～2017 年 放射線影響研究所 主席研究員

2018年～ 放射線影響研究所 業務執行理事

重松逸造先生のご指導のもと、放射線健康影響ならびに循環器疾患の疫学研究に従事